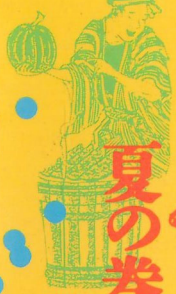
横溝正史
城 昌幸
久生十蘭
都筑道夫
野村胡堂
日影丈吉
岡本綺堂
縄田一男 編

大江戸歳時記 捕物帳傑作選

夏の巻



河出文庫

岡本綺堂　一八七二～一九三九　『半七捕物帳』『修善寺物語』等
横溝正史　一九〇二～一九八一　『人形佐七捕物帳』金田一耕助シリーズ等
城　昌幸　一九〇四～一九七六　『若さま侍捕物手帖』『死者の殺人』等
久生十蘭　一九〇二～一九五七　『顎十郎捕物帳』『金狼』『肌の月』等
都筑道夫　一九二九年生。『なめくじ長屋捕物さわぎ』『七十五羽の烏』等
野村胡堂　一八八二～一九六三　『銭形平次捕物控』『三万両五十三次』等
日影丈吉　一九〇八年生。『ハイカラ右京探偵暦』『恐怖博物誌』等

カバー装幀　巌谷純介
フォーマット　栗津　潔

横溝正史
城 昌幸
久生十蘭
都筑道夫
野村胡堂
日影丈吉
岡本綺堂
縄田一男 編

大江戸歳時記 捕物帳傑作選

夏の巻

河出文庫

大江戸歳時記 捕物帳傑作選 夏の巻
野村胡堂 他
河出文庫

232B
560
*

河出書房新社
定価　560円
（本体544円）

端午の節句は武者人形に鯉のぼり。さあ、いよいよお江戸の夏。花火に映える両国の川開きに山王祭り、七月七日は七夕でそろそろ幽霊の噂が、八百八町の夜の闇を駆けめぐる頃……懐かしい江戸の夏の風物詩にからむ怪事件・難事件に立向う**半七・平次・佐七**の三大捕物名人に加え**若さま侍・顎十郎・ハイカラ右京・砂絵のセンセー**も登場して、ますます好調！異色の捕物ミステリー・シリーズ第2弾

ISBN4-309-40273-9 C0193 P560E

● 河出文庫 ●

岡本綺堂 他　大江戸歳時記 捕物帳傑作選 春　560円
山田風太郎 他　鮎川哲也 他　日本版 ホームズ贋作展覧会 上・下　各540円
佐野　洋 他　お伽噺ミステリー傑作選　560円
仁木悦子 他　メルヘン・ミステリー傑作選　580円
星　新一 他　占いミステリー傑作選　520円
石沢英太郎 他　古代史ミステリー傑作選　540円
江戸川乱歩 他　サイコ・ミステリー傑作選　540円
中井英夫 他　アリス・ミステリー傑作選　500円
赤川次郎 他　学園ミステリー傑作選　500円
阿刀田高 他　学園ミステリー傑作選2　500円
鮎川哲也編　犬のミステリー傑作選　500円
鮎川哲也編　猫のミステリー傑作選　500円
夏目漱石 他　文豪ミステリー傑作選　500円
黒岩涙香 他　文豪ミステリー傑作選2　500円
江戸川乱歩編　推理教室　500円
各務三郎編　ホームズ贋作展覧会　560円

河出文庫

大江戸歳時記 捕物帳傑作選

夏の巻

野村胡堂 他

河出書房新社

大江戸歳時記 捕物帳傑作選 夏の巻 野村胡堂 他 河出文庫

kawade bunko

河出文庫

大江戸歳時記 捕物帳傑作選

夏の巻

野村胡堂 他

kawade bunko

河出書房新社

目次

巻頭エッセイ　半七紹介状　岡本綺堂　七
五つ目の鍾馗　人形佐七捕物帳　横溝正史　三
幽霊駕籠　若さま侍捕物手帖　城　昌幸　四七
氷　献　上　顎十郎捕物帳　久生十蘭　公三
坊主めくり　なめくじ長屋捕物さわぎ　都筑道夫　二元
狐の嫁入　銭形平次捕物控　野村胡堂　三三
幽霊買い度し　ハイカラ右京探偵暦　日影丈吉　八七
半七先生　半七捕物帳　岡本綺堂　三五
解　説　縄田一男　三四

大江戸歳時記

捕物帳傑作選

夏の巻

巻頭エッセイ

半七紹介状

岡本綺堂

明治二十四年の四月、第二日曜日、若い新聞記者が浅草公園弁天山の惣菜「岡田」へ午飯(ひるめし)を食いに這入(はい)った。花盛りの日曜日であるから、混雑はいうまでも無い。客と客とが膳を押合うほどに混み合っていた。

その記者の隣に膳をならべているのは、六十前後の、見るから元気の好い老人であった。なにしろ客が立込んでいるので、女中が時々にお待遠さまの挨拶をして行くだけで、註文の料理はなかなか運ばれて来ない。記者は酒を飲まない。隣の老人は一本の徳利を前に置いているが、これも深くは飲まないとみえて、退屈凌(しの)ぎに猪口(ちょこ)をなめている形である。

花時であるから他のお客様はみな景気が好い。酔っている男、笑っている女、賑かを通り越してそうぞうしい位であるが、そのなかで酒も飲まず、しかも独りぼっちの若い記者は、唯ぼんやりと坐っているのである。隣の老人にも連れはない。註文の料理を待っているあいだに、老人は記者に話しかけた。

「どうも賑かですね」
「賑かです。きょうは日曜で天気も好し、花も盛りですから」と、記者は答えた。
「あなたは酒をお飲みになりませんか」
「飲みません」
「わたしも若いときには少し飲みましたが、年を取っては一向いけません。この徳利も退屈凌ぎに列べてあるだけで……」
「ふだんは兎もあれ、花見の時に下戸はいけませんね」
「そうかも知れません」と、老人は笑った。「だが、芝居でも御覧なさい。花見の場で酔っ払っているような奴は、大抵お腰元なんぞに嫌われる敵役で、白塗りの色男はみんなシラフですよ。あなたなんぞも二枚目だから、顔を赤くしていないんでしょう。あはゝゝゝゝ」
こんなことから話はほぐれて、隣同士が心安くなった。老人がむかしの浅草の話などを始めた。老人は痩ぎすの中背で、小粋な風采といい、流暢な江戸弁といい、紛れもない下町の人種である。その頃には、こういう老人が屢々見受けられた。
「お住居は下町ですか」と、記者は訊いた。
「いえ、新宿の先で……。以前は神田に住んでいましたが、十四、五年前から山の手の場末へ引込んでしまいまして……。馬子唄で幕を明けるようになっちゃあ、江戸っ子も形無しです」と、老人はまた笑った。
だん〳〵話しているうちに、この老人は文政六年未年（一八二三）の生れで、ことし六十

九歳であるというのを知って、記者はその若いのに驚かされた。
「いえ、若くもありませんよ」と、老人はいった。「なにしろ若い時分から体に無理をしているので、年を取るとがっくり弱ります。もう意気地はありません。でもまあ仕合せに、口と足だけは達者で、杖も突かずに山の手から観音様まで御参詣に出て来られます。などというと、観音様の罰が中る。御参詣は付けたりで、実はわたしもお花見の方ですからね」
話しながら飯を食って、二人は一緒にこゝを出ると、老人は麗かな空をみあげた。
「あゝ、いゝ天気だ。こんな花見日和はめずらしい。わたしはこれから向島へ廻ろうと思うのですが、御迷惑でなければ一緒にお出でになりませんか。たまには年寄のお付合いもするものですよ」
「はあ、お供しましょう」
二人は吾妻橋を渡って向島へゆくと、こゝもおびたゞしい人出である。その混雑をくゞって、二人は話しながら歩いた。自分はたんとも食わないのであるが、若い道連れに奢ってくれる積りらしく、老人は言問団子に休んで茶を飲んだ。この老人はまったく足が達者で、記者はとうとう梅若まで連れて行かれた。
「どうです、くたびれましたか。年寄のお供は余計に草臥れるもので、わたしも若いときに覚えがありますよ」
長い堤を引返して、二人は元の浅草へ出ると、老人は辞退する道連れを誘って、奴うなぎの二階へあがった。蒲焼で夕食を食ってこゝを出ると、広小路の春の灯は薄い靄のなかに霞

んでいた。

「さあ、入相の鐘がボーンと来る。これからがあなた方の世界でしょう。年寄はこゝでお別れ申します」

「いゝえ、わたしも真直ぐに帰ります」

老人の家は新宿のはずれである。記者の家も麹町である。おなじ方角へ帰る二人は、門跡前から相乗りの人力車に乗った。車の上でも話しながら帰って、記者は半蔵門のあたりで老人に別れた。

言問では団子の馳走になり、奴では鰻の馳走になり、帰りの車代も老人に払わせたのである。若い記者はそのまゝでは済まされないと思って、次の日曜に心ばかりの手みやげを持って老人をたずねた。その家のありかは、新宿といっても軈て淀橋に近いところで、その頃はまったくの田舎であった。先日聞いて置いた番地をたよりに、尋ね〳〵て行き着くと、庭は相当に広いが、四間ばかりの小さい家に、老人は老婢と二人で閑静に暮らしているのであった。

「やあ、よくお出でなすった。こんなところは堀の内のお祖師様へでも行く時のほかは、あんまり用のない所で……」と、老人はよろこんで記者を迎えてくれた。

それが縁となって、記者はしば〳〵此の老人の家を尋ねることになった。老人は若い記者にむかって、色々のむかし話を語った。老人は江戸以来、神田に久しく住んでいたが、女房に死別れてからここへ引込んだのであるという。養子が横浜で売込商のようなことを遣っているので、その仕送りで気楽に暮らしているらしい。江戸時代には建具屋を商売にしていたと、自分では説明していたが、その過去に就ては多く語らなかった。

老人の友達のうちに町奉行所の捕方、即ち岡っ引の一人があったので、それから色々の捕物の話を聞かされたというのである。

「これは受売ですよ」

こう断って、老人は「半七捕物帳」の材料を幾つも話して聞かせた。若い記者は一々それを手帳に書き留めた。——こゝまで語れば大抵判るであろうが、その記者は私である。但し老人の本名は半七でない。

老人の話は果して受売か、あるいは他人に托して自己を語っているのか、恐らく後者であるらしく想像されたが、彼は飽までも受売を主張していた。老人は八十二歳の長命で、明治三十七年の秋に世を去った。その当時、わたしは日露戦争の従軍新聞記者として満洲に出征していたので、帰京の後にその訃を知ったのは残念であった。

「半七捕物帳」の半七老人は実在の人物であるか無いかという質問に、わたしは屢々出逢うのであるが、有るとも無いとも判然と答え得ないのは右の事情に因るのである。前にもいう通り、彼の老人の話が果して受売であれば、半七のモデルは他にある筈である。若し彼が本人であるならば、半七は実在の人物であるとも云い得る。いずれにしても、私は彼の老人をモデルにして半七をかいている。住所その他は私の都合で勝手に変更した。

但し「捕物帳」のストーリー全部が彼の老人の口から語られたのではない。他の人々から

聞かされた話もまじっている。その話し手を一々紹介してはいられないから、こゝでは半七のモデルとなった老人を紹介するに留めて置く。

五つ目の鍾馗

人形佐七捕物帳

横溝正史

夜光の珠の行方
――鍾馗様の眼には練り玉が――

かねてからごひいきにあずかっている与力神崎甚五郎から、火急の用事があるからすぐまいるようにとのお使いがあったので、辰と豆六をひきつれた人形佐七が、とるものもとりあえず八丁堀のお役宅へかけつけると、

「おお、佐七か。よくまいったな。きょうそのほうにきてもらったのはほかでもない。こちらにいられる御仁がちとおまえに頼みたいことがあるとおっしゃるのでな」

と、甚五郎がひきあわせたのは、四十前後の分別ざかり、人のよさそうな侍だったが、いかにも屈託ありげな顔色だった。

「はっ、どのようなご用件で……？」

と、顔をあげた佐七がふと眉をひそめたというのは、あるじ神崎甚五郎と客とのあいだに、大きな鍾馗人形が、鬼をふんまえて立っていることである。

きょうは四月の二十八日、端午の節句ももうまぢかで、十軒店や人形町の人形店には、軒なみに武者人形がならんでいるが、神崎甚五郎には端午の節句をいわうような子息はないはずだった。

「こちらにいられるのは、さるお屋敷のご用人をつとめていられる緒方十右衛門どのといわれるかただが、そのほうに頼みというのはほかでもない。この鍾馗大臣のことでな」

「はっ、その鍾馗大臣がどうかいたしましたか」

「佐七、かまわぬからもっと乗りだし、この人形をあらためてみろ」

「はっ！」

と、ふしぎそうに眉をひそめた人形佐七が、ひと膝ふた膝乗りだして、つらつら人形を視まもったが、べつにかわったところもない。

それは高さ二尺あまりの、ありきたりの土でこさえた五月人形だった。

「旦那、べつにかわったところも……」

「わからぬかな。それではおしえてやろう。その鍾馗大臣の眼を見ろ」

甚五郎に指摘されて、佐七はおもわず膝をたたいた。

なるほど、その鍾馗大臣の両眼は、ふつうの五月人形の眼ではない。なにやら、きらきら光る玉のようなものがはまっている。

「旦那、あなたのおっしゃるのは、あの玉のことでございますか」

「いかにもさようじゃ。ところで佐七」

と、甚五郎はすこし膝をのりだして、
「人形つくりの釘屋藤兵衛というものが、きのう殺されたということだが、そのほう下手人の当りはついたか」
話がとつぜん、おもいもよらぬ方向に飛躍したので、佐七はふっと眉をひそめたが、すぐ気がついたように、
「旦那、それではこの鍾馗大臣は釘藤のつくったもので……」
「いかにも。それでは緒方どの」
と、甚五郎はかたわらの武士をふりかえって、
「ひとつおてまえから話をきかせてやってくだされい」
神崎甚五郎にうながされて、十右衛門は渋面をつくってうなずくと、ぎごちなく空咳しながら、それでもおもい口をひらいて、
「佐七とやら、お屋敷の名を出すことだけは許してもらいたいが……」
と、そうまえおきをしておいて、ボツリボツリと語りだしたのは、つぎのような話である。
十右衛門のご主君というのは昨年若殿が誕生あそばされて、ことしが初節句であった。
このご主君というのは、よわいすでに五十になんなんとするお年頃でいられるのに、いままで男子出生がなく、家中一統、気をもんでいるところへ、昨年、側室のおはらにはじめて男子出生あそばされたので、殿様はもとより家中一統のよろこびはひととおりではなかった。
さて、その若殿の初節句をむかえるにあたって、殿みずからのご注文で、鍾馗大臣をつくることになったが、それらの宰領をまかされたのが用人の緒方十右衛門である。
そこで緒方十右衛門があれやこれやと、人形つくりを銓衡したのち、白羽の矢をたてたのが、人形つくりの名人といわれる釘屋藤兵衛である。
ところが、この鍾馗大臣をつくるについては、ひとつの注文があった。
と、いうのは十右衛門のつかえるご主君のうちには、代々つたわる秘宝として、夜光の珠がふたつあり、しかもこの二個の夜光の珠は対をなしていた。
いいつたえによるとこの夜光の珠は、ご主君のご先祖にあたるかたが、朝鮮出兵のみぎり、かの地より持ちかえられたものとやらで、むかしから魔除けになると信じられていた。
元来、鍾馗様の像は小児の疱瘡よけになるといわれている。
そこで殿様はかわいい若君のぶじそくさいをいのって、鍾馗の像の両眼に、魔除けの夜光の珠をちりばめることにして、それを十右衛門に命じた。
仰せかしこまった十右衛門は、殿からおあずかりした二個の秘宝を、くれぐれも紛失することなきようにと、かたく命をふくめて人形つくりの釘屋藤兵衛に手わたした。それが三月末日のことである。
「ところがおとといのこと、藤兵衛みずからこの人形を持参いたした。みればこのとおり出色のできのうえに、両眼にもたしかに夜光珠らしきものがちりばめてある。そこでなにげなく拙者もうけとったのだが……」
と、十右衛門は、顔をくもらせて、

「きのう聞くと、その藤兵衛が殺害されたというわさだ。そこでみょうに胸さわぎがして、あらためて人形の両眼をしらべてみたところが……」
「この夜光珠はにせものだとおっしゃるんですね」
と、佐七はおもわず膝をすすめた。
「いかにも、ちょっと見たところではわからぬが、これは南京玉をねりつぶしてこさえたねり玉……。もし端午の節句までにほんものの夜光の珠がかえらぬせつには、拙者は腹かききっておわびをせねばあいならぬ」
と、十右衛門はあおい顔をしてうなだれた。
「どうじゃ、佐七、端午の節句までにはまだ七日ある。なんとかしてそれまでに、夜光の珠を取りもどすくふうはあるまいかな」
神崎甚五郎もかたわらから取りなし顔である。
佐七はなぜか心がさわぐ風情で、じっと唇をかみしめていたが、やがて十右衛門のほうにむきなおると、
「緒方様、ちとおたずね申上げたいことがございます」
「どのようなことか」
「釘藤に夜光の珠をお下げわたしになったことを、ほかにしるものがございましょうか」
「さあ。釘藤には極秘にするよう申しておいたが……」
「でも、お屋敷のほうからもれるようなことは……？」

それにたいして十右衛門は、ぜったいにそのようなことはないとは言いきらず、
「まさか……」
と、言葉をにごしていたが、その眉根にはありありと苦慮の色がふかかった。
「緒方様、さしでたことを申すようですが、なにかご家中に葛藤のようなものでも……」
十右衛門はどきっと佐七の顔を視ると、
「佐七、そのようなことは……かりにそのようなことがあったとしても、こんどの件には関係あるまい。お屋敷で紛失したのならばともかくも……まったく拙者の不行届きというよりほかはない」
十右衛門はすでに覚悟をきめているのか、それ以上はなにを聞いても口をわらなかった。

身代り手本
——古手拭いと二分を引きかえに——

さて、いま問題になっている人形つくり釘屋藤兵衛殺害の一件だが、それはつぎのとおりである。
きのうの朝、薬研堀の裏店にすむ、人形つくりの藤兵衛が殺害されたというわさに、佐七が辰と豆六をひきつれて駆けつけると、藤兵衛の娘のお路が、町役人や近所のひとびとに取りかこまれて、まっかに眼を泣きはらしていた。

「旦那、とんだことができましたそうで……」
と、佐七が挨拶をすると、町役人は渋面をつくって、
「ああ、お玉が池の親分、ご苦労様でございます。いやなことがもちあがって……」
「そして、死骸は……？」
「はい、あれにございます」
みると武者人形の完成したのや未完成のや、いっぱいならんだしごと場に、筒袖にたっつけ袴をはいた藤兵衛の死体が、背中をまるくしてたおれており、その首にはきたない手拭いがまきついていた。
その服装からみると、藤兵衛はしごとのさいちゅうにしめ殺されたものとおもわれる。
「いったい、これはいつだれが見つけましたので……」
「それはそこにいるお路さんが、ゆうべ四つ（十時）ごろかえってきて……」
「お路さんというのは……？」
「はい、藤兵衛さんの娘でございます」
「それが四つごろかえってきたというのは……？」
「お路さんは両国のならび茶屋にでておりますので、毎晩そのころかえってまいりますんで……ところが、親分、お路ちゃんがかえってきたときには、藤兵衛さん、まだ息がありましたそうで、妙なことを口走ったというんです」
「妙なことというのは……」

「お路ちゃん、おまえさんから親分に申上げないか」
「はい。……」
と、涙ぐむお路をだくようにして、がっちりとした体格の男がひかえている。服装からみると鳶のものらしいが、きりりとしたいやみのない男振りである。
「路ちゃん、なにも怖がることアねえ、おまえのしってるとおり申上げねえ」
と、若者にはげまされて、お路がおずおず語るところによるとこうである。
ゆうべお路は四つすぎ、両国のならび茶屋、かさね井筒からかえってきたが、みると仕事場に父の藤兵衛がひっくりかえっている。
びっくりしたお路が抱きおこして声をかけると、藤兵衛はかすかに眼をひらき、
「ああ、お路か……五つ目の鍾馗様の……」
と、虫の息でそこまで言ったかとおもうと、それきりがっくりと息がたえたというのである。
「五つ目の鍾馗様の……？　五つ目の鍾馗様……のと、そういったんだね。いったい、それはどういうわけだえ」
「さあ、それが、……どういうわけか存じませんが、ひょっとするとお誂えの五月人形が、気にかかったのではございますまいか」
お路も腑におちぬ顔色だった。
「それから、おまえはどうしたんだ」

「はい、人殺し……と、大声でさけんだので、近所のひとがきてくださいまして……それから人にたのんで金蔵さんにきてもらいましたので……」

と、お路はちょっと頬をそめたが、あの筋骨たくましい鳶のものは金蔵というらしい。

「金蔵というのはおまえのことかえ」

「へえ」

「おまえはなにかこの家と……？」

「いえ、べつにふかい仔細もねえンですが、ちかごろ毎晩、師匠のしごとのお手つだいにきておりましたので、路ちゃんもあっしがなにかしっているかと使いをよこしたンで……」

「おまえが師匠のしごとの手つだいに……？」

と、辰がそばから疑わしそうな眼つきをみせた。

辰が疑うのもむりはない。鳶のものが人形つくりの手伝いとは妙である。

「へえ、それがちと妙なお手つだいで……」

と、金蔵はてれたように小鬢をかいて、

「と、いうのはあっしが鍾馗様のお手本みてえになっておりましたんで……？」

「鍾馗さんのお手本やてえ？」

と、豆六もおもわず眼をみはる。

「へえ、そうなんです。なんでも師匠はこんどつくる鍾馗様にはとてもだいじをとりまして、それについちゃ、あっしに鍾馗様の衣裳をつけて、手本になってくれと申しますンで。それで毎晩、五つ（八時）から五つ半（九時）ごろまで、そこにあるひげや衣裳をくっつけて、鍾馗様の手本になっておりましたンで……いや、とんだお笑いぐさですが、それでも酒代くらいになるもンですから。……」

と、金蔵は苦笑いをしていたが、いまの言葉でいえばさしずめモデルというところだろう。なるほど、鍾馗様のモデルにふさわしい、たくましい筋骨をしている。

「それで、おまえ、ゆうべもここへやってきたのか」

佐七がなぜか無言でひかえているので、辰がかわって口をだした。

「いえ、ところが……、ゆうべは妙なことがあって、ひとにかわって貰いましたンで……」

「けったいなことちゅうのはなンやねン」

こんどは豆六が口を出す。

佐七はなぜか、毒気をぬかれたようにぼんやりしている。

「それはこうなんで。……」

と、金蔵は小鬢をかきながら、

「面目ねえ話ですが、きのうはいちにちお徒士町の安井様の賭場にいりびたっていたンですが、すっかり敗けがこんじまって……そろそろここへ来なきゃアならねえ時刻だのに、身動きもできません。ところがそこへへんな野郎がそばへよってまいりまして、兄哥、薬研堀の師匠のほうは、こんやはおれが代ってやろう。おまえはもっとここで遊んでいきねえと、二分投げだしてくれましたンで……こっちはもう敗けがこんで、かっと眼がくらんでいるとこ

ろですから、渡りに舟と二分ひっつかんで……」
「鍾馗様の手本のほうはその男にたのんだのか」
「へえ。……」
「いったい、そら、どこのどういうやつや」
「それがいっこう。……なにしろ頬冠りをしておりましたので、ろくに顔も見ずに……」
「おまえは二分もらってそれきりか」
「いえ、あの、そのときへんな野郎がいうのに、おまえに頼まれて身代りにきたといっても、師匠が信用しなきゃ困るから、なにかおまえの身のまわりのものを貸してくれろと、そうそいつがいうもンですから、手拭いをわたしてやりましたンで。……」
手拭い……
と、きいて辰はおもわず豆六と顔見合せる。
「おい、金蔵。その手拭いというのが、藤兵衛の首にまきついているあれじゃアねえのか」
辰がきめつけると、金蔵は蒼くなって、
「じ、じつはそうなんで。……それですからあの野郎。あっしの身代りだなどといってきて、師匠をしめ殺しやがったにちがいねえンで」
そういう顔を辰がにらんで、
「おい、金蔵。いいかげんなことをいやアがって、てめえがくびり殺したンじゃねえのか」
「と、とんでもございません。あっしゃゆうべ夕方まえから、お路ちゃんの使いがくるまで安井様の賭場でとぐろをまいておりましたンで……。嘘だと思うンなら、あちらへいって聞いておくんなさいまし」
「それア調べればすぐわかるだろう」
しごと場の隅にある鍾馗様の衣裳やつけひげをあらためながら、佐七がボソリと言葉をはさんだが、金蔵の言葉にいつわりはなさそうだった。
薬研堀からのかえりがけ、お徒士町の安井様の賭場へまわってみたが、金蔵がゆうべ夕方の七つ（四時）ごろから、四つ半（十一時）ごろ、お路のつかいが呼びにくるまで、敗けいくさに血眼になっていたということについては、たくさん証人があった。
また金蔵に二分かして、そのかわりに古手拭いを持っていったものがあることも、二、三の男がしっていたが、さて、その男の人相をおぼえているものはひとりもなかった。
だが、そのことよりも釘藤殺害の動機がわからず、それが佐七を悩ましていたのだが。
……

達磨とうわばみ
――鬼の女房に鬼神というわけで――

「親分、それじゃ釘藤を殺したのは、夜光の珠を盗るのが目的だったんですね」
神崎様のお役宅をでると、巾着の辰が眼を光らせて息をひそめた。

「そややそや。頬冠りの男ちゅうのが、夜光珠のことをしっていて、金蔵の身代りやゆうて乗りこむと、藤兵衛の油断を見すまし、ぐっとひとしめ絞めよったンや」
「しかし、なあ、辰、豆六、それにしてもおかしいのは藤兵衛よ。藤兵衛はねり玉の眼玉をいれた鍾馗様を、緒方さんのところへとどけているが、藤兵衛はじぶんで夜光の珠をまきあげるつもりだったんだろうか」
「親分、そら、そうにきまってまっせ。緒方さんが気がつかなンだら、じぶんで着服する気やったンやろ」
「だけど、緒方さんが気づかずとも、お家の重宝、いずれはだれかが気がつくだろうよ。そうなったらどんなおもいおとがめを喰うかしれたもンじゃねえ。それにだいいち、藤兵衛というのはそんな悪党かえ」
「さあ」
と、辰も小首をかしげて、
「きのう薬研堀で調べたところじゃ、仏の藤兵衛と異名があるくらいの好人物だということでしたが……」
「だけど、親分、ひとは見かけによらンもンやいまっさかいにな」
「なるほど、それじゃアかりに藤兵衛が、夜光の珠を着服しようとしたとして、だれがそれをしっていたんだ」
「だから、藤兵衛にゃきっとなかまがあったンですぜ。そのなかまと夜光の珠のわけまえのことから喧嘩になって……」
「そのなかまというのが頬っ冠りの男だというのか」
「親分、そうやおまへンのンかいな」
「もし、頬っ冠りの男がなかまだとしたら、なぜそいつは金蔵の身代りなどと、やっかいな手つづきを踏んだンだ。それより藤兵衛のなかまなら、いつだって逢えるじゃねえか」
「あっ、なるほど」
辰と豆六はしょげかえる。
佐七はにんまり微笑をふくんで、
「だから、なあ、辰、豆六、この一件にゃまだまだ裏があるンだぜ。それはそうと、きょうは藤兵衛のお葬いだったな」
「へえ、さようで」
「何刻からだえ」
「八つ半（三時）出棺だということでしたが……」
「よし、それじゃまだまにあうな。これからちょっといってみようじゃねえか」
と、その足で薬研堀へやってくると、出棺まえのごったがえした客のなかから、
「あら、親分さん、ご苦労様でございます」
と、なまめかしい声をかけたのは、三十二、三の大年増、髪を櫛巻きにして抜襟の、ひとめでただの鼠ではないとしれる女だ。

「あっ、おまえはうわばみのお谷じゃねえか。どうしておまえがここに……？」

と、佐七がおもわず眼を視はると、お谷は色っぽい眼でそれをにらんで、

「いやな、親分、うわばみだけはよけいじゃありませんか。ほっほっほ。いえ、冗談はさておいて、このたびはお父つぁんのことで、いろいろお手数をかけます。このうえともになにぶんよろしく」

と、しおらしそうに手をつくのをみて、佐七はまた眼を視はった。

「お父つぁんというと……？」

「あら、親分はご存じないんですか。あたしはそこに仏となっている藤兵衛の娘、そこにいるお路の姉なんですよ」

「なんだ、おまえは藤兵衛の娘か」

と、佐七はぎょっとしたように、辰と豆六をふりかえった。

それもそのはず、このお谷というのは、背中いちめんにうわばみの刺青をせおうているほどのあばずれで、板場かせぎからお目見得詐欺、巾着切りからつつもたせと、女でできる悪事なら、なんでもやってのけようというしたたかもの。

「おっほっほ、親分のあのお顔ったら。……いえねえ、あたしもさんざ親不孝をしてきたから、すこしは心をいれかえて……と、思っているやさきにこんどの騒ぎ。人形づくりの釘藤が殺されたときいて、あわてて駆けつけてきたんですよ。ちょいとおまえさん、親分さんにご挨拶してくださいな」

お谷の声にごったがえす客のなかから、

「親分、しばらくでした。かかあがちょくちょくお世話になりましたそうで……」

と、大きな腹でゆすり出たのは、でっぷりふとってあから顔の、脂ぎった四十男。

その顔を見ると佐七はまた眼を視はった。

「あっ、おまえは達磨の久兵衛。……」

「へえ、だる久でございます」

「それじゃ、おまえたち夫婦になったのか」

「へえ、鬼の女房に鬼神というところで……なにぶんよろしくお願い申上げます」

と、人を喰ったようににやにや笑っている。

この達磨の久兵衛というのは、巾着切りの大親分、なるほど鬼の女房に鬼神である。

「ねえ、親分」

と、お谷は婀娜(あだ)っぽく身をくねらせて、

「お父つぁんを殺したのはいったいだれなんです。そこにいる金ちゃんをだまして、身代りになったという頬冠りの男なんですか」

「さあ、それはまだよくわからねえが……」

「金ちゃんの話によると、頬冠りで顔はよく見えなかったが、たしかに町人にゃアちがいないというンですけど……」

「町人にゃアちがいない……？　すると、お谷、おまえひょっとするとその男、侍かもしれ

ねえと思っていたのか」
「あら、いえ、とんでもない」
と、お谷は久兵衛と顔見合せ、なぜかドギマギするのを佐七は見のがさなかった。
「それより、親分、お父つぁんが死にぎわにいった、五つ目の鍾馗様というのはなんのことでしょうねえ」
と、さぐるように佐七の顔を見る。
「おお、そうそう、そのことでお路ちゃんに聞きにきたんだが、お父つぁんはことし鍾馗様をいくつつくったんだえ」
「はい。あの……、どこかのお屋敷へ納めるのだといってつくった鍾馗様のほかに三つ、合せて四つでございましたけれど……」
姉の存在を恥じるのか、お路は消えもいりたげなふぜいである。
「四つ……？　間違いじゃねえかえ。五つじゃねえのか」
「いいえ、たしかに四つでございましたよ」
と、モデルになった金蔵も口をだす。
「それで、あと三つはどこへ納めたんだ」
「人形町の柳屋さんへ……」
「ねえ、親分、それがおかしいじゃありませんか」
と、お谷は膝をすすめて、

「四つしかつくらないのに、五つ目の鍾馗様とは、いったいどういうわけでしょうねえ」
お谷はまたさぐるような眼つきである。
それを佐七があべこべに、さぐるような眼の色で、
「四つ目にしろ、五つ目にしろ、鍾馗様といったのはどういうわけか、お谷、おまえにゃそれがわかっているのか」
「あれ、とんでもない」
と、お谷はあわてて打消すと、またそっと久兵衛と顔見合せるのを、佐七の眼は見のがさなかった。

ふたり妾
——お玉さんもいまぼてれんで——

「ねえ、親分、藤兵衛はまちがえて、柳屋へとどける鍾馗様のなかへ、夜光の珠をはめこんだんじゃないでしょうかねえ」
藤兵衛のお葬いがでるのを見送って、薬研堀をはなれると、辰がいかにもしたり顔でつぶやいた。
「そやそや、そういうことかもしれまへンぜ。藤兵衛それに気がついて死にぎわに……」
「だけど、それじゃ四つしか作らねえのに、なぜ五つ目の鍾馗様といったんだ」

「そら、もう、断末魔やもン、ひとつぐらい数まちがえよったンかもしれまへン」
「それとも、お路も金蔵もしらない鍾馗様を、もうひとつつくったのかもしれませんぜ。ねえ、親分、これからひとつ柳屋へよって、たしかめてみようじゃありませんか」
「そうよなあ」
と、佐七はなぜか気乗りうすの顔色だったが、また思いなおしたように、
「豆六、それじゃおまえはもういちど、薬研堀へひきかえして、お谷の娘時分のことを洗ってみてくれ」
「へえ、お谷の娘時分がなにか……？」
「仏と異名のある藤兵衛に、どうしてあんな娘がうまれたか。身を持ちくずすにゃ、それだけのわけがあるはず。そこを調べてきてくれ」
「おっとがってんや」
「親分、それであっしは……？」
「おまえはおれといっしょに柳屋へきてくれ」
と、そこで豆六とわかれた佐七が、巾着の辰をひきつれて、人形町の柳屋へやってくると、端午の節句をまぢかにひかえて、人形をかう客がごったがえしているなかから、大きな荷物をかかえた編笠の武士が、佐七につきあたらんばかりにでてきた。
「あっ、こ、これはとんだ失礼を……」
と、佐七は小腰をかがめて編笠のなかをのぞいたが、あいては無言のまま顔をそむけて、

そのままスタスタいきすぎる。
「おい、辰」
と、佐七は辰の耳へロをやり、
「おまえ、あのお武家をつけてみろ」
「へえ、あのお侍がどうかしましたか」
「なんでもいいからつけるんだ。いいか、あいてに気どられちゃならねえぞ」
「おっと、がってんです」
と、辰がすたこらなにくわぬ顔色で、編笠の武士のあとをつけるのを見送って、佐七は柳屋へ入ろうとしたが、なにを思ったのかギョッとしたように、人形買いの客のなかへ身をかくした。
と、むこうからやってきたのは、お葬いについていったはずの達磨の久兵衛。
柳屋の店へ入ると、そのとっつきにある大きな鍾馗大臣に眼をつけて、
「おっ、これやみごとだ。番頭、これや釘藤の作じゃねえか」
「へえ、あの、さようで」
「釘藤の鍾馗はこれひとつか」
「へえ、三つございましたが、ふたつは売れてしまって……じつはこれも売れているんでございますよ」
「なんだ、これも売れている？　いいじゃねえか。おれやこいつが気にいった。ひとつおれ

に譲ってくれ」
「いえ、それがいけませんので。なにしろあいてはお武家様でございますから……」
「なんだ、お武家だと?」
だる久はぎろりと眼を光らせる。
「そうなんで。よほどこの鍾馗様がお気にめしたかして、ふたつ残っていたそのふたつともお買いになり、ひとつはいまお持ちかえりになりましたが、これはまたあしたにでもとりにくるから、だれにも売らずにあずかっておいてくれと。お代もいただいておりますンで」
「ちっ!」
と、久兵衛は頬ふくらませて、
「それじゃもうひとつの鍾馗様は、どういうひとが買っていったんだ」
「へえ、それは横山町の地紙問屋、相模屋さんへ納めましたが……」
「ふうん」
と、達磨の久兵衛は鼻を鳴らして、
「番頭さん、ほんとにこれは売れねえのかい。ちっ、しかたがねえや。それじゃ諦めるよ」
と、店をでていくだる久のうしろ姿を見送って、佐七はおもしろそうににやりと笑った。
その日の夕方ごろのこと、ひとあしさきにお玉が池へかえった佐七が、ふたりのかえりを心待ちにしているところへ、まずかえってきたのが巾着の辰で。
「親分、わかりましたぜ。あの侍は九段下にある三千石のお旗本、江田甲斐守様のご家来で、池内隼人というンです。としは三十五、六だが、男っぷりもよく、なかなかのきれものだということです」
「どうしてそんな詳しいことがわかった」
「なに、江田様のお屋敷へ入るのを見たもンだから、ちょうどそこから出てきた折助にきいてみたんです。ところが親分、ここにひとつおもしろいことがあるンです」
「おもしろいことってなんだえ」
「なにね、ふっと思いついたことがあったもんだから、そこのご用人様のお名前をきいてみたんです」
「そしたら緒方十右衛門さんといったろう」
「なんだ、親分、もうお察しがついていたンですかい。つまらねえ」
辰がつらをふくらませるのを、佐七はなぐさめるように、
「いやいや、よく気がついたよ。大手柄だ。ついでのことに江田様の内幕というのを聞いてこなかったか」
「そこにぬかりはありませんや。その折助を近所の飲屋へひっぱっていって、酒を飲ませてきいたところが、江田様にゃいまご寵愛のお妾がふたりいるんです。ひとりはお美代さまといって、これが去年若殿をうんだンでさあ。ところがもうひとりのお玉さんというのが、これまたいまぽてれんなんで」
「ああ、ご懐胎か」

「そうなんで。ところがこのお玉さんというのは、なんでも池内隼人がどこからか見つけてきて、殿様におすすめしたんだそうで。ねえ、親分、その池内が人形店から出てきたというのは、なにかいわくがありそうじゃありませんか。あいつの抱えていたのは鍾馗様じゃねえンで？」

「まあ、そういうところだろう。辰、おまえにしちゃアなかなかの大できだったな」

「ちっ、なんですい親分、それ、褒めてるンですかい。けなしてるンですかい」

辰がつらをふくらましているところへ、

「親分、わかった、わかった、わかりましたぜ！」

と、糸の切れた奴凧のように、キリキリ舞いをしながらとびこんできたのは豆六だ。

「あのお谷というのはわかい頃、九段下の江田甲斐守様のお屋敷へご奉公にあがってたンやそうな。ところがあの器量やもンやさかいに、殿さんのお手がついたところが、奥方ちゅうのンが物凄いやきもちやきで、殿さんもしかたがなしにお暇を出して宿へさげたんやな。ところが、その殿さンちゅうのが、とても男振りのええかたやそうで、お谷のほうでもボーッときてた。それが生木をさくように引きさかれたもンやさかいに、それからお谷はぐれ出したンやそうだす。ところが、びっくりしたらあきまへンぜ。わて、それから九段下へいって聞いてみたンやが、江田様のご用人ちゅうのが……」

「緒方十右衛門さんというンだろう。そんなこたあ、とっくの昔にしれてらあ。ざまア見ろい」

「ひえっ」

とくいになってまくし立てていた豆六は、毒気を抜かれたように眼をしろくろ。

五つ目の鍾馗

——さあ、夜光の珠をここへお出しよ——

「親分、たいへんだ、たいへんだ。ゆうべ人形町の柳屋へ、泥棒がしのびこんで鍾馗人形を盗んでいったという話です」

「そればかりやおまへン。横山町の地紙問屋相模屋へも泥棒が入りよって、これまたやっぱり鍾馗人形を盗んで逃げたちゅう話だす」

と、その翌日の昼過ぎのこと。

薬研堀へようすを見にいった辰と豆六が、キリキリ舞いをしてとびこんできたが、そのとき佐七はすこしも騒がず、

「あっはっは。おおかたそんなこともあろうかと思っていたよ。ほっとけ、ほっとけ」

「ほっとけ、ほっとけって、親分、ひょっとするとその人形のなかに夜光の珠が……」

「もし、それやったら十右衛門さんは切腹もンや。親分、そんなにのんきに構えててええのンかいな」

「いいも悪いもおいらのしったことか。夜光の珠もでるもンならでてくらあ。それより、お

谷はどうしてる」
「へえ、お谷は親の追善だとかなんとかぬかしやアがって、釘藤のうちに泊ってまさあ」
「だる久もいっしょか」
「いえ、だる久は浅草の家へかえったようで」
「ああ。そうか。それじゃ、辰、豆六、おまえたちもういちどでなおして、お谷を見はってろ。いいか、お谷にすこしでも妙な気ぶりが見えたら、すぐにおいらにしらせにかえれ」
「へえ、それじゃお谷がなにか……？」
「しかし、親分、なんぼなんでもじぶんの親を、殺しやしまへンやろがな」
「なんでもいいからいってこい」
「ひえっ！」
と、首をすくめたふたりは、また、お玉が池をとびだしたが、さて、その晩のこと。
池の端にある出逢茶屋、うれし野の奥座敷で、お谷はわかい男の膝にしなだれかかっていた。
わかい男というのは鳶の金蔵である。
「ねえ、金蔵さん、いやさ、金ちゃん、おまえそんなに固くならないで、やさしい言葉のひとつもかけておくれよ。あたしゃもうこんなに胸がわくわくしているのに……」
と、男の手をとってじぶんの胸へあてがおうとする。金蔵は迷惑そうに顔をしかめながら、さりとてその手を振りはらいもならず、

「姐さん、いったいどうしたもンです。ちょっと話があるからつきあってくれといいなさるから、いっしょにくればこんなところへつれこんで……もし、こんなことが達磨の親分にしれたらどうするンです」
「なんだい、あんなやつ。あたしゃね、おまえさんに惚れたのさ。おまえさんのそのたくましいからだをひとめ見るより、ぞっこん惚れてしまったのさ。ねえ、金ちゃん、鍾馗様のお手本になるくらいのおまえのからだ、ひとめあたしにおがませておくれよ」
と、年増女のあつかましさ、男の帯に手をかけると、するすると解きはじめたから、さすがの金蔵もあっとばかりにおどろいてとびのいた。
「姐さん、い、いったいなにをするンです」
男があわてて帯をたぐりよせようとするのを、お谷はしっかり膝の下にふんまえて、
「なにをするってしれたことさ。五つ目の鍾馗様のからだをとっくりおがませてもらうのさ」
「な、な、なんですって」
「金ちゃん、いやさ、金蔵、しらばくれるのもたいがいにおし。おまえ、夜光の珠をもっているだろう。持っているならここへおだしよ」
「姐さん、そりゃいったいなんのこってす。あっしにゃさっぱりわけがわからねえが……」
「ほっほっほ、まだしらばっくれる気かえ。うちのお父つぁんは四つしか鍾馗様をつくらなかった。しかも、その四つの鍾馗様のどのひとつにも、夜光の珠は入っていなかったンだ。

しかもいまわのきわのお父つぁんの言葉によると、五つ目の鍾馗様といったという。五つ目の鍾馗様というのはすなわちおまえ、鍾馗様のお手本になったおまえのことをいったンだ。おまえ夜光の珠をもっているなら、さっさとここへだしておくれよ」

「姐さん、それやアご無体な。夜光の珠か珊瑚の玉かしらないが、おいらそんなもの見たこともねえ」

「まだ、そんなことをいってるのかい。おまえ夜光の珠を盗んだが、それをお父つぁんに気取られたので、頬冠りの男とやらにたのんで、お父つぁんを殺させたろう。博奕にむちゅうになっていたところへ、だれかが二分くれたので、古手拭いをわたして、鍾馗様のお手本の身代りをたのんだなどと、よくもそらぞらしい嘘がつけたもンだ。おい、金蔵、おまえのなかまはいったいだれだえ。だれに頼んでお父つぁんを殺させたンだ。おい、金蔵、いわなきゃあこれだよ」

と、すらりとふところから抜いてみせた匕首に、さすがの金蔵もあおくなった。

「姐さん、い、いったい、なにをなさるンです。おまえさん気でも狂ったンじゃねえのか」

「なにをぬけぬけいやアがる。いったい、だれにお父つぁんを殺させたンだよう。さあ、いえ。いわなきゃおまえも敵の片割れだ。金蔵、覚悟をおし！」

「姐さん、な、な、なにをするンだ」

あやうく体をひらいた金蔵が、お谷の腕をとって膝へ組みしいたところへ、

「この野郎！」

と、庭からとびこんできたのは達磨の久兵衛。

これまた匕首ひきぬいて、金蔵めがけて突いてかかろうとするところへ、

「待て、待て、久兵衛、お谷もはやまるな。その金蔵はなにもしらねえのよ」

と、声をかけてあいの襖をひらいたのは人形佐七。

そのうしろに辰と豆六がひかえているのを見て、達磨の久兵衛もうわばみのお谷も、毒気を抜かれたように、へたへたその場にへたってしまった。

頬冠りの男
——投げこまれた無名の警告状——

「そういうわけで、お谷は池内隼人さんに、夜光の珠を盗むことをたのまれると、一も二もなく引受けたンです。昔、じぶんを捨てたお殿様、ひとつそのお殿様の鼻をあかしてやろうというわけでしょう。あるいは初恋のなつかしいひと、かわいさあまって憎さが百倍というわけだったのかもしれませんねえ」

その翌日、八丁堀の神崎甚五郎のお役宅へおもむいた佐七は、緒方十右衛門にもきてもらって、しんみりとした話しぶりだった。

「しかし、そんなことをして、じぶんのおやじに迷惑がかかるとは思わなかったのか」

と、神崎甚五郎はいささかあきれ顔だった。

「そこが女のあさはかさで、そこまでは考えがまわらず、いちずに殿様憎やと思いこんだンでしょう。それに、ほかの女が産んだ若殿様の初節句、おそらくやきもちも手伝ってたんでしょうよ」

「しかし……」

と、十右衛門はおもい口を開いて、

「池内隼人にたのまれたというのはじじつかな」

と、どこか沈痛な顔色である。

「へえ、それはまちがいございません。お谷がはっきりいってるンですから」

「しかし、池内はなんだってそのようなことを……」

「それやもちろん、緒方さん、あなたをおとしいれるためでございますよ。夜光の珠をうしなったかどで、あなたが切腹でもなさりゃ、あとは池内さんの天下になる。もし、お玉さまのお腹に男子でも出生すれば、お美代さまのお腹の若殿様をなんとかして、江田様のおうちを自由にしようという腹だったンでしょう」

十右衛門はなにかいおうとしたが、ただひとこと、

「あれは小才のきく男だから……」

と、それだけいって首うなだれた。

「しかし、佐七、それじゃ夜光の珠はどうしたのだ。お谷が夜光の珠を盗んだのか」

「いいえ、旦那、さようじゃございません。釘藤は娘のお谷がにわかに出入りをするようになったので、すぐにその目的をさとったンですね。殿様とのむかしの関係をしってるだけに、娘のもくろみをしったンです。そこで練玉の夜光の珠を、鍾馗様の眼にはめこんで、緒方様のもとへとどけたンです」

「しかし、それはなんのため……？」

「それはいうまでもなく、お谷が夜光の珠のことをしるはずがない。それをしってるとすれば、だれかお屋敷に内通するものがあるにちがいない。だからうっかりするとお屋敷で夜光の珠を抜きとられないものでもない。……と、そう思ったものだから、にせの夜光の珠をはめこんで、しばらくようすをうかがっていたンです。ところで緒方様、釘藤が鍾馗様をお屋敷へとどけた日、池内さんが見にきやアしませんでしたか」

緒方十右衛門は無言のままうなずいた。

「池内さんはそれでにせものだと気がついた。そこでその晩、薬研堀へしのんでいって、釘藤をしめ殺したンです」

「それじゃ、池内が夜光の珠を盗んだのか」

「いや、ところがそのまえに妙なことがありました」

「妙なこととは……？」

「それが、正体不明の頬冠りの男が金蔵にたのまれたといって、鍾馗様の手本の身代りにやってきたンです。そのとき、釘藤はなにかあやしい気配をさとったンでしょう。そこで、その男に鍾馗様の衣裳を着せてやるとき、すばやくそいつの掛守りのなかへ、二個の夜光の珠

をしのびこませた。そんなこととはゆめにもしらず、その男はしばらく鍾馗様の手本になって引きあげたが、そのとき、池内さんがしのんでくるのに出逢ったンですね」

辰と豆六は呆れたように顔見合せる。

親分はいつのまにそんなことを調べたのだろう。

「しかし、そのときにゃその男、つまり金蔵の身代りをつとめた男……。頬っ冠りの男は夜光の珠のことはもとより、池内さんのたくらみなどもしらなかったから、そのまま見過してかえったンですが、あとになってなにもかもわかった。……」

「どうしてなにもかもわかったンだ」

佐七はにんまり微笑をふくむと、

「それはおととい、ここへあがって、緒方様から夜光の珠のいきさつを聞いたからです。それまではなんのために釘藤が殺されたのか、それがわからずに弱っていたンですが……」

「な、な、なんだって。佐七、それはどういう意味だ。おととい、ここへあがって緒方どのより話を聞いたとは……？」

「緒方様」

と、佐七はいたずらっぽい眼を十右衛門にむけると、

「もし、まちがってたらごめんくださいまし。あなたじゃないんですか。釘藤に注意をするようにと、あっしのところへ無名の手紙を投げこんでいかれたのは……」

「お、お、親分！」

と、辰と豆六は呆れかえり、十右衛門はふかく首をうなだれる。

「やっぱりあなただったンですね。お屋敷のお名前をだしたくないというお気持ちはわかりますが、それならそうと、もっとはっきり書いてくださりゃあ、あっしにもほかにしようがあったものを。ただ釘藤に注意をしろというだけで、なにがなにやらわからなかったもンですから、あっしゃ身分をかくして、金蔵の身代りになり、釘藤のところへいってみたンです。しかし緒方様、おかげで夜光の珠はたすかりました。それ、おかえし申上げますよ」

と、肌にかけた掛守りのなかから、佐七が二個の夜光の珠をさしだしたとき、

「佐七、かたじけない」

と、緒方十右衛門はその場に手をつき、神崎甚五郎と辰と豆六の三人は、呆れかえってしばらくロもきけなかった。

緒方十右衛門はうすうす池内隼人の陰謀に気がつき、佐七に夜光の珠の保護をたのみたかったのだが、あからさまに書くとお屋敷の名前が出るので、それとなく釘藤に注目するようにとほのめかしたのである。

佐七はなにがなにやらわけがわからなかったが、金蔵が毎晩、釘藤のモデルになっているとしって、その友人といつわって、釘藤に接近していったのだ。

釘藤はそれをしんじつ、金蔵の友達と思いこみ、あとでまた取りかえすつもりで、いちじその掛守りのなかへ夜光の珠をかくしたのである。

したがって、釘藤が死にぎわにいった五つ目の鍾馗とは、なんと、人形佐七のことだった

のだ。

それから二日ののち、池内隼人が九段のお堀端で、なにものにともしれず殺されているのが発見されたが、下手人はついにわからずじまい。

そして、その日以来、達磨の久兵衛とお谷は江戸からすがたを消したが、佐七はそれを追究しようともしなかった。

涼み船

「……まあ、奇麗！……今のはずいぶん、大きな花火！……」

窓かまちにはすかいに腰掛けて、船宿喜仙のひとり娘、ことし十八になる、おいとはこうはしゃいだ声で叫んだ。あらい模様のちりめんゆかた、湯上がりに薄化粧した、その姿は、たいそういきに見えた。

ここは柳橋米沢町、喜仙の大川沿いの奥まった一間。すだれも巻き上げ、ふすまも取り払った夏座敷。——夜になってから、そよとも風がないので、蚊やり線香の細い煙が、かなりの高さまで、上っている……。

ポーン！　ポン、ポン！

「わあッ！　たまや！」

一瞬、この部屋の中まで明るくなる。

「よく上がりますこと、今夜は……。ちょッと、若さま、そんな所でお寝ってらッしゃらないでごらんなさいましな。花火があとからあとから……あら、また、まあ大きい」

部屋の床の間寄りに、若さまと呼ばれた三十前後の侍が、座ぶとんを二ツ折りのまくらに、ごろりと横になっている。晩酌のあとで、ウトウトしているらしい。

「それに、今夜は涼み船がたくさんに出て、たいへんなにぎわい……」

川の面は、涼み船や、花火船、物を売る小船などのちょうちんと、花火とで、時おりはさおの水脈が見えるほどに明るい。その上を、弦歌のさんざめきが、花火をほめる声と交じって、にぎやかに浮き浮きと流れて来る。

遠く、両国橋が、夜目にも白く、大川を帯のように黒々と横切って、近くの船で打ち上げる花火明かりに、橋げたがいまさらのように大きく、くっきりと浮いて見える。

橋上を涼みがてら、花火見物がてらの群衆がゆるく動いている。

「おや？」

おいとが、またこういった。うたた寝の若さま侍を相手にしているというよりも、むしろひとり言のような口調で。

「あの船頭さんは、するが屋の清さん……すると、芸者衆はきッと、蝶次姐さんに違いない……」

それは、この喜仙の座敷の下近く、こぎ寄って来た、ひときわ、陽気に、さわぎ歌に打ち興ずる涼み船だった。と、

「なぜわかる？」

急に、こう、寝たとばかり思っていた若さまが、寝とぼけた声で尋ねた。
「あら、いやな若さま、起きていらっしゃいましたの？……花火がそれは奇麗……？」
吹けよ川風、上がれよすだれ
中の小唄の顔見たや……
若さまは、こんな唄をうたい出した。わりにいい声だ。
「ホホホホ……ほんとにおじょうず」
と、その涼み船の三味線が、変に調子を狂わせたか、と思うと、パタリとやんだ——糸でも切ったものか。
「船頭が清さんだと、どうして芸者は蝶次なンだ？　え？　おいと坊……」
「ホホホ……それは、あのふたりの仲というものは有名なんですもの、この土地では……」
「なるほど。それで姐さんは間を狂わせて糸を切ったッて寸法か、ハッハッハ……」
だがすぐ糸を継いだと見えて、にぎやかにさわぎ歌が改めてひき出された。
ポーン！　ポン、ポン！
「わあッ！」
と和して叫ぶ、船の客、橋上の群衆。
「まあ！　早打ちですよ、若さま……とても奇麗、ちょッとごらんなさいましよ……」
窓から乗り出すように半身突き出して、おいと坊は、花火の美しさに興奮してこういった。だが、若さまは起き上がろうともせずに、今度はごろンとあおむけになって、低い声で、こんなくだらないことをつぶやいていた。
「……春むすめ、夏は芸者に、秋は後家、冬は女郎で、暮れは女房……か、……蝶次姐さんは清さんにほれているか、……おいと坊、蚊やりが絶えたようだぞ……」

麦湯の女

「いけねえ……やっぱり、そうかな？　これア？……」
と、こう思うと、とたんに背筋からかけてぞくりと寒くなって、本所御米蔵の近くに住む、植木屋の由蔵は、思わずその猪首を縮めた。
「鶴亀々々……」
振り返ったのがいけなかった。ほんの瞬間の一瞥だったが、白ッぽい姿が、やみに溶けきらず変にきわだってゆれて……。
梅若塚の先まで、用があっての帰り、五月初旬の、また一降り来そうな、上がりきらぬ暗い梅雨の晩——それも深夜今の十二時近く、古川を渡って、牛の御前あたりへ、さしかかった野良道だ。
あたりは寂然と静まり返って、ただカエルの声、地虫の鳴く音……。
黒々とそこに疎林……、由蔵がぶら下げている小田原ぢょうちんの明かりだけが、ぼうと足を、それから逆に、胸から顔を映し出しているだけの暗やみ。

陽気はなま暖かいが、湿気を含んだ空気が膚に重たく感ぜられる。

ぴたぴたぴたぴた……足音も聞こえて来た。

年がいもなく、根がおくびょう者の由蔵、初夏の晩だというのに、からだが変に小刻みにふるえるという始末。……おそいから泊まってゆけッてんだから一晩、厄介になれあよかった、と、いまさら後悔した。

「……この辺にア悪いキツネが出るとかいうそうだが……」

由蔵は指につばを付けるとまゆ毛をこすった。そんなことはないと思うもののいよいよ気持ちは逆にこわくなって来る。と、

「もしもし……」

とうとう呼び止められた。——女の声だった。

「へッ、あっしですかい?」

それでも、こう答えて、おそるおそる振り返ってみると、何やら白ッぽい着物の女がひとり、しょんぼり。

「あのウ……」

低い、か細い声だ。

「芸州屋さんというお宅は、どちらでございましょう?……」

「芸州屋さん?」

それなら知っている。由蔵がかねて出入りの屋敷だ。彼はなるべく女の顔を見ないように

しながら、口早に答えた。

「そのお宅はね、もう少し先の三つまた道を折れて、だらだら坂をおりた、お稲荷さんのそばの大きな構えでさア……」

「……ありがとう存じます」

何か、その女は、思い詰めた、真剣な表情をしていた。——よく落ち着いて見れば、やせて、やつれてはいるが美しい面だちで、つまり病み上がりとでもいう女だった。

由蔵から聞くだけ聞くと、また、ぴたぴたと足音をさせながら、教えられたとおりの道を急いで行った。……じき、その姿はやみにのまれてしまった。

「だが、変だぞ、これア?……」

同じく由蔵も急ぎ足でいつかちょうちんが消えたことにも気がつかず、恐怖でいっぱいになった顔つきで考え込んだ。

「今の女ア……確かにおれア見たことがある……芸州屋さんへ用事があるというンだが、何の用だろう? この夜ふけて……」

すると、その時、いなずまのように、由蔵の脳裏にまざまざと浮かび上がって来た、一つの記憶があった。

「あッ! そうだ! 今の女ア、死んだ、おこうさんによく似ていた! いンや、そッくりそのままだ?」

由蔵は棒立ちになった。血の気が一ぺんに引いてずウんと足元から地の底へ、引き込まれ

るような戦慄を覚えた。

「……三年ばかり前、心中した、芸州屋さんのひとり娘、おこうさんに違エねえ！」

もうたまらなかった。彼はころげるように駆け出した。幽霊だ、あれア幽的に相違ねエと心の中で叫びながら……。

そして、それからどこをどう駆け抜けて来たものか由蔵は、やっと灯の見える町家続きへ出たものだ。

「ああ、やれやれ、助かった……」

——夜ふけの町に、ぼうとうるむように灯がにじんで、竪あんどんに、赤い地紙へ黒く「むぎゆ」と書いた一軒の店があった。縁台が二、三置いてあるが、客はだれもいない。

「こんばんは……」

縁台に腰をおろすと、由蔵はやけに手ぬぐいで顔じゅうなで回した。とんだことだった。

「今晩は、もう寝ちまったのかい？」

だが、店の奥からは何の返答もなかった。しんとして、人の気もないようだ。

「おう、麦湯を一杯くンねえな……」

けれど、やはり何の答えもない。締め忘れて寝てしまったものか？

「だれもいねエのけえ？」

念のためといま一度、由蔵がやや、大きな声でいった時だった。ほとんど同時ぐらいに裏木戸がバタッと締まる音がして、

「ハイ……」

という返事が聞こえた。

「おそくなってから、すまねエ……麦湯を一杯、もれエてえンだが……」

「はい、ただいま……」

そして、奥から女がひとり、今まで寝てでもいたのか、身づくろいしながら出て来たが、その顔を、一目見るなり、由蔵はぎくッとして思わず縁台から腰を浮かした。

「あッ！」

次の瞬間、彼はもうあとも見ずに、それこそ宙を飛ぶように、駆け出していた……。

「あの女だ……！　さっきの幽霊だ！　麦湯の女ア、あの女、死んだおこうさんそッくりだ！　いけねエ！　今夜ア、おれのからだに幽的がついて回りアがったぞ！」

「……と、いうンでございますがね」

と、岡ッ引き、遠州屋小吉が、若さま侍に語るのだった。

「まあ、気味の悪いお話！」

若さまが何かいう前に、かたわらで目をまン丸にして聞いていた、おいと坊が引き取った。

ここは、いわずと知れた、例の船宿喜仙の奥の一間、若さまが唄をうたった翌日の晩だ。相変わらず、ほろ酔いのひじまくら。

もっとも、今夜は昨夜と違って夕立がぐれて本降り。大川もずンと寂しく、だが、かえって陽気は涼しくなってしのぎよい夜だ。

今夜、遠州屋小吉がここへ来たのは、この間の猿回しの事件に、若さまに骨を折ってもらったお礼かたがたのごきげん伺いなのだった。ところが例によって、若さまが、何かおもしろい話はないかな、という持ち前の質問に、では、こんな怪談はいかがと話し出したのが、この植木屋由蔵の幽霊一件だ。

「それで、親分さん、その女の人は……ほんとうに幽霊なンですか？」

おいと坊はこわごわ重ねていった。

「それが……」

と小吉はちょっと、薄笑いしながら、

「どうも本物らしいんですよ」

「え！　まあ、こわい」

「その翌日、由蔵のやつも気になると見えましてね、三囲の近くの芸州屋の家へ、わざわざ出向いて、昨夜、これこれの女が夜中に尋ねては来なかったか、と尋ねたもンです。すると、妙なことには、女なぞひとりも来ない、それに昨夜は家内じゅうが早寝した、と、こういう返事なので、さてこそという訳になり、芸州屋へは死んだ娘が幽霊になって出るそうだと、かいわいもっぱらのうわさで、ハハハ……もっとも、おこうというひとり娘が、父親を恨んで、三年ほど前の秋、心中したのはほんとうのことなンですがね……」

「いや、あたし……」

「ハッハッハッ、おいと坊、すっかり参ったな、ハッハッハッ……」

若さまがおもしろそうに哄笑した。

芸州屋四郎兵衛

「……こないだの晩、お話し申し上げました、例の植木屋由蔵の怪談ばなし、あれが、どうもこうちょいと妙なことになってまいりましたンで」

あれから、中一日置いた日の晩、遠州屋小吉が、また、喜仙の若さまを訪れると、こんなふうに話し始めた。

「変なことッて、あの娘さんの幽霊のことですか？　親分さん？」

床柱に、よりかかって、じだらくに立てひざしている当の若さまが、まだ何ともいわないさきに、せっかちな性質のおいと坊が、まじまじとした顔つきになって、こう、話を横取っていった。

「そうなンで……、また、出たもンです、死んだ芸州屋の娘の幽霊がね」

「まア……」

「いよいよ、本物か、と世間じゃア取りざたしているようですが、あっしらの稼業の者の目から見ると、どうもこの一件にゃア、少し臭いところがあるンで……」

遠州屋小吉は、ちょっと、一息ついたあとで、思い出したように、バタバタと気ぜわしく扇子を使いながら、また、その話を続けた。

「それッてえのが……実は、その芸州屋の主人が、四日ほど前の晩、大川の涼み船の中で急に病気になりましてね」

「幽霊のたたりか知ら?」

おいと坊が、こわそうにいった。

「というんですがね……」

と、小吉は一応受けておいてから……

——その問題の芸州屋の主人、四郎兵衛という男は、ことしで、六十の坂を二ツ三ツ越したかという老人、以前は若い時から、ずッと生涯の大半を、蔵前のお札差し、青柳屋方でついに一番番頭になるまで勤め上げたというりちぎ者だった。

それだけに、これという道楽もせず、いつか小金をたんまりと残し、家作もあり、また、表向きではないが金貸しもやっているという何不足ない金持ち隠居だった。

当時は、向島、三囲神社のかたわら、後ろに、こんもりとした森を背負って閑静な所に、風雅な茶屋好みの住まいを構えている。

家族というのは、その芸州屋四郎兵衛と二十年の余も、まめまめしく仕えている婆やと、そのむすこで庭番の武吉、ほかに下女がふたりという、ひっそりした暮らしだった。

「ですから……」

と、小吉はいうのだった。

「そんなあんばい式に、おとなしく金利の勘定でもしていて、日を送ってれア何でもなかったンですが、ことしの三月ごろ、お花見のくずれで、以前の交際の連中と、柳橋で遊んだのがまちがいの元……その地の芸者で、ひどく気に入ったのができました」

若さまは何か手いたずらしている。見れば懐紙で、かんぜよりを作っている。もう三、四本でき上がっている。

「……年がいもないといっちまえば、それまでですが、考えてみると、何がさて、その年になるまで商売一方で通して来た男、それが生まれて初めて覚えた茶屋酒の味ですから、こてえられませンや、それに第一、軍用金にゃことかかず……せっせと通い出すようになりました」

「……親分さん」

と、おいと坊は口をはさんだ。

「その芸者衆というのは、もしや、蝶次姐さんじゃアありませんか」

「そうですよ。蝶次という、この土地じゃアなかなかの売れッ妓だそうで……四郎兵衛は死んだ娘に似ているというのでかわいがったそうで……」

——ところが、さっきもいったように、四日ほど前の晩、その夜も、いつものとおり芸州屋四郎兵衛は、蝶次をはじめ呼びつけの芸者などを二、三人と、涼み船を大川に浮かべた。

ところが、その晩、もうひとり、新顔の同行者があった。それは……。

遠州屋小吉は語る——。

「四郎兵衛の実の弟で、養子に行った、松井道庵という医者なんで……。兄貴よりは十ほど

年下の男で、元の溜池の山口様のご典医なンだそうですが、何でもひどい見立て違いをやらかしてお役ごめんとなったというしろものなんです……」

——それで、松井道庵はやむをえず、兄の四郎兵衛に泣きついて、若干の資本を出してもらうと、浅草、東仲町辺で、町医者の看板を上げた。

ところが、運が悪いという時は、しかたのないもの、開業そうそうのうちに火事にあって、いっさいがっさいが灰になってしまった。

「……不運続きだもので、それから、道庵はすっかり世の中にあいそうをつかしましてね」

と、小吉は、いつか、熱心に聞いているおいと坊のほうを向いてしゃべっている。若さまは、そでにされたのも知らぬげにかんぜよりに余念がない。もう十本を越えた。

「……養子の伍助というのとふたり、本所横網町辺の裏店にひっそくして、その伍助を、昔のよしみで、日本橋のさる生薬問屋に奉公させて、その仕送りで、ほそぼそと世を送るようなはめになったもんです」

——ところが、四郎兵衛は妙にこの場合、因業だった。

というのは、自分の実弟が、かくまで、零落しているのにもかかわらず、助けてやらないばかりか、かえって町医者開業のために融通した金子を返却に及べと厳談するのだった。

「……何しろ、芸州屋四郎兵衛という爺はよくねえ爺で……」

「ホホホ。……でもずいぶん、あんまりのしうちでございますねえ……」

とおいと坊は神妙に同意した。

「……すると」

どうした風の吹き回しか、その日も借金の催促に来た四郎兵衛が、どうだ、おれといっしょに涼み船で遊ばないかと、道庵を誘ったものだ。というのは、たぶん、自分が熱愛している芸者を見せて自慢したいという下心ではないかと察せられるのだが……

「そんな訳で、その晩の涼み船には、弟の道庵が加わっておりました。すると、例のとおり大川に船を出して、弟にこれ見よがしに、ドンチャンドンチャンばかッ騒ぎをやっているうちに、急に、四郎兵衛が腹痛を起こしました。はてはウンウンとうなり出す始末……」

そこは、お手のもので道庵が、さっそくみたのですが……どういうものかますます病がこうじて船宿で小半刻ばかり横になっていましたが、ともかく、一応、うちへ帰したらよかろうということになり、駕籠を呼ぶことになりました。……道庵は、それより少し前に、いったん、家へ帰って薬箱を取って来るから、といって、その時にはいなかったそうで……」

「……」

おいと坊は息を詰めて、じっときいている。若さまは、こよりを作るのにも飽きたのか、今度はいよいよ、お行儀悪く、ごろりと人前もはばからず、ひじまくらになってしまった。まだうたたねしないのがめっけものかも知れない。

「……駕籠を呼ぶと、なにぶんにも、病人だからあまり揺れないように静かにやれと注意して、四郎兵衛は三囲へ戻りました」

遠州屋小吉は、ここで息を継いだ。

「おいと坊、いい気になって聞いてばかりいないで、親分にお茶でも上げないか……」
若さまが珍しく口をきいた。
「あら、ほんとに、うっかりしておりまして……」
おいと坊が、あわてて立ち上がった。
「これア、どうもごぞうさで……」

幽霊駕籠

……芸州屋四郎兵衛を乗せた町駕籠は、柳橋から左へ、並木の通りをまッすぐに、御蔵前から、やがて、御厩の渡し、駒形堂から右へ大川橋を渡ると、すぐ左へ切れて向島へさしかかった。
客は病人だから、なるべく、ゆっくりやってくれと注意があるので、牛の歩みのごとくのろのろと、ここまで来るのに、もうだいぶ時刻がたった。
今の午後十時を回ったころにもなろうか。
夏の晩ゆえ、暑苦しいまま、そこここに、縁台を持ち出して町内の小町娘の品定めやら何やらむだッ話に花を咲かせている若いもんや、王より飛車をだいじがる将棋やら、涼みのそぞろ歩き……、おりおりには、町家の屋根裏に花火が思いがけなく、ぱアと大きく開いたり……。

だが、そんな夏の景物も、向島の土堤へ掛かったころから、ぱったりと絶えて、行きかう人もごくまれになった。
「うーン……うーン……」
駕籠の病人は、ほとんど、出た時からうなり続けだった。あたりが静かになるとよけい耳につく。
「……ク、苦しい！　うーン」
もだえると見えて、時々、駕籠が激しく左右に揺れた。
「……ま、まだかね、駕籠屋さん……」
四郎兵衛は何べんもこの問いを発した。
「もうじきでござンすよ、旦那……」
先棒が気休めをいう。
「……ハ、早くやッてくれ、……シ、死にそうだ。うーン……」
そして、彼の病勢は、さきほど、柳橋を出た時よりも悪化するかに思われた。わざわざ自宅まで運ばずに、船宿で寝ていたほうが、よかったかも知れない……と、駕籠屋はひとごとながらきのどくがった。
「さ、旦那、お喜びなせエ、もう向島ですぜ……あと、ちょっとのご辛抱だ」
土堤へ掛かった時、先棒が、大きな声で、四郎兵衛に勇気づけた。
「……ああ、ありがてエ……」

だが、もうこの時分には、よほど病勢はこうじたと見えて、彼は低い小さな声で、やっと答えたほどだ。

「相棒、ちッと急ごうぜ！　途中で手間取ることアねエぜ！」

さすがに駕籠屋も気になると見えて、

「よし合点(がってん)だ」

というと、歩調を早めた。

「……もし、駕籠屋さん……」

「へッ？」

思わず、棒鼻を押えられた気味で、ふたりはまた歩調をゆるめた。

三囲神社のてまえ、片側が、ある寮の建仁寺がきになっている暗い道だった。

「……あの、駕籠のおかたは、芸州屋さんではございませんか？」

見ると、女だ。何やら白ッぽい着物で——やせて、やつれてはいるが、面だちの整った、つまり病み上がりとでもいう娘だ。

「へえへえ、さようで……」

「ああ、やッぱり、そうでしたか……」

その女は、低い、とおるような声でいった。

「……どうもご苦労さんでした……行き違やしないかと、ずいぶん……」

そして女は、駕籠といっしょに歩き出した。

「姐(ねえ)さんは芸州屋さんのお宅のかたで？」

先棒が尋ねた。

「ええ、そうです。……さきほど、柳橋から、父が急病で、駕籠で帰るという知らせでしたので、心配のあまり……」

「おお芸州屋さんのお嬢さんで……それアご心配でござンしょう……、何しろ急なご病気で……」

——駕籠屋のちょうちんが一つだけの明るさ。ほかのいっさいは、ともすればやみに溶け入りそうな暗さ……。

「うーン！　ク、苦しい……」

病人が、また、低い声でうなった。

「もうじきでございますよ、もうちょっと、ご辛抱なさいまして……」

女は、駕籠をのぞき込むように、歩きながら、かがんでいった。

「……うーン！　だ、だれだい、おまえは？」

苦痛にゆがんだ顔を上げて、駕籠の心棒(しんぼう)を握りしめ、四郎兵衛はうなりながら尋ねた。

「……おこうでございます」

「……う、うーン！　ナ、何だって！　そんな……カ、駕籠屋ア……」

苦しいながらも、四郎兵衛は必死になって、こう叫んだ。

「もうすぐでございます、旦那」

後棒が早合点して答えた。

「……う、うーン……お、おこうだと？　……ソ、そんな……」

――その時、駕籠はほどなく芸州屋の門口に着いた。

「ちょっと待ってくださいね、わたし、裏口から回ってあけますから……」

「へえ……」

女はいけがきに付いて回り、すぐやみにのまれてしまった。駕籠をおろすと、そのふたりは息を入れてしたたる汗をぬぐった。

と、それが妙なことには、いつまでたっても森閑としていて、門を開いてくれるどころか、中から人のけはいさえしない。

「どうしやがッたんだ、え？　あけてくれねエじゃねえか？」

「妙だな……それに早くしねえと病人は参っちまいそうだぜ……たたいてみよう」

ドンドンドン！

「今晩はア！　芸州屋さん、今晩はア！」

……ややしばらくして玄関口へぼうとあかりがさすと、婆やがひとり出て来てあけてくれた。

「婆やさん、旦那がお帰りなンだ」

「へッ？　旦那さまが？……それはそれは……今夜は向こうでお泊まりとばかり思っておりましたので、つい皆、寝込んでいて……」

「冗談じゃアねえよ、さきほど、旦那が急病だッてエご注進があったはずだぜ、え？」

「いいえ、何にも……」

「だって、おかしいじゃアねえか、寝とぼけちゃいけねエぜ、婆さん、……たッた今、お宅のお嬢さんが、お駕籠のお出迎いにいらしたンだ……！」

「うちのお嬢さん？　だって？……」

「そうよ。なア相棒。確か、ご自分じゃアおこうとかいってたようだったなア……」

「え？　ナ、何ですッて、駕籠屋さん、その人が、おこうさんですッて？」

「何を驚いてるンだ、婆さん……」

「南無阿弥陀々々々々……駕籠屋さん、そのおこうさんとおっしゃるお嬢さまは三年ほど前に死なれたかたですわい？」

「え？」

駕籠屋は思わず、こう叫ぶと、お互い顔を見合わせて立ちすくんだ。

「う、うーン……ク、苦しい……、うーン！」

芸州屋四郎兵衛のうなり声が、ひときわ、その三人にはものすごく怪しく聞かれた……。

おこうと伍助

「……芸州屋四郎兵衛は、その夜のうちに死んでしまいました。苦しみに、苦しみ抜いたそ

うで……」

小吉は、なおも語り継ぐのだった。

「やっぱり取り殺されたとでもいうンでしょうかネェ、その、おこうさんという女の幽霊に……」

おいと坊は居ずまいを直すと、こわそうにいった。

「まア、そんなあんばいで……。何でも、四郎兵衛は、それから高熱にうなされて、許してくれ、おこう、おれは決して悪気でいけないといったンじゃアない、おまえの行く先々のことを思えばこそ、青柳の若旦那へ嫁けといったんだから……許してくれ、おこう……と、いい続けにいって、そのまま、息を引き取ってしまったそうです」

「それで、そのおこうさんは、いったい、どうして心中するようになったのです。小吉さん……？」

と、おいと坊が尋ねる。

「いよいよ、その心中一件をお話しします。今から三年ほど前……」

——芸州屋四郎兵衛のひとり娘、おこうは父親は醜男であるにもかかわらず、小町といわれるほどの美人だった。

どちらかといえばやせぎすの、ほっそりしたうりざね顔で、色の透きとおるほど白い、物静かな性質だった。元来じょうぶでないからだが、久しく痨咳をわずらって、一年の半分は床についているようなぐあいだった。

この、おこうを見そめたのが、四郎兵衛の旧主家、青柳屋のそうりょうむすこだった。ぜひとも嫁にくれ、ということになった。

四郎兵衛に取っては、願ったりかなったりの話で、二つ返事ですぐ承知した。何しろうまく行けば、青柳屋の身代を自分が左右することができるかも知れないのだから。

ところが、平素は何によらず、父親のいうことにはハイハイと、逆らったためしのないおこうが、この縁談ばかりには頭をたてに振らなかったのである。

「なぜだ？　こんなよい縁談は二つとあるまいが……何が気に入らぬ？」

おこうの返事は決まっていた。

「……気が進みませんので」

だが、それくらいのことで、中止する四郎兵衛ではなかった。

たとえ、娘が何といおうとも、彼は、断じて青柳屋のむすこにやるつもりで準備を進めていた。

では、なぜ、おこうが、よそ目にもこんな二つとはないと思われる良縁をいやがるのかというと、——おこうには、その時、既に深くいいかわした男があった。

叔父松井道庵の養子、伍助だった。その時彼は二十四、おこうは十九の春だった。

「……おとうさんは、どうしても、わたしを青柳屋へかたづけるつもりです……伍助さんどうしましょう？」

病身で、年じゅう、医薬に親しんでいるおこうには、何かと生薬屋に奉公しているだけに、

これがきくというから飲んでみたらどうか、とか、この薬は、今度新しく売り出された、今まで、人の知らなかった、家伝の秘薬とかいって、何くれとなく自分の病気を心配してくれる、この伍助が母親を幼い時に失った彼女には、この世で無二のだいじな人だった。

「どうしようといったッて?」

「……ねえ、伍助さん、考えてみるのに、わたしは、どうせもう長くは生きていられないからだ。いッそ……」

「え? おこうちゃン!……」

……静脈が青く浮いて見える、やせた、細いおこうの手をとって、伍助は、思わず歯をくいしばって——これがふたりの運命かと泣き合ったことでもあろう。

ふたりが隅田川へ身を投げて心中して果てたのは、その年の八月、そろそろ涼風が立つという秋口だった——。

「……女のほう、おこうの死がいが上がったのはずいぶんあとのことで、それも……」

小吉は、今度は、今までと違って、若さまのほうを向いて話していた。というのは、いつの間にか若さまが、例のごろ寝から起き上がって、ともかく、話に耳を傾けているらしいので。

「……何しろ三年前の秋口にア、覚えておいでしょうが、大水騒ぎで……。心中者の死体どころか、おぼれて死んだやつが大ぜい出たので、どこのだれがだれやらわからず、おこうだとわかったというのも着衣からでした……。それが妙なンですが、例の幽霊が着ていたというのと同じ白地へかむろ菊のぼかし模様という、あの着物で……」

「やっぱりねえ……」

おいと坊が感心したような調子でいう。

「ですから、おこうが、父親四郎兵衛のしうちを恨んで、幽霊になって礼に来た、ということは、まア一応はのみ込める筋書きなんですがね、ハハハハ……」

小吉は、こういって笑った。

「だがよ、その幽霊も気の長え……」

若さまが、また、久しぶりで口を切った。

「出るもンなら、何も、三年もたってからにしなくッても、よさそうなもンじゃアねえか。ハッハッハッ!……」

「全くで、ハハハ……。で、あっしは、だんだんとここまで調べ上げて来ると、これア、だれか後ろで糸を引いている狂言作者があるな、とにらみまして、まず、どう考えても四郎兵衛の死にざまがおかしい、とても、幽霊に取り殺されたなンていうもんじゃない——」

「うん」

と、若さま。

「調べ直してみると、案の定、毒を飲まされたもんでした!」

「そうだろう」

調べるまでもないことだといいたそうな表情で若さまがいった。

「すると、これア、医者の松井道庵が臭いな、という見当になります。四郎兵衛は実の兄というものの、借金はあるし、責められるし、あげくには、自分の養子伍助は、兄が生木を裂くようなことをしたばっかりに、おこうと心中してしまうし……伍助が死んだあとは、道庵はいよいよ落ちぶれて、それでも町医者の看板は上げてはいますが、とンとはやってそうもない暮らしで……」

「まず、その辺が怪しくなるが……」

と、若さま。

「へえ。あっしも、そう思いましてね、ともかく道庵をあげました。お手のものの一服というやつじゃアないか、と……」

「すると？」

「自分は何も知らないというのです。決してそんなだいそれたことをした覚えはない、といい張るンですが、ここに一つ、怪しいことがあるンです。それは、道庵のうちへ行って、薬箱を調べようとすると、ないのです。どうしたか、というと、そのようなものは所持しない、というンですが、仮にもいくら貧乏医者でも薬箱を持たないということはないだろうと、問い詰めると、いや、実は、二、三日前の晩、盗まれた、というのです。じゃアなぜ、お届けしないのか、というと、それほどのことでもないと思って、ほうっておいたというのですが、どうも、この答えは怪しいンで……」

「ふう……何か、あるな、それア……」

「へえ、あっしもそう思うんですが、道庵のやつア、それ以上、テコでも口を割らないンで、少々、弱ってるンですが……。で、何か一つ、若さまにお知恵を拝借してエと、今夜お伺いしたような次第なンですが……」

「話アそれで全部なんだね？」

「へえ、もう……」

「じゃア、どうして、親分は、幽霊をつかまえないンだね？」

「へッ？　あの幽霊を？」

思わずも、虚を突かれた形で、遠州屋小吉はキョトンとした顔つきになると、とっぴょうしもないことをいいだした若さまを見つめた。

「幽霊をつかまえるというと？」

「ハッハッハッ！　親分は植木職の由蔵を、よく洗いなすったかい？」

「へえ、それアもうじゅうぶんに調べました。確かに幽霊と会ったといい立てますンで……あいつは根が正直なもンですから……」

「そうじゃアないよ。おれのいうなア、由蔵が見たという、麦湯の娘のことだよ」

「麦湯の娘？……幽霊の？」

小吉はちょっと、ふに落ちかねたような顔つきで問い返した。

「うん。……まさか、その店ぐるみ幽霊だというンじゃあるまい。そこへ、親分、行ってみなすッたか？」

「いいえ」

「ハハハハ……しようがねェな、その店を調べ上げて見ることが一番だね。おれにゃアその店の幽霊は、つい、うっかり由蔵と会ったンだと思うから、ハッハッハッ！……とっくり探ってみることだ、大きに、訳アねえかも知れねえよ」

遠州屋小吉は頭をかきかき答えた。

「……すっかり忘れちまっていて……あっしは最初から麦湯一件はまるでかかわりねえと思っていて……今の今まで、気がつかず……いやありがとうござんした」

さわぎ歌

「おッ、これアまたおにぎやかなことで……」

その翌晩、岡ッ引きの遠州屋小吉が、船宿喜仙の例の部屋に若さまを訪れると、一目中を見て小吉は思わず、こう、驚いて叫んだものだ。

へ送りましょうか、送られましょうか

よいきげんで、赤い顔した若さまが、さわぎ歌をうたっている。

いや、習っているらしいのだ。まだあんまりじょうずではない。おいと坊が、三味線をひいて、時々直している。

「ホホホホ……親分さん、どうぞ」

おいと坊があいそうよく招じ入れた。

「ハッハッハッ！……どうだい、遠州屋さん、なかなか、うめえもんだろう？」

「いや、どうも……若さまは何でもご器用でいらっしゃいますな、ハハハ……」

「時に、どうしたい？　麦湯の幽霊は？」

若さまは、おいと坊から三味線を取り上げると、たいしたことには、今度はそれをポッン、ポッンといたずらしはじめた。

「さっそく調べました。……どうも、よく覚えちゃアいないンで、何しろこわいこわいの一心で、自分じゃちょうちんの消えたのも気がつかずに駆けずり回ったので、と、あやふやなことをいう由蔵をしかりつけて、一刻近くもあの辺を捜し歩いた末に、やっと、ここですよ、親分と、見つけました」

「いたかい、幽霊は？」

「それが、病気で寝たッきりの娘で……何でも母親とふたり暮らしで、姉が芸者とかでほそぼそと暮らしている一家で、とても、夜中、その三囲あたりまで行けるというからだじゃござんせんので……」

「で、由蔵は何といった？」

「はっきりしたことはいえないが、どうも、そうらしいようだ、なンて、ひどくあいまいなんで……もっとも、例の芸州屋のおこうちゃんにはどこか似ているような気もすると、いうンですが」

若さまは、だが、それへは何とも答えず、三味線の音色を、上げたり下げたりしながら、おもちゃにしている。

「若さま、糸が切れてしまいますよ。そんなことをなすっては……」

おいと坊が気にしていった。

「ハハハハ……だいじょうぶ。……そうかい、それアいろいろご苦労だったな、親分……ところで、まアゆっくり一杯やってゆくさ」

「いえ、そんな、あっしはこれから……」

「いいッてことよ。今夜一晩ぐらい、遊んだって幽霊が逃げもすめえ、ハッハッハッ……おいと坊、その芸州屋がほれ込んでいたッてエ蝶次姐さんを呼んでくれ、一つわあッと陽気に騒ごうじゃアないか。ハハハ……」

「まア、お珍しい、若さまが芸者をお呼びになるなンて！」

おいと坊が、びっくりしていった。

——やがて、そう待つほどもなく、芸者蝶次がこの座敷に現われた。なるほど、売れッ妓といわれるだけに、すっきりした江戸前の女だが、いくぶんやせぎすなのが遺憾だが、それもかえって一つの魅力ともいえよう。年は二十か一という、美しい芸者だ。

「おいとさん、今晩は……」

蝶次はあいそうよく、おいと坊を一人まえに扱ってあいさつすると、さて、それからむだ話やら、お酌やら、——あまりいけない口の小吉は、もう金時の火事見舞いのような顔にな

った。

「……ところで、蝶次姐さん、ひとつ、さわぎ唄をひいちゃくれめえか」

と、若さまが注文した。

「ホホホホ、いまお覚えになったばかりで、もうそんな、ホホホホ……」

とおいと坊が冷やかした。

〽送りましょうか、送られましょうか……

三味線はおいと坊よりも達者に、陽気にひかれはじめた。と、ぷつりと糸が切れた。

「あら！……若さまですよ」

と、おいと坊がかわいくにらんで、

「さっき、さんざんおいたあそばしたンですもの……」

「ハッハッハ、これア悪かった……ところで、蝶次姐さん、妹さんのその後のからだのぐあいはどうだい？　久しくわずらっていると聞いたが」

「ハイ、ありがとうございます……どうも、あんまり、はかばかしくありませんので……」

と、蝶次はなにげなく、受けて答えているうちに、はッと何やら気づいたらしく、けげんな面持ちになると、

「まア、どなたからお聞きになったのですか？　よくご存じで……」

と、聞き返した。だが若さまは、それには答えず、また、

「その後、清さんとの仲ア、どうだい？　たいへんな評判だぞ、ハッハッハッ」

と、哄笑した。

「あら、そんな……おいとさん、あなたでしょう？　恨みますよ、ホホホ……」

おいと坊は、冗談を真に受けて、へどもどした。

「だがなア、恨まれるなア、蝶次さん、おまえさんのほうだぜ」

と、若さまが妙なことを言いだした。

「おや、なぜですか？」

「心中の片割れの伍助となンぞ、いい仲になって、それこそ、死んだおこうが、化けて出るぞ！」

「え？……」蝶次は、持っていた杯を、バタリ取り落とした。

「ハッハッハ！……遠州屋、蝶次姐さんにあとでとっくりと聞いてみるがいい。いろいろと、わからねエことを教えてくれるだろうよ。ハッハッハッ！」

けがの功名

「あら、若さま、お目ざめですか？」

あれから二、三日の後、今の午後四時ごろ、太陽は西に回ったとはいえ、まだなかなか暑くきらきらと川面に反射している。

午睡からさめたばかりと見えて、若さまはさえない目つきで、今見た夢でも反芻している

ような表情で、脇息に両ひじついて、あごを乗せている。

「ホホホ……何をぼんやりしていらっしゃいます？」

おいと坊はおもしろそうに、若さまの正面にちょこんとすわると、にらめっこした。

「こいつ！　何か用か？」

「そうそう、さきほど、遠州屋の親分さんが見えましたが、若さまがおよっていらっしゃると聞くと、また、上がる、くれぐれも厚くお礼を申してくれ、といって帰りました」

若さまは相変わらず無言で、ポカンとしているだけだ。

「わたし、親分さんから皆、聞いてしまいました。幽霊だなんてうそ八百なのですね……」

小吉が、おいと坊に語っていった、芸州屋毒殺事件の真相は——。

松井道庵の養子、伍助は、おこうからいっしょに死のうといわれて、もとより命よりも愛する女のことば、すぐに死のうと承知した。

ところが、ふたりいっしょに身投げしたのだが、先にもいったとおり、おこうは長のわずらいのからだ、一も二もなく溺死したが、伍助のほうは幸か不幸か助かった。

助けたのは船頭稼業の者だったので、彼はそのまま名まえを清之助と変え、世を忍んで船頭となりおおせた。そのうち、根が目鼻だちの整った美男という型の人間なので、船宿するが屋の船頭をしているうちに、いつか芸者の蝶次と深い仲になった。

もっとも、それにはいま一つ理由があって、蝶次が、死んだおこうとうり二つとまではゆかないが姿、形がよく似ているので、それに引かされたという点もある。ところが恋がたき

が現われた。それが、人もあろうに、伍助を死にまで追いやった当の芸州屋四郎兵衛だった。四郎兵衛もまた、蝶次を愛娘おこうに似ているゆえに、愛したのだが……。

そのうち、芸州屋が蝶次を身請けしようといいだした。どこまで、あの爺はおれにたたるんだろう？　清之助の伍助と蝶次は、相擁して身の不運を嘆いた。

そうしたおり、蝶次は、妹から妙な話を聞かされた。それは、母親とふたりで、夏は麦湯など売っている病身の妹が、その恋人である芸州屋の庭番、武吉のところへ、久しく男が顔を見せないので、家へ来てはいけないという男の禁断を破って、恨みの一つもいってやろう、病身の自分がいやになったのか、と、ある夜、三囲のほうへ母親にないしょで行ったおり、道を聞いた男が、自分をすっかり、幽霊にしてしまった、という話だった。

芸州屋に、死んだおこうの幽霊が出る！　よしそれを利用しようとふたりはたくらんだ。で伍助は、ある夜、かって知った養父、道庵の家へ忍び込むと薬箱を盗み出して、船遊びに来た四郎兵衛のちょこに、蝶次が気づかれぬようにそっと毒薬を入れたのだった。

ところが、その晩思いがけなくも道庵が乗り合わせていて、船頭の清之助とは、もしや伍助ではないかな、とは思ったものの、そのうち、四郎兵衛が急病となる、症状が思い当たるところがあるので、薬箱を取りに戻ると盗まれている……道庵はいっさいをのみ込んでしらを切った。小吉が臭いと見当をつけたのはもっともな訳合いなのだった。

さて、四郎兵衛が駕籠で戻る段になると、そこで幽霊を利用しようと、あまり気の進まないらしい病身の麦湯の娘、蝶次の妹を伍助がむりやりに頼み込んで、駕籠送りの幽霊おこうの筋を書いたのだった。

「その妹という女の人は、遠州屋さんが二度めに改めて調べにいった日の晩、死んでしまったそうです……何か、ちょっと、因縁ですね」

「でも、若さまは、一度もこのお座敷からお出ましにもなりもしないで、よく、蝶次さんと清之助さんが発頭人だということが、おわかりになりましたねえ……」

「なアに、けがの功名サ。……いつだったか、この座敷の下で、さわぎ歌をひいていた芸者の三味線が、変なところで間が狂うので、どうしたことかとなにげなく気にしていたら、糸が切れた……聞いてみれア、その芸者が蝶次で、船頭の清さんといい仲だとおいと坊、おまえ話したろうが……」

「ええ……でも、それだけでは」

「ハハハハ、まさかそれだけじゃわからねエ、すると、次々と遠州屋が訳を細かく話してくれる。日をくってみると、蝶次が糸を切った晩に船で四郎兵衛が毒を飲まされている……はアはア、これア、ひょっとすると自分が入れた毒のちょこを相手が飲んだ瞬間さすがに気がとがめて、思わず間が狂って糸を切ったンじゃないかな、と、考えついた。ハハハ、……ほんの思い付きサ」

「それから幽霊のほうは？」

「……それをいう前に、この事件にア、始めからしまいまで、ずっと一本、通っている筋がある！」

「何でしょう?」

何という細心な注意力、推理力であろうと、おいと坊は、思わず若さまの頭のよさに感嘆した。

「清さんが伍助じゃアねえかという当たりも、遠州屋の話を詳しく聞いてみれアわかること、……いったい遠州屋は解ける鍵を持っていながら、納めかたがへたなンで、まごまごするはめになるのサ、ハッハッハ!……おれのてがらじゃアねえ、遠州屋の話し方がうまかったからだよ、ハッハッハッ」

氷献上

顎十郎捕物帳

久生十蘭

賜氷の節

「これ、押すな押すな。……押すな、と申すに」
「どうか、お氷を……」
「あなただけが貰いたいのじゃない、みな、こうして待っている」
「……ほんの、ひと片でも……」
「いま、順にくださる、お待ちなさい……」
「じつは……」
「おい、お武家さん、おれたちは、こうして炎天に照らされながら二刻も前から待っているんです。……つい、いま来て、先にせしめようというなあ、すこしばかり虫がいいでしょう」
「……まことに、申訳ないが、じつは……」
本郷、向ヶ岡。

加賀さまの赤門で名代の前田加賀守の御守殿屋敷。
本郷から下谷の根津わきまで跨って、屋敷の地内が十六万坪。
竹逕の涼雨、怪巌の紅楓、蟠松の晴雪……育徳園八景といって、泉石林木の布置、幽邃をきわめる名園がある。
北隣、水戸さまの中屋敷に向いた弥生町側の通用門から、てんでに丼や土瓶を持った老若男女が溢れだし、四列ならびになってずっと根津権現のほうまで続いている。
加賀さまの雪振舞。——加賀屋敷、冷てえ土だと泥土を舐め、と川柳点にもあるくらいで、盛夏の候、江戸の行事の一つ。
嘉永版の『東都遊覧年中行事』にも、「六月朔日、賜氷の節御祝儀、加州侯より氷献上、お余りを町家に下さる」と見えている。
賜氷の節、また氷室の御祝儀ともいって、三月三日の桃の節句、五月五日の菖蒲の節句、九月九日の菊の節句についで古い行事で、仁徳天皇の御代に山ノ辺福住の氷室の氷を朝廷に奉って以来、六月朔日を氷室の節といい、西の丸では、富士氷室の御祝という儀式があり、大奥、御台所は伺候の大小名に祝いの氷餅を下さる。
町家では、前の年の寒のうちに寒水でつくった餅を喰べてこの日を祝い、江戸富士詣りといって、駒込の真光寺の地内に勧請した富士権現に詣り、麦藁でつくった唐団扇や氷餅、氷豆腐などを土産にして帰る。
六月朔日の氷室のお祝に、加州侯からお雪を差上げることは、加賀さまの氷献上といって、

これも古い行事のひとつ。

延喜式の古式に則って、前の年の寒のうちに屋敷の空地の清浄な地に、深さ二丈ばかりの大穴を掘り、そこに新筵を敷いて雪を詰めた桐の大箱をおさめる。

その周りを数坪の雪で囲い、雪の上に筵を厚くかけて高く土盛りをする。こうして春を過し、六月朔日、土用のさなかに穴を開き、周りの雪を除けて桐箱入りの氷を駕籠にのせ、一ツ橋御門から入ってすぐ御車寄まで行く。

車寄に着いたお雪の桐箱は、御側用人、お坊主附添いでまず老中の用部屋まで運び入れ、用部屋から時計の間坊主、側用取次と順々に送られ、お待兼ねの将軍が、これを器に盛って、今年の雪は、ことのほか冷たいの、などと御賞美なさる。

さて、加賀さまのお氷が西の丸へ上ったと聞くと、本郷、下谷一帯の町家のものはもちろん、はるばる下町からも、遠近貴賤の別なく容器を持ってお余りの氷を貰いに集ってくる。

暑い最中、ようやくお氷は頂戴したが、日本橋まで駕籠を飛ばすうちに井の雪が溶けて水になる。ずいぶん高価い水だが、生温になった水でも、お氷が溶けた水だといえば有難い気がする。

江戸は、ことに水の悪いところで、町人は夏の間に雪や氷を口にするなどということは思いもおよばなかったので、加賀さまのお雪はたいへんに珍重された。

……そういうぐあいに、井や蓋物を持った面々が四列つなぎになって並んでいるのを、掻きわけるようにして前へ泳ぎだし、番衆に押戻されてすごすご後列へ戻って行くが、すぐま

た出てきて逆上したように、お氷を、お氷をと喘ぐ、四十二、三の浪人体の男。

眼鼻立ちの大構えな一文字眉。底の据った立派な顔貌だが、いわゆる長々の浪々。貧苦がガックリと頬を落しこみ、鬢の毛はほうけ立って、不精たらしく耳の上へおおいかぶさっている。

女手がないのか、ぶざまに継をあてた接ぎだらけの古帷子。経糸の切れた古博多の帯を縄のようにしめ、鞘だけは丹後塗だが中身はたぶん竹光……腰の軽さも思いやられる。

顔色は土気色に沈んでいるのに、眼だけは火がついたようにギラギラと光り、瀬戸の古井を突きだしながらうわずったような声で、

「あの……どうか、お氷……」

番衆も業を煮やし、つい、剣突き声になって、

「こいつ、また来た……わからねえにもほどがある、順にやると云ってるんだ……列につきなさい、列に」

浪人体の男は、あふッと喘いで、

「申訳もござらぬ……勝手を申すようですが、じつは……」

「じつはも、提灯もありゃしねえ、騒いでいるのは、あなた一人だ……みな、あの通り静かにしているじゃないか」

「……じつは、たった一人の伜が、このほどからの時疫で、昼夜をわかたぬ大熱。……人心地もないうちにも、毎年、お氷を頂戴したことをおぼえて居ると見えまして、四、五日前か

ら口おかずに、お氷、お雪と囈言を申します。……明日は明日はと、ようやく今朝まで宥めすかし、さきほど、間もなく、もうお氷がお上りになるということを聞きまして、飛ぶようにして駈けつけて参ったような次第……」

番衆はうるさがって、

「お雪がほしいのは誰もおなじこと。……子供の時疫どころか、親の死目にたったひと口舐めさせたいと、今日の明方から来て、待っている人もある。……親の死目の、子供の時疫のと、いちいち事情を聞いていたんじゃ、おさまりがつきやしない。……まあ、まあ、順に上げますから、列についてください」

浪人者は、みすぼらしいほどに頭をさげ、

「……まことにもって、勝手次第、お詫びのいたしようもござらぬが、大熱の伜をたった一人にして参りまして、こうして居りましても、万一を思われて、気もそぞろになります」

血走った眼で、列についている人々を見まわし、

「お並びのご一統には、この通り……」

井を持ったまま、地面に片膝をつき、

「……この通り、お詫びをもうす。……なにとぞ、手前勝手を……」

番衆は顔を顰めて、

「そんなところに膝をつかれては困る。……順々ときまったことだから、順の来るまでお待ちなさい」

「では、これほど、お願いをしても……」

「あんたも、くどい」

「どうでもお聞き入れくださらぬとあれば、やむをえぬ、……列に戻ります。……ご無礼もうした」

薄っすらと涙ぐんで、項垂れがちにトボトボと根津上のほうまで戻って行く。

そうするうちに、ようやく氷が上り、先頭のほうから順に氷室のほうへ動きだす。

氷室の前では、氷見の役人が十人ばかり金杓子を持って待っていて、順々に差出す丼や蓋物にお余りの氷を掬っては盛りこんでやる。

「さあ、お次お次……」

貰ったものは喜んで、

「どうもお手数さま、有難うございました」

と、礼を言い、丼を袖や袂で蔽いながらいそいそと小走りに戻って行く。

件の浪人者は、気もそぞろの風で、伸びあがり、肩で息をしながら、雪をいただいて帰る人々を羨ましそうに見送っている。

門から溢れだし、弥生町の通りを根津までギッシリと四列につづいている人数だから、たいへん。なかなか順番がやって来ない。

それから四半刻、冷汗をかき、焦立つ胸を押えながらジリジリと進んで行くうちに、どうやら氷室の近く。……あと四人で自分の順番が来る……。

前の一人が去り、また一人。……ようやく、待ちこがれた自分の番。
帷子の袖で汗を拭い、顫える手で丼をさしだし、
「どうか、手前にも……」
氷見役は、金杓子を振って、
「お雪は、……もう、ない」
「な、なんと云われる」
「お雪は、いまで、みなになった」
浪人者はカッと眼を見開いて、
「……では、もう……」
「気の毒だった」
「……ほんのひと片でも……」
「いや、ひとかけらもない。……今年は、特別に暑気がはげしく、お囲い氷が半分がた溶けてしまったところへ、例になくお貰いの人数が多く、氷室は、ごらんの通り土ばかり。……来年は、もうすこし早目にお出かけなさい」
「そ、それは、あんまり、むごいお扱い……」
「腹を立てられても困る。……なにしろ、相手は氷のことだでな、溶けてしまったものは、いかな氷見役でも、どう扱いようもない。……さあさあ、もうおひきとりなさい」
とりのぼせて、手を伸ばして氷見役の腕を摑み、

「……では、お土でも……」
氷見役人は癇を立てて、
「なにをする、手を離せッ」
「お願い……お願い……」
「これ、手を離せと申すに！」
手強く押除けたはずみに、丼がケシ飛んで、地べたの小石にあたって二つに割れる。
「これは、ご無体！」
「無体とは、こちらの申すことだ、マゴマゴしないで、早く帰れ」
浪人者は地面に蹲んで、もそもそと丼の破片を拾い集めていたが、なにを思ったか、スックリと立ちあがると、手に持った丼の破片を力まかせに地面に叩きつけ、
「……よし、どうでもくれぬというなら、取るようにして取って見せる。……まだ、水道橋へはかかるまい。……これから追いかけて……」
眼に血を注ぎ、すさまじい形相で壱岐殿坂のほうを見込むと、草履をぬいで跣足になり、髪振り乱して阿修羅のように走りだした。

桃葉湯

本郷三丁目の「有馬の湯」。

六月三日が、土用の丑の日。この日、桃の葉でたてた風呂へ入ると、暑気を払い、汗疹をとめるといって、江戸中の銭湯で桃葉湯をたてる。

れいによって、番所を怠け、手拭いを肩にひっかけて汗を流しに行く。

ちょうど七ツ下り、暑い盛りで、浴客はほんの二、三人。

小桶を枕にして、流し場に長くなっているのは、いつも間のびのした歯抜け謡を唸る裏の隠居。顔は見えないが、湯壺の中で粋な声で源太節を唄っているのが一人。

顎十郎が、小杓子でかかり湯をつかっていると、唄がやんで、柘榴口から真赤になって這いだして来たのは、加賀さまのお陸尺で、顔馴染の寅吉という剽軽なやつ。

顎十郎の顔を見ると、ひゃッ、と頓狂な声をあげておいて、

「いよう、これは仙波先生、今日は、もうお役上りですか」

顎十郎はふ、ふ、と笑って、

「この暑気では、役所詰もおかげがねえでな、休みにした」

寅吉は、並んでかかり湯を使いながら、

「先生は、相変らず、のんびりしていらっしゃる。……御用がなかったら、あっしどもの部屋へ遊びにお出でなさいませんか。この節は、ちっとも顔をお見せにならねえので、いつも、みなとお噂をしておりやす」

「いいな、ひと風呂浴びたら、いっしょに行って、久し振りにみなと馬鹿ッ話でもするか」

寅吉は喜んで、

「じゃ、背中でもお流ししましょう」

と言って、膝を拍ち、

「……それはそうと、あけて前の朔日、ひょんな騒ぎがあったことをご存じですか」

「いや、聞いていない」

「じゃ、お聞かせしましょうか」

「聞かせてくれるのは有難いが、暑苦しい話なら願いさげだ」

「暑苦しいどころか、途方もなく涼しい話なんで……。なんといっても、お氷の件なんだから」

「お氷が、どうした」

「世の中には、ずいぶん変ったこともあるもんですが、こんどなんかも、その、なかんずく。……お屋敷から上った献上のお氷を桐箱ぐるみそっくり持って行ったやつがいるんです」

「ほほう、それは、いかにも涼しい話だの」

寅吉は乗りだして、

「なんと申しやしてもね、古くからの重い慣例。……あまり物欲しそうにはしねえ公方さまが、これだけはお待ちかねで、前の月初から、もう、あと何日で加賀の氷が来ると待ちかねておいでになるというその氷。……そいつを横合から掻ッ攫ったやつがある。……大袈裟に云うわけじゃねえが、これは天下の一大事。……殿さまの恐縮もさることながら、駕籠についた用人、氷見役一同、ことによったら腹切りもの。……相手が氷でも、これじゃ、

すこし、涼しすぎましょう」

「この節は、いろいろと変った盗人が出る。……それで、どんなやつの仕業だったんだろう」

寅吉は、顎十郎の肩につかまって背中を流しながら、

「……話は前後になりますが、じつは、お雪献上の駕籠を担いで行ったのは、あッしと為の二人なんでね、ですから……」

顎十郎は、肩越しに寅のほうへ振返って、

「じゃ、お前が、お氷が攫われる現場を見たわけだな」

寅吉は、照れ臭そうに頭へ手をやって、

「見たか、とたずねられりゃ、見たと返事をするよりしょうがねえわけなんですが、それが、どうもなんとも、ざまのねえ話なんで……」

「どうした？」

「いま、くわしくお話します……。たぶん、ご存じじゃなかろうと思いますが、なにしろ相手は溶けりゃ形なしになる厄介な代物。毎年の例で、こいつが西の丸の御車寄へかっきり四ツ半（午前十一時）に着くのがきまりなんで。……と、云いますのは、お上は九ツ（正午）の昼御飯で、お膳を引くと、すぐその後でお氷をおあがりになるんで、この時刻はどんなことがあっても外されない。……ですから、お氷が四ツ半きっちりに御車寄へ着くには何刻に氷室を出して、何刻に駕籠へのせ、門を出るのが何刻、壱岐殿坂を下りきるのが何刻と、お

送り役と氷見役立合で袂時計を持ってお駕籠の早さを割りつけ、大袈裟に云や、氷室から西の丸の御車寄まで何千何百歩と、きっちりときまっているくらいなものなんです」

「いやはや、たいへんな威勢のもんだな」

「まったく……軍談読の『戦記』を聞くと、武者押しというのは、一鼓三足といって、歩度の間尺がきまっているもんだそうですが、お氷献上の駕籠ゆきは、添役が袂時計を見ながら、ホイと掛声をかけると、サッサ、サッサと四歩出る。……去年、壱岐殿坂の下り口で二百歩目で睨んだ傍示杭は、今年も同じ二百歩目で睨みつけようというわけなんで……。あッしと為が、毎年、お氷の駕籠を吊って行くんですが、この駕籠昇だけは二人でなくちゃ勤まらねえ。……まあ、そういったものなんです」

「面白いの」

「……ところで、その日、お氷が氷室を出たのは、お添役の袂時計で十字五分……御正門を出たのが十字十分……壱岐殿坂を下り切って二十五分……水道橋を渡り切って三十分……神保町角が三十五分……三番原口から一ッ橋かかりが四十五分。ところで、ここで、ひょんなことが起きちまった……」

「どうした」

「……いま、一ッ橋御門へ入ろうとすると、いきなり門内からむさんに飛びだして来たやつがあって、闇雲に駕籠の曳扉のあたりにえらい勢いで体当りをくれた……」

「ほほう」

「……人間一人が乗っているなら、人の重さがありますから体当りぐらいでひっくり返るなんてこたあねえんですが、なにしろ、中身はごく軽いんだから駕籠は宙に浮いている。……そこへ、いきなり、えらい勢いで突っかけられたんで、あッしと為は、はずみを喰って棒鼻で薙がれ、ものの二、三間もひょろついて行って駕籠を放りだして、もろにあおのけにひっくり返っちゃった……」

「ざまはねえの」

「いや、どうも……。どういうはずみか知らないが、ひっくり返ったところへ、まるでご註文みたいに駕籠がおっ被さって来て、あッしは眉間を、為は鼻面を火の出るほど棒鼻でどやしつけられ、まったくの、かんかんのう、きゅうれんす。……痛てえの候の、キュッといったきり息もつかれねえ。……そうしてるうちに、そいつが倒れた駕籠の曳扉に手をかけると、いきなりお氷の桐箱をひきずり出して小脇へ抱え、横ッ飛びにパッと御門内へ飛びこんじまった……」

「なるほど」

「……話しゃあ長いが、体当りをくれておいて、お雪の箱をひっ抱えて、門の中へ飛びこむまでは、ほんのアッという間。……これは、といったときには、もう影もかたちも見えない。……添役人は十人もくっついているんですが、どれもこれも書役上りの尻腰なし。……おや、たいへんとマゴマゴするばかり。……ようやく我に返って門内へ雪崩れこんだが、もう後の祭。……盗人は松平越前の邸の塀に沿って大下馬のほうへ行き、御破損小屋から呉服橋のほうへ抜けて行ったんだろうと思いますが、たぶんそうだろうと思うだけのことで、みなで追いかけたときには、後姿さえ見かけない始末。……今更ながら青くなって取りあえずお側役人まで訴えてシオシオと邸へ引上げて来ましたが、殿さまはもってのほかのお怒り。すぐ伴を揃えて西の丸へお詫びに上るという騒ぎ。……添役、氷見役は青菜に塩、どうでもこりゃ、お叱りはまぬかれない」

顎十郎は、のんびりと顔を振りあげ、

「しかし、それだと言って、盗人の顔ぐらいは見たろうから、こりゃ、まあ、すぐ知れる」

寅吉は首を振って、

「……ところが、そうじゃねえんで。……顔なんざ、だれも見ちゃいねえ」

「ほほう、それは、また、なぜ」

「なぜにもなにも、袖をひきちぎって、すっかり顔を包んでおりまして、菊石やら、ひょっとこやら、てんで知れない」

「ふむ、……でも服装ぐらいは見たろう」

「……ですから、見たかと云われりゃ、見たという。……古帷子を着て、二本差した浪人風……と、まあ、云うんですが、これも、チラと見かけたばかり。……あんまり、きっぱりしたことも云われねえ。……まったく、埒のねえ話で……」

「……それで、お雪盗人はわからずじまい……」

「いや、そうじゃねえんで……。青……青……、名前は忘れましたが、なんとかいう浪人者

が、南番所の藤波の手で捕まって、これがその、だいたい、そいつだろうということにきまりかけているんだそうで、へえ」

「藤波が……。それは、素早いの」

ふたりが話合っていると、眠っていると思っていた謡の隠居がモゾモゾと起きだして、

「……ええ、そのことなんでございますが……」

顎十郎は振向いて、

「これは、ご隠居さん、眠っていらっしゃるのだと思って声もかけませんでしたが……」

六十ばかりの品のいい老人で、ひと摘みほどの白髪の髷を頭にのせている。膝行るようにして寄って来て、

「眠るどころのだんじゃございません、さきほどから、お話をうかがって居りました」

と言って、眼をしょぼつかせ、

「……お話のようすでは、まだご存じなかったようですが、南番所へひきあげられた浪人者というのは、あなたもご存じでしょう、いつも肩衣で傘張りに精だしている、すぐ裏の浪人者……青地源右衛門……」

「知らないわけはない……糊売婆の奥隣の、……源吾とかいう子供と二人暮しの……」

「へえ、そうでございます」

「話はしたことはありませんが、手前の二階の窓からちょうど眼の下で、なにしろ、一間きりの家だから、嫌でも胴中まで見透し。……四、五日前に、子供が熱を出したとかで、だいぶと心配らしく見えましたが……。あれが、お雪盗人……」

「盗んだのか、盗まぬのか、それは、あたしどもには、きっぱりしたことは申されませんですが、ありようは……、と云っても、源右衛門さんの述懐ですが、自分が盗んだのではなく、誰か知らないがお氷の入った桐箱を上り口へ置いて行った者があると、そう云うんでございます」

「はて、……お氷の箱が上り口に……」

「……加賀さまへお雪を貰いに行き、貰いそこねてぼんやり帰って来ると、上り口に見馴れない桐の箱が置いてあるので、なんだろうと思って蓋を払って見ますと、それが、胸も焦げるほどに欲しいお氷……」

「ほほう」

「……と申しますのは、ご承知のように、伜がずっとひどい大熱で、囈言のあいだにも、雪をくれ、雪をくれとせがみます。……親の身としては、息のあるうちにせめてひと口なりと啜らせてやりたい。間もなくお雪が上るということで、井をひっ摑んで駈けつけたが、ちょっと遅かったばっかりに貰いそこね、ガッカリと気落して、魂が抜けたようにトボトボと帰って来た、……その鼻先へ桐箱に入ったお氷。……当座は、夢を見てるんだと思ったそうです。……あまり欲しい欲しいが凝り固まって、現にこんなものを見るのだと思った……」

「そりゃ、そうありましょう」

「……触って見ると、これが冷たい。……たしかに、夢じゃない……すぐ届けりゃよかった

んですが……」

「子の可愛さにひかれて、お雪に手をつけた」

「その通り……。いくら逆上したといっても、そこはお侍。それをしたら大変なことになると、いったんは、すぐ訴え出ようと思ったそうですが、眼の前で、伜が熱に苦しんで、虫のような細い声で、お雪を、お雪を、と囈言を云っている……」

「ふむ」

「……放って置けば、どうせ、溶けてなくなるもの、ひと片ぐらいはいいだろう。……さあ、雪だぞ、といって、子供の口に差しつけると、人心地のないながらに、ああ冷たい、うまいねえ、と子供は夢中になって喜びます。……なにしろひどい熱ですから、ものの五分もたたぬうちに、また喉をかわかして、雪をおくれという……。こうなるとたまらない、堰が切れたようになって、もうひと片ぐらい、いいだろう……もうひと口はいいだろう。……いいだろう、いいだろう、で、啜らせるほうと溶けるほうで、見る見る雪が減ってゆく。こうなればもう破れかぶれ、いっそのこと、この雪で額や胸を冷やしてやったら、どんなに子供が楽になるだろう……。手拭いに押包んで胸と頭へあててやると、ああ、涼しいね、と子供は喜ぶ。……あッと気がついたときには、もう、ひと片の氷もない」

顎十郎はいつになく、しおっとして、

「いやどうも、気の毒な話ですな。……それで、どうしました」

「失敗ったと思ったが、もう遅い。……桐箱を抱えてボンヤリあたしのところへやって来て、

ありようをくわしく話し、これから真砂町の自身番へ名乗って出るつもりだから、どうか伜のことはお頼み申す。……誓って、手前が盗ったのではありませんから、かならず疑いは解けると思います、誠意を披瀝し、一日も早く戻ってまいりますから、なにとぞ、不憫とおぼしめして……。いかにもあわれな話ですから、後のことはたしかに引受けたからと申しますと、みすぼらしいほど礼を述べ、家主同道で自身番へ行きました」

顎十郎は首を振って、

「ああ、そいつは、いかんな」

隠居は頷いて、

「……いけないというのには、こういうことがあります。……氷を貰いそこねてカッと逆上し、氷見役人の前で、どうでも呉れぬというなら、これからお氷の駕籠を追いかけて、かならず奪って見せるからと、井を叩きつけ、えらい形相でその場から駈け出した……」

「いやはや」

「……じつのところは、どうでも奪る気で水道橋へんまで追いかけたのだそうです。……しかし、かんがえて見れば、お献上の品に手をかければ、軽くて打首、重けりゃ獄門。……そうなりゃ、かえって伜に憂目を見させるわけ。……ああ、やめにしようと、トボトボと引返した。……ところがもうひとついけないことがある。……いまも話していらっしゃいましたが、源右衛門のその日の着附が、古帷子に塗鞘の二本差。……一ッ橋御門内から飛び出した氷盗人とそっくりそのまま……」

顎十郎も、思わず歎息して、

「……うむ、着附がおんなじで、お雪を使ってしまったんじゃ、あの藤波でなくとも、手前の知らぬことでは済ませない。……ちょっと、抜差しなりませんな」

隠居は頷いて、

「しかし、それにしても、源右衛門さんが嘘を云っているとは思われない。こんなあたしなどが力んで見たところが、なんのたそくにもなりますまいが、せめて頼まれ甲斐に、夜っぴて伜の看護をし、いまさっき裏の糊売婆に代ってもらい、一と風呂浴びて、これから家へ帰って二刻ばかり眠るつもり……」

と言って、あらためて膝を進め、

「……伺うところじゃ、あなたは北番所でお役につき、また、さまざま捕物で功名をなすった方なのだそうで、これも、なにかの縁。もし、源右衛門さんがしんじつ無実なのなら、なんとかしてお助けくださるわけにはまいりますまいか。……さきほど家主が来ての話には、昨日まではどう責められても自分の仕業ではないと言張っていたのに、どうしたものか、急に今日になって、いかにも自分のしたことに相違ない、たしかに、手前が盗みましたと手の裏を返すような申立てをしているそうで。……ご承知か知りませんが、源右衛門という人は肥前彼杵で二万八千石、大村丹後守の御指南番で板倉流の居合の名人。……たとえ海老責めされればとて、そんなことぐらいで追い落されるような人柄じゃない。……このへんに、なにかアヤがあるのだと思いますが……」

顎十郎は、腕を組んで俯向いていたが、急に顔を上げて、

「たしかにあかしを立てるとはお引受け出来ませんが、おなじ長屋の住人が、そういう羽目になっているというのを、だまって見過してもいられない。……ようございます、なんとか、ひとつ、やって見ましょう」

韋駄天

手拭いを肩に掛け、寅吉と連立って有馬の湯を出る。無駄ッ話をしながら本郷三丁目を左へ曲って加賀さまの赤門。

役割部屋へ入って行くと、みな懐しがって、寝転んでいたやつまで跳ね起きて来て、右左から、先生、先生、と取りつく。

顎十郎は上り框に近いところへ胡坐をかいて陸尺がくんで出す茶をのんびりと啜りながら、ぐるりとまわりを取巻いているつまらぬ顔を見まわし、

「今度は、なにか、妙な騒ぎがあったそうだの」

部屋頭が、割膝でそそり出てきて、

「いや、どうも、馬鹿な騒ぎで……。為と寅のお蔭であッしら一同えらいお叱りで。……これがほんとうの傍杖……。いってえ、こいつらは間抜けなんで、駕籠に押当られたぐれえでひっくり返るなんてえのはざまのねえ話。……恥ずかしくてなりません」

「まあ、そう云ったものでもない。……ものには、はずみというものがある。畳の上でころんでも、間が悪けりゃ、足を挫く。……いま、有馬の湯できいたばかりなんだが、氷を盗んだとか盗まないとかいう浪人者は、じつは、おなじ割長屋に住んでいる男での……」

……家には、今年十歳になる伜が時疫で熱をだして寝たッきりになっていることから、青地が氷を貰いそこねて逆上し、つまらないことを口走ったてんまつを話してきかせると、部屋中は、急に湿りかえり、なかには鼻汁を啜るやつまでいる。

部屋頭は、手拭いで鼻の頭をこすりながら、

「そんな経緯は知らねえもんですから、腹立ちまぎれにドジだの腰抜けだのと云いましたが、そういうわけなら、そんなひでえことを云うんじゃなかった」

「聞く通り、いかにもあわれな話だでの、なんとかして助けてやりたいと思っているんだが……」

「へい、へい」

「それについて、どうでも手を借りなけりゃならねえことがあるのだが、どうだ、貸してくれるか」

部屋頭は、臀を浮かせて、

「貸すも貸さねえもありゃしません。……陸尺といや駕籠の虫、見かけはけちな野郎だが、水道の水を飲んだお蔭で気が強い。弱い者なら腰を押し、強いやつなら向う面。韋駄天が革羽織で鬼鹿毛に乗って来ようがビクともするもんじゃありません。……藤波だか蛆波だか知らねえが、下手に青地を追落そうというなら、江戸の役割三百五十六部屋、これにガエンと無宿を総出しにし、南の番所を焼打にかけてしまう」

顎十郎は、長い顎の先を撫でながら、

「まあまあ、そう意気込まんでもいい。……おれが頼みたいというのは、そんな大したことじゃない。済まないが、為と寅に駕籠を舁かせて、一ッ橋御門まで行ってもらいたいんだ」

部屋頭は、怪訝な顔で、

「へい、為と寅に駕籠を……。それで、どうなさろうというんで」

「……一昨日、氷を乗せて行ったときと同じように、氷室から一ッ橋まできっちり四十ミニュートで行き着くように歩いてもらいたい」

「四十ミニュートで……。ですから、どういう……」

顎十郎は、トホンとした顔で、

「……氷献上の駕籠が氷室を出てから、どう氷見役人が小手廻しがきいても、それだけの氷を分け終るには、すくなくとも四半刻（三十分）はかかる。……駕籠が氷室を出てから四十ミニュートで一ッ橋に着くとして、ものの四半刻も遅れてから追いかけて果して駕籠に追いつけるものかどうか……」

部屋頭は膝を拍って、

「なるほど、わかりました。……駕籠を舁き出しておいて、四半刻ほどたってから追いかけ、ほんとうに追いつけるものかどうか試して見ようとおっしゃる……」

「……まず、その辺のところだ。……どうでも追いつけないなら、こりゃ、青地のやったことじゃない。……追いつけるか追いつけないか、これが、青地が罪になるか罪にならないかの境だ」

と言って、言葉を切り、

「済まないが、誰か氷見役人のところへ行って、だいたい、何刻頃にお振舞の氷がおしまいになったかたずねて来てくれ。……おれは、これから金助町の叔父のところへ行って袂時計を借り出して来るから。……戻って来たら、すぐ吊り出せるように、氷室のそばへ駕籠を持って行っておいてくれ」

「へい、ようございます。……おい、為、寅、駕籠部屋から駕籠をひきだして、お氷の箱ぐらい重味を乗せておけ」

「合ッ点」

つい、眼と鼻の金助町。

叔父から袂時計を借り出して氷室のそばまで行くと、部屋中総出になって顎十郎を待っている。

「これは、えらい人数だ」

「どうせ、尻押しついでに、みんなで威勢よく押出そうというんで……」

顎十郎は手を振って、

「いけねえ、いけねえ、そんなことをしたら目立ってしょうがない。……為と寅、部屋頭、この三人だけでたくさんだ。……ときに、氷見役人はなんと云った、何刻に氷振舞が終ったと言った」

敏捷そうなのが進みだして、

「……氷室をしまって詰所へ引挙げたら、ちょうどお時計が十字半を打ったと申して居りました」

「十字半……よし、わかった」

袂時計を出して見ながら、

「この袂時計で、いま、ちょうど三字五分前。……いいか、キッチリ三字になったら駕籠を吊り出してくれ。おれは三十分遅れてここから駈け出すから……」

「よろしゅうございます」

「一分ちがっても青地の生死の分れ目。しっかりやってくれ」

と言って、部屋頭に、

「お前に、この袂時計を預けておくから、キッチリ四十ミニュートで一ツ橋にかかるように頼むぞ」

「合点でございます」

「こう見えても、駈けるほうじゃめったに人には負れを取らねえ。……いわんや、喰うや喰わずの青地の駈けるのとはわけがちがう」

そう言っているうちに、三字。

それ舁き出せというので、為と寅がグイと腰を上げる。部屋頭が附添って、
「じゃ、まいります」
「さあ、行ってくれ」
みながやがや言いながら、正門のほうへ送って行く。
顎十郎は、氷室の腰掛へかけて時間の来るのを待っていると、そのうちにお時計のあるほうから、ドーンと時刻の太鼓。
ちょうど、三字半。
裾をジンジン端折にし、草履を脱いで跣足になると、
「さあ、行くぞ！」
いきなり闇雲に駈け出す。
空地をまわってお長屋わき、正門から本郷の通りへ飛び出すと、本郷一丁目を右へ壱岐殿坂。
水道橋を渡って水野の大屋敷を左に見、榊原式部の角から四番原を斜に突切って三番原。
大汗になって一ツ橋詰まで飛んで来ると、橋の袂へ駕籠を下ろして寅と為と部屋頭の三人が待っている。
顎十郎は大息をつきながら、
「ど、どうだった……ここで何分ぐらい待った」
部屋頭は首を振って、

「とても、いけません。……ここへ駕籠をおろしたのはちょうど三字と四十ミニュート。……いまがちょうど三字五十五ミニュート。あなたは十五ミニュートも遅れています」
顎十郎は汗を拭いながら、
「口から臓腑が飛び出すほど駈けて来たんだが、十五ミニュートとは、だいぶちがう。……だが、念には念を入れ、もうひとかえりやって見よう」
駕籠を吊って加賀の邸まで引返し、またはじめからやりなおす。
なんとも顎の長い異様なのが、ひと刻もおかずにまたぞろ本郷の通りを大駈けに駈けて行くもんだから、町並では、みな店先へ飛び出して、ワイワイ云いながら見送っている。
今度は、十分早めに追い駈けたが、それでも、やはりいけない。顎十郎が駈けつける五分前に、駕籠は、ちゃんと橋詰へ届いている。

後口

小伝馬町の牢屋敷。
三千五百坪の地内に揚座敷、揚屋、大牢、二間半（無宿牢）、百姓牢、女牢、と棟を分ける。
お目見以上、五百石以下の未決囚は揚座敷へ。お目見以下、御家人、僧侶、山伏、医者、浪人者は、一格下った揚屋へ入れられる。

揚座敷のほうは、いわゆる独房で、縁付畳を敷き、日光臆、椀、給仕盆などが備付けてあり、ほかに、湯殿と雪隠がついている。

揚屋のほうは、大牢や無宿牢のような雑居房ではなく、これも独房だが格式はぐっと下って畳は坊主畳になり、揚座敷のように食事に給仕人がつかないから、従って給仕盆などの備付けはなく、雪隠も湯殿も入混みになる。

四畳に足りない六・七という妙な寸法で、一方は高窓。一方は牢格子。片側廊下で、中格子のわきに鍵役、改役当番の控所がある。

その一間。

この二日のうちに、いよいよもって憔悴した源右衛門と向合って坐っているのが、仙波阿古十郎。

かくべつ陽気にかまえるつもりはないのだろうが、顔の拵えがなんとなくのんびりと出来ているので、こういう陰気な場所柄にはいかにも不釣合。

ちょうど話が途切れたところと見え、青地は膝に手を突いて俯向き、顎十郎のほうは、例によって長い顎の先をつまみながら、トホンと天井を見上げていたが、鼻の先にとまりかけた蠅を手で払うといつもの不得要領な調子で、

「いやどうも、それは、それは……」

と、わからぬことを言っておいて、改めて青地の顔を眺め、

「とかく、番所の人間というものは、わかり切ったことをしちくどく念を入れるが、これが、

つまり役儀柄。……馬鹿なことをうかがうようですが、加賀の邸を出て、どういう道筋で一ツ橋へおいでなすった」

「どの道と申して、道は一筋。……壱岐殿坂から水道橋。大屋敷を左に見て、榊原式部の角から四番原、三番原。……それから一ツ橋……」

「まず、そのへんが道順ですな。……あなたは、駕籠を一ツ橋門内で待伏せなすっていらしったそうだが、どのへんで氷の駕籠を追抜かれましたか」

青地はチラと眼をあげて、

「はて、どのへん、と申して……」

「お忘れですか」

「いや、思い出しました。……駕籠を追い抜いたのは、ちょうど、大屋敷のあたり……」

「……あたり、と云いますと……」

「……ちょうど、大屋敷の角で……」

「ははあ、そこで追い抜かれた。……なぜ、そこでおやりにならなかった」

「……なにか御祝儀でもありましたろう、おりあしく、榊原のお徒士衆が油単をかけた釣台を舁いで門から出てまいりまして……それで……」

「それは、悪い都合。……それにしても、一ツ橋の御門内で待伏せられたのはどういうわけですか。……一帯の空地で、あの三番原なら、門内で待伏せするよりやりやすかったのではなかったかと思いますが」

「いったんは、手前も、そうかんがえましたが、逃げるには便利なようでも、なんと云っても四方見透しの原」

しおっ、と首をたれて、

「……じつは、その日は、二日ほど前から、水のほかなにものも食しておらんような始末。……この弱足で原のほうへ逃げましたら、すぐ追いつかれる。……ご門内のほうならば、屋敷も建込んでいることでござるから、その間を縫い歩いたら、なんとか逃げおおせるかと……」

顎十郎は、ほう、と頷いて、

「二日も、なにも喰らんで、本郷から一ッ橋まで駈けるのは、なかなか大変でしたろう」

「お恥かしいことですが、息切れがいたして、今にも眼が眩むかと思うばかり。……どうして追いつきましたやら、不思議なくらいで……」

「それも、子が可愛さの一心。恩愛の情というのは、えらい働きをするものですな。……盗りもせぬものを盗ったなどと云われるのも、ふしぎの一つで……」

青地は、はッと顔をあげ、

「なんと云われる」

顎十郎は、笑って、

「あなたも、上手に嘘がつけない方だ、そんな頼りないことで、よく藤波が騙せましたな」

「これはしたり！」

「などと驚いたような顔が、また嘘」

青地は荒らけた声で、

「嘘とは、そもそもなにをもって。……なんと云われようと手前が盗んだに相違ない」

顎十郎は手で押え、

「まあまあ、そんな大きな声をなすってもしようがない。……それほどに云われるなら申しますが、いま、榊原から釣台が出たとおっしゃったようだが、榊原式部は前の月の中旬、九段の中坂へお所替になってあの邸はいま空家になっていることをご存じですか」

「おッ、それは！」

「藤波はうっかり見逃したろうが、あたしはそんなことじゃ騙されない。……いかに江戸が繁昌でも、無人の空家から祝儀の釣台が出て来ることはない。もし、ほんとうにあったら、それは、お化の口」

チョロリと相手の顔を見て、

「……いいですか、あの日、お雪が氷室を出たのは、お添役の時計で十字五分。一ッ橋へかかったのが十字四十五分。……ところで、あなたが氷室を飛び出したのは、駕籠が出てから四半刻遅れた十字三十五分。……あなたがどんな韋駄天でも、本郷から一ッ橋までたった十ミニュートで駈けられるわけはない。……えらそうに云うようでお耳障りでしょうから、打明けて話しますが、じつは、昨日あの日の時刻に駕籠を出し、それから四半刻遅れて死物狂いに追いかけて見ましたが、駕籠が一ッ橋の門内へ入りかけるころには、あたしは、ようや

く三崎稲荷の近く。……どうでも、十分ばかり遅れるのです。……念を入れて、もう一度やった、が、やっぱりいけない。……それで、今度は、加賀さまの早飛脚で、小田原の吉三というのを頼んで駈けさせた。……一日で江戸と小田原を楽に往復するというえらい早足なんだが、やはり、追いつけない。……だいぶ迫っては行きましたが、駕籠が一ツ橋門内に入りかかるときには、ちょうど四番原の入口へかかったばかり……」

ふ、ふ、と笑って、

「失礼なことを申すようだが、さっき伺っていると、二日ばかりなにも喰べず水ばかり飲んでいらしたということだが、その足では、まずまずどんなことがあっても駕籠を追いぬくの、先廻りして待伏せるなどということは出来ない。……いかがです」

「……」

「……ねえ、青地さん、あなたの家の上り口へ氷の箱を置いたのは誰なんです？　たとえ相手は氷でも、献上物へ手をかければ打首、獄門の大罪。……おまけに、時疫で大熱を出して苦しんでいる子息の命に代えてまで庇おうとなさる以上、あなたが、そのものの名を知らぬというはずはない」

青地は頭を垂れ、長い間、愁然としていたが、そろそろと顔を上げ、

「恐れ入ったご活眼。……なにもかも包まず申上ます。……じつは、手前が盗んだのではありません」

改めて、畳に手を突いて、

「まさめに、そのものの姿は見ませぬが、あれを手前の家へ投げ込んだものの心当りはございます。……恥を申さねばなりませんが、手前には、長一郎という長男がございましたが、これがいかにも放蕩無頼。いかがわしいものをかたらって町家へ押借強請に出かけます。……眼にあまりまして、去ぬる年、勘当いたしましたが、いかに無頼でもそこは血の濃さ。……弟、源吾のほしがる雪を盗み取って家先に投げ込んだものと察し、老先短い手前が、長一郎の罪を背負って打首になれば、いかな無頼なやつも本心に立返るであろうと存じ、それゆえ、お上を欺くようなこんな仕方をいたしました」

顎十郎は、組んでいた腕を解いて、

「お話はよくわかりましたが、それは、チト妙ですな」

「はて」

「……古帷子で顔を包んで一ツ橋の門から駈けだし、お氷の駕籠に衝きあたって慌ててまた門内に駈け込んだその男は、酒井の大部屋で手遊びをしていた石田清右衛門という御家人崩れ。……勝負のことで小者の小鬢を斬り、足にまかせて逃げ出した鼻先へ駕籠が来て、ついのはずみに駕籠をひっくり返し、これは、と狼狽えて、また部屋へ逃げ帰った……氷もなにも盗んじゃいないのです。いわんや、あなたの子息の長一郎さんとやらじゃないんだから、つまらぬ庇い立ては、まずまず御無用」

青地は、思わず膝を乗出して、

「そ、それは、事実で……」

「事実もなにも、酒井の部屋には、これが嘘でないという証人が十人、二十人と居ります。……尤も、石田清右衛門のほうは、自分が駕籠をひっくり返したために、こんなえらい騒ぎになっているなんてことは知らない」

顎十郎は、長い顎の先を撫でながら、空嘯いて、

「ところで、手前には、だれがお氷の箱をあなたの家へ投込んだか、だいたいあたりがついている。……が、それは、こっちの話。……ところで、氷の箱ですが、これは盗まれたのではなくて駕籠から転げだし、あの辺の草むらの中へ落ちていた。それを誰かが、なにか金目なものと思いこみ、拾って抱えて来たが、さて、開けて見たところが、ただの空箱。……なんだ、詰らねえ、で、行きずりに垣根越しにあなたの家の中へ投げこんだ。……掏摸などがよくやる手で、盗んだ財布から金だけ抜きとり、財布のほうは所かまわずそのへんの縁の下へ投げこんで行く。そんな例はザラにあるんです。……運悪く投げこまれたのがあなたの家で、それが、あなたの不幸、と云ったようなわけ、……いかがですか、たしかにおわかりになりましたな」

それから一刻ほど後、顎十郎はブラリと加賀の大部屋へあらわれる。為と寅を空地へ呼びだして、

「……寅に為……よくやったな」

二人は呆気に取られて、

「よくやった……だしぬけに、何です」

顎十郎は、へへら笑って、

「駕籠が引繰返ったはずみに、氷の箱が駕籠から飛出して、土手下の草の中へころがりこんだ。……青地の伜が大熱で、たいへんに氷をほしがっていることを知っている。こいつぁ、いい、で、互いに眼顔で知らせ、わッ、あの侍、お氷の箱を抱えて逃げて行きやがる、と騒いだな。氷見役人などはみな頓痴気だから、そりゃ、大変、で追いかける。……どのみち、二人に用はない。西の丸外をさんざ駈けまわらせておいて、二人のうちの一人が氷の箱を抱え、早駈けして青地の家へ投げこむ……」

キョロリと二人の顔を見て、

「青地が馬鹿正直で、箱を抱えて自身番へ訴え出たには驚いたろう」

為は、息を嚥んで、

「ど、どうしてそれを……」

「見損っちゃいけない、おれの耳はお前たちのとはチト出来がちがうのだ。……氷盗人が箱を抱えたのを見届ける暇があるのに、衣類のなりがわからないというはずはない。わざと曖昧な申立てをしてるところに、なにかいわくがある。有馬の湯で話を聴いたときから、殊によったら、お前たちの仕業だとチャンと睨んでいたんだ」

「先生も、お人が悪い」

「人が悪いのは、そっちのほうだ。……お前たちがチョイチョイ青地の家へ来ることはおれ

は知っている。それを、まるで他人のようなことを云うから、これは、こう、と、見込みをつけた」

為と寅は顫えだして、

「こりゃあ、えれいことになった。……それで、あッしたちのほうはどうなりましょう」

「どうなるものか。……氷は溶けて跡方なし。水から出て水にかえる。……まず、何事も無かったことにすればいい」

坊主めくり　なめくじ長屋捕物さわぎ

都筑道夫

その一

日本橋通りの南伝馬町一丁目、二丁目というのは、現在の中央区京橋一丁目、二丁目だが、そのあいだの横丁に、祇園会のお旅所があって、毎年六月七日から十四日まで、神田明神の天王一の宮のお神輿が、お渡りになる。一の宮の祭神は素戔嗚尊で、この天王まつりの名物は、中通りの大行燈。南鞘町と南塗師町の横丁が、東中通りとまじわる四つ角に、四本の柱を立てて、辻いっぱいの行燈を、二階の高さに組む。なかには幾段もの桟を交叉させて、蠟燭を立てならべ、四面に張った絹には、名高い浮世絵師が、武者絵に腕をふるう。日が暮れて、蠟燭に火がともると、この大行燈の武者絵は、中空に大きく浮かびあがる。行燈の下は、有開道みたいに通りぬけ自由だから、四方どちらから入ってきても、明るく浮きあがった武者絵が、眺められるというわけだ。

この大行燈の枠のすみに、なんと、生首がのっているのが見つかったのは、天王まつりがゆうべでおわった六月十五日の朝だった。青あおと剃りあげたあたまに、ねじり鉢巻をしめ

て、断末魔の表情は歪んでいたが、落着いて見れば、目鼻立ちはまるで女、美しく若い僧形の首だった。ねじり鉢巻が不にあいなだけに、それは異様な眺めだった。

日本橋の大通りから入ってくると、左がわにすぐお旅所があって、その先が南鞘町になる。右がわは南塗師町で、この横丁、いま中央公論社のある通りではないかと思う。まんなかへんを横切っている東中通りは、いまの高島屋百貨店と高島屋新館のあいだの通りで、その四つ辻の正方形を、大行燈がおおっていた。この正方形をまうえから見て、南鞘町がわの上の隅を英、下の隅を美、南塗師町がわの上の隅を司、下の隅を泥とすると、生首は泥の隅に、司のほうをむいて、のっていた。したがって、発見者は司の角のうちの二階で、雨戸をあけた女中だった。朝日は美および泥の方向から、この横丁をてらすので、首は最初、黒いかたまりに見えた。けれども、すぐに目が馴れて、ひとの首だということが、どうやらわかった。それでも、女中はうろたえなかった。度胸があったからではない。祭がすんだばかりだから、若いもののいたずらだ、と思ったのだ。

「人形の首、と見たんでさあ。二階には、そのうちの息子が寝ていたんで、『若旦那、見ておくんなさいな。大行燈の上に、人形の首が、のっていますよ。だれが、いたずらしたんでしょうねえ』と、声をかけた。どれどれ、と起きて、窓から首をつんだした若旦那が、『人形じゃあないよ。ありゃあ、生首だ』といったから、きゃあっ、と女中はひっくりけえった。その声が、町内にひびきわたったから、みんなが外に飛びだしたてえます」

十五日の晩、神田久右衛門町代地の大露地で、茶めしの屋台の床几にかけた下駄常が、な

めくじ長屋の砂絵師にいった。雲のまばらな空には、大きな満月があって、すぐうしろの郡代屋敷の屋根や、横手の初音の馬場の火の見やぐらを、くっきりと照している。砂絵のセンセーは、ひや酒の茶碗に口をつけてから、

「その首は、どんなぐあいに、のっていたのだえ」

「へえ、ご存じかも知れませんが、大行燈の枠は丸太で組んである。四すみに飾り金具をつけた黒塗の額に、武者絵をかいた絹を張ったのが四枚、その枠にはめこんであるんです。ですから、枠の上すみには、横棒のはじと縦棒のはじが、はみだしている。上にはみだした縦棒に、ねじり鉢巻で、縛りつけてあったんでさあ」

と、白壁町は下駄新道の御用聞、常五郎は顔をしかめて、

「それで、落ちなかったんでしょう。行燈にのっているところを、あっしは見たわけじゃあねえ。南伝馬町二丁目かどの番屋に、おいてあるのを見ただけだが、なんとも、ものすごい」

「だが、塗師町へんは、親分の縄張じゃあ、あるめえがの。祭の世話役の大あきんどにでも、頼まれなすったかえ」

「檜物町の源七が、さっそく駈けつけましたがね。源七とっつぁんも、もう年だ。手つだいが出来たら、と思いまして」

といってから、下駄常は声を落して、

「というのは、表むきでね。ご明察の通り、塗師町の道具屋、加賀屋から頼まれたんでさあ。加賀屋は、中通りの角にある」

「生首を見つけた若旦那のうちかえ」

「その向うのうちでね」

つまり、泥の角の家だ。

「なにしろ、二階の窓から、腕をのばせば、首をくくりつけた柱に、手がとどく。いちばん疑われても、しかたがねえ。痛くもねえ腹をさぐられちゃあ、困りますから、というんで、番頭が頼みにきやした」

「それにしたって、こりゃあ、お寺社のかかりじゃあねえのかえ。首は坊主だって、いったろう。お寺社から町方へ、頼んできたとしたら、先に手をつけている檜物町の親分に声がかかって、お前さんの出る幕はあるめえが」

「こりゃあ、センセーにも似合わねえ。あたまが剃ってあったからって、坊さまとは限らねえでしょう」

と、常五郎は笑いながら、センセーが飲みほした茶碗をとりあげて、茶めし屋のおやじのもとへ、持っていった。話を聞かれない用心に、屋台から離れたところに、床几をすえていたのだ。ひや酒を茶碗につがせて、センセーの手に運んでから、下駄常はつづけた。

「定まわりの同心が、お寺社に問いあわせたら、行方の知れなくなった若い坊さまは、江戸にゃあいねえそうです」

「きのう殺られて、首を切られたんだろう。まだこれから、届けいでがあるかも知れねえ

よ」

「そりゃあ、そうだが、あっしの見たところ、あの頭は剃りたてだ。鼻を近づけてみたら、髪油だか、おしろいだか、いい匂いがわずかにしやした。ですから、首のぬしは男娼じゃねえか、と思うんですがね」

「なるほど」

「あたまを剃ってから、首を洗ったんでがしょう。切り口は、きれいなもんでした。大行燈の上も、血で汚れちゃあいなかった、というこってす。源七にいわれて、首をおろした鳶職のものに、聞いたんですがね。あっしが行ったときには、源七がしらべたあとで、大行燈は取りこわしてありましたから」

「だから、どうだ、というんだえ」

「あたまを剃ったのは、坊主に見せかけるためで、だからこそ、大行燈の上なんてえ、目につく場所に、さらしたんでしょうよ。当りめえなら、死骸は隠そうとしますぜ。間違えてもらいてえから、わざと目につくようにしたに違えねえ」

「こりゃあ、親分、大したものだ。おれなんぞが口だしは、いらざるものになったじゃあねえか」

と、センセーはにやにやしながら、茶碗の酒をあおって、

「そこまで目がとどいていりゃあ、すぐに埒があくだろう。蔭間茶屋のかずは、お取りしまりがあって以来、多くはねえ。そこを探しゃあ、目鼻がつこうというもんだ」

「ひとわたり、当ってみたんだが、まだ行くえ知れずの蔭間のうわさは、耳に入らねえんでさあ。あの連中、茶屋を移ることもあるから、湯島の蔭間をふたりつれて、南伝馬町の番屋へ、首実検にも行きましたよ。知らねえ顔だ、といっていました」

「それで、夜ふけに、おれを呼びだして、酒を飲ましたわけか」

「あっしの目のつけどころは、悪かあねえ、と思うんですが、どうですえ」

「あたまが剃りたてだからって、きのうまで髪があったとは、かぎらないぜ、親分。坊主あたまだからってお坊さまとも限らねえ。医者かも知れねえし、按摩かも知れねえだろう。画家や太鼓持にだって、坊主っくりがいる。おれの長屋のガンニン、アラクマも、いがぐり頭だ。髪をのばすより、剃っちまったほうが、早いくちだよ」

センセーがいうと、岡っ引は不服そうに、

「首は目あきですぜ。あの顔は太鼓持や、願人坊主じゃあ、ありやせん。医者や絵師で、あたまを坊主にするなら、もうすこし年をとっているでしょう。あのへんには、絵師や医者はたくさんいますがね」

南鞘町には伊沢玄沢、となりの大鋸町には狩野永徳、安藤広重。そのふたつの町のあいだの横丁は、狩野新道と呼ばれていたくらいだ。

「親分の見たところ、いくつだえ、その首は」

「十七、八か、行っていても二十二、三でしょう。からだを見ていないんだから、はっきりはいえませんがね」

「そいつだよ。胴体はどうしちまったんだろう。首だけ見ると、はたち前後か。切りくちは、どうだったえ。すっぱりと切ってあったか、ごりごり押切ってあったのか……」
「おさむれえの切ったものじゃあ、ありませんねえ、ありゃあ」
「近ごろは二本ざしだって、一刀のもとに首を落せるやつは、そういやあしねえよ」
と、センセーは苦笑いして、
「年期の入った魚屋に、まぐろ庖丁を持たしたほうが、よっぽど見事に切るだろうぜ」
「まぐろ庖丁ほど、刃の長えしろものじゃあねえでしょうが、庖丁で押切ったんでしょうよ。ですから、首を切られたときには、あの坊主っくり、もう死んでいた、と思いやす」
「医者にとっくり見てもらったほうが、いいんじゃあねえかな、その首は——それも、蘭方をおさめた医者のほうがいい」
「加賀屋が金を出してくれりゃあ、そういうことも出来るでしょうが……」
「その加賀屋だがな。腹をさぐられたくない、というだけじゃなくって、はっきりした理由があるから、親分に頼みにきたんだろう。違うかえ」
「まあ、腹をさぐられたくねえからには、違えねえんですがね。加賀屋の若旦那てえのが、道楽息子なんです。おまけに、武家屋敷お出入りの、道具屋のせがれらしくもねえ。向うっ気が強い、と来ている。前にも美人局にひっかかって、逆ねじをくわそうとして、結局よけいに金をとられた、ということがあったそうでね。それが、町内のうわさになったくれえだから、こんども間違えがあっちゃあいけねえ、という次第なんですよ。その若旦那、窓から大行燈に手がとどこうという、二階に寝起きしているものですから」

「首を見つけた若旦那も、二階に寝起きしていたんじゃあ、なかったかえ」
センセーが首をかしげると、下駄新道の常五郎はうなずいて、
「前のうちの若旦那。ええ、そうです。ここは柳花堂といって、絵絹えのぐ絵筆なんぞの老舗ですがね。二階に寝起きしている若旦那てえのが、これまた道楽息子。加賀屋の佐太郎のあすび仲間なんです」
「佐太郎というのが、加賀屋の若旦那の名だね。柳花堂の若旦那は、なんという」
「清七というんで」
そこへ、職人ふうの男がやってきて、屋台のおやじに、あんかけ豆腐と茶めしを頼んだ。大戸をおろした前の家なみの軒庇を、猫がゆっくり渡っていくのが、まんまるな月に照されて、はっきり見える。大きな白黒ぶちで、ふてくされたような歩きかたは、野良猫にちがいない。その動きを目で追いながら、茶碗の酒を飲みおわると、センセーは声を低くして、
「それで、親分、おれになにをしろというのだえ」
「子分たちに、蔭間茶屋はしらべさせますがね。それだけじゃあ、心もとない。いつもの伝で、知恵を貸してやっておくんなさい」
茶めしを食っている職人に聞えないように、下駄常はセンセーの耳にささやいた。砂絵師はにやりとして、
「蔭間に見えたとすると、その坊主っ首、よっぽどいい男なんだな」

「それほどでもねえんだが、まあ、色男のうちに入るでしょう。お化粧をしたら、けっこう色っぽいかも知れやせん」

「とすると、親分、坊主あたまにこだわって、男と思いこんでいるが、実はあんがい、女の首じゃあねえのかえ」

と、センセーがいったのは、肥った大きな野良猫が、身をくねらして、庇屋根から飛びおりるのを、見たからだった。意外にしやかなその身ごなしに、ふとり肉の年増おんなを、連想したのだ。岡っ引は一瞬、あっという顔になったが、すぐに口もとを歪めて、

「まあ、そんなことはねえでがしょう。あの肌のあんばいじゃあ」

「人間の肌というのは、死ぬと乾いて、かたくなるかも知れねえぜ」

「あすにでも、もう一度、とっくり見てきまさあ。それにしても、ことしゃあ、山王さまが蔭祭で、よござんしたよ。本祭だったら、南伝馬町は、きょうから猿舞を曳きだすんで、大さわぎでがしょう。あっしらがなにを聞いても、返事なんざあしてくれませんや」

一年おきの六月十五日は、赤坂山王神社のお祭だ。天下まつりといわれるくらいで、氏子は百六十余町、東は霊巌島、西は麹町、南は芝口、北は神田にわたっている。だから、本祭の年には十四日の午後に、お神輿が神田明神にお帰りになるとすぐ、南伝馬町では、日吉鷲平の有名な猿の面をつけた猿舞の山車を、曳きだすことになるのだった。町内の若者たちは、天王まつりにほてった五体を、そのままに山王まつりに持って行く。永田の馬場まで、夜なかに山車をひいていって、十五日の払暁に行列が出発する。一番山車は大伝馬町、太鼓の上に白い鶏をのせた諫鼓鶏で、二番が南伝馬町の猿舞なのだ。

その二

十六日の午すぎ、筋違御門うちの八辻ガ原で、センセーが砂絵を書いていると、汗をふきふき、マメゾーがやって来た。空は真夏の青さに晴れわたって、強い日ざしに、原を横ぎっていく犬も、はあはあ舌を出している。汗で毛なみの光った馬にのって、胸をはって通りすぎる武士の塗笠が、きらきらと目にまぶしい。御門の雑用をつとめる人夫たちが、ついさっき水をまいたばかりなのに、もう土は乾いていた。御門のかこい内外の水まきは、大勢の臥煙が手桶を持って、玄蕃という大桶から汲みだしては撒き、その走りまわるさまが、見ていて小気味よいものだけれど、きょうは一段と回数が多い。それでも、そばから乾いて行くのだ。

「センセー、おかしなことになりやした」

マメゾーは、うしろの土手にしゃがみこんで、浅黒い顔をかたむけた。砂絵師の前の地べたには、白や藍や黒の砂で、鯨とりの図が書きあがっている。かたわらの貧乏徳利をとりあげて、センセーはマメゾーに手わたしながら、

「こんどは、胴体がころがったかえ」

「あいかわらずの千里眼ですね。その通りでさあ」

といってから、マメゾーは徳利の酒を、ひとあおりして、
「楓川に、男の胴が棄ててありやした。首も手足もねえ胴てえのは、でけえ坊主まくらみてえで、おかしなものだそうで」
「手も足も、なかったか。男だてえことは、間違いねえだろうな」
「そりゃあ、もう」
と、大道曲芸師はにやりとして、
「男のしるしが、ちゃんとくっついていたてえます」
「楓川か。その胴体が、坊主っ首のものだってえことは、まず間違いなさそうだの」
楓川は紅葉川とも書いて、現在の首都高速一号線のところを、流れていた川だ。大行燈のかかる南塗師町、南鞘町の横丁は、日本橋の大通りから入ってくると、両がわが本材木町になって、この川につきあたる。川っぷちを、材木河岸といった。
「檜物町の源七親分も、そう見ていますぜ。胴だけ見ても、やさ男で、首をのせたら、似あいそうだって」
「くわしいことは、あいつから聞こう」
と、センセーは、須田町のほうへ、顎をしゃくった。定斎屋が、くすり箪笥の環を鳴らして、やってくる。暑気あたりの薬を売るその行商人は、炎天下でも、笠をかぶらない。せいぜい手ぬぐいを、吉原かぶりにするくらいで、売り声もあげない。天秤棒で前後にかついだ螺鈿うるし塗りのくすり箪笥を、腰の調子で、かったかった、かったかった、と引出しの環

を鳴らすのが、売り声のかわりだった。だが、センセーが顎でさししめしたのは、定斎屋ではない。そのうしろから、せかせか前かがみに、歩いてくる下駄常だった。センセーはにやりと笑って、
「あいつは番屋で、胴体を見てきたろう。おめえはユータや、カッパたちと手わけをして、加賀屋と柳花堂のこと、大行燈の武者絵をかいた絵師のことを、調べてくれ」
「合点。首を切られたのは、大行燈の絵師とつながりのある野郎かも知れねえ、というわけですね」
と、マメゾーはうなずいて、下駄常が近づいたときには、その姿はもう見えなくなっていた。白壁町の御用聞は、センセーの前で立ちどまると、むきみ絞りの手ぬぐいで、噴きだす汗を押えながら、しばらくは口がきけなかった。
「よほど、急いで来たらしいな、親分。中通りの首に、胴が現れたんだろう。首から下だから、地べたか川のなかか。そう遠いところへ出るはずはないから、川だとすれば楓川だな」
センセーがいうと、常五郎は目をまるくして、
「いつものことだが、おどろいた。見物のすくねえ砂絵なんぞは、やめちまって、易者になったら、たちまち倉が立ちますぜ」
「ごめんだよ、おれは気が小さい。倉なんぞ立ったら、盗っとが心配で、寝られなくなる」
「いつも、ぴたりと当るんだがなあ。けさがた、本材木町五丁目の材木河岸から、楓川におりる傾斜に、胴が棄ててあったんでさあ。荷足舟の船頭が見つけて、大さわぎになったんだ

が……」

「なるほど、川のなかであるはずはねえ。土手に、棄ててあったかえ、桐油合羽にでも、つつんであったか」

「いいえ、むき出しですよ。両腕は肩のところ、両足は腿のところで、切りおとされていやがった。首が坊主だったせいもあって、でけえ坊主まくらみてえに見える。首のつけ根に、どす黒いあとがあって、両手で喉笛を押しつけられたんでしょう。息がとまって、あの世へ行っちまったんです」

「首とは、はっきりつながるのかえ」

「南伝馬町の番屋で、檜物町のが首をのせてみて、間違いねえ、といっていたそうで——あっしの見たところも、おなじでしてね」

「背なかに刺青なんぞは？」

「あわてて起請を書かざるは、孝行のはじまり、というやつで、女の名めえも彫ってねえ」

「あえて毀傷せざるは、孝の始めなりだ、親分。わざわざ刺青なんぞをして、からだを汚すのは、親不孝のはじまりだぞよ、ということさ。ところで、蔭間の消えたのは、見つかったかえ」

「まだですが、見つけまさあ。あっしの推理が、あたっていましたからね。胴のおかげで、どうもありがてえ、としゃれたいくらいで」

と、下駄常は鼻をうごめかした。センセーは小膝をたたいて、

「そうか。胴には尻がついていたっけな。菊座をつかっていた様子があるのか」

「檜物町のは、そこまで見なかったようですがね」

と、下駄常はますます鼻を高くして、

「らくらく指が入りそうで」

「そうすると、なにも、親分、息せき切って、ここへ駈けつけることはなかったろう」

「いえ、蔭間じゃねえか、というのは的を射ていたが、もうひとつの見徳が怪しくなったからで」

と、下駄新道の親分、こんどは鼻を低くして、

「蔭間だてえのをごまかすために、坊主っくりにしたとしたら、どうして尻を見せたんでしょう」

「もっともだ」

と、センセーは感心してみせてから、しばらく腕をこまねいて、

「いまは、おれにもわからねえ。手と足が出てきたら、わかるんじゃあねえかな」

「手足が出ますかねえ」

「出るな。きっと出る」

いよいよ砂絵かきらしくなくなって、失せもの判断をする易者みたいに、センセーはうなずいた。

「達磨さんでも、手足を出して、踊りだす例があるぜ、親分。出るのを、待っていることは

ねえ。この一件、早く埒をあけたかったら、手足を探したほうがいい」
「そういわれても、どこを探したものやら、とっさには見当もつかねえ」
と、下駄常は腕を組んだ。
「そうさな。長屋の掃溜に隠しておいて、野良犬にくわえ出させる気かも知れねえ。南伝馬町の大あきんどの店さきの、天水桶にでも沈めてあるかも知れねえが……」
といってから、センセーはにやりとして、
「なんなら、親分、長屋のなめくじどもをつかって、探してやってもいいぜ」
「ありがてえ、そう願えれば、あっしのほうは心おきなく、蔭間さがしが出来るてえもんだ」
「だが、やつら、稼ぎの邪魔だなんぞと、いいだすかな」
「わかっていまさあ」
と、常五郎はふところへ手を入れた。センセーは見て見ないふりで、
「蔭間さがし、手足さがしも大事だが、ものごとは素直に見るのも、大事だろう。お寺社のほうから、どこかの寺の若え坊主がいなくなった、というような話はねえかえ」
「南伝馬町の番屋で、定まわりの旦那にあいましてね。その話じゃあ、お寺社のほうは、なんにもなしだ。蔭間あがりの寺ざむらいが、蒸発でもしていりゃあ、話はわけもねえんだが……」
「あせっちゃ、いけねえ。手足はこっちが、ひきうけてやる」

と、センセーは胸をたたいた。けれども、その晩、橋本町のなめくじ長屋で、マメゾーたちの報告をうけたときには、逆なことをいった。
「手と足がすなおに出てくると、この一件はこんぐらがって、めんどうになるかも知れねえ。下駄常が銭を出した手前、すこしは探すふりをしざあなるめえがの。眼目は、大行燈にかかわりのある人間だ。そっちに、力を入れてくれ」
「どうして、手足が出ると、こんぐらがるんですえ」
ガンニンが聞くと、センセーは顎をなでて、
「坊主っくりにして、尻まで出して、これ見よがしに、首と胴をさらしたわけが、わからなくなるからよ」
「そういわれても、なぜわからなくなるか、わからねえ」
と、ガンニンは首をかしげる。アラクマがへらへら笑って、
「そりゃあ、お前にわかるわけがねえ」
「お前にはわかるのかえ、アラクマ」
「おいらにわからねえから、お前にわかるわけがねえ、といったのよ、ガンニン」
「ばかなことをいっていねえで、話を聞かせろ。絵師をしらべたのは、ガンニン、お前だろう」
と、マメゾーが口を出した。願人坊主はいがぐり頭をなでて、
「ああ、四人の絵師が四方の絵を、一枚ずつ書いている」

「そんなことは、わかってらあな。毎年のこった」
と、ユータが壁の穴から匍いだして、
「おいらなんざあ、見ただけでわかる。お旅所のほうから見えるのは、大物浦の碇を負った平知盛、歌川国春の筆だ」
「材木河岸にむいたほうは、源為朝大鮫退治で、英斎秀長の筆」
と、ガンニンはひきついで、
「南鞘町のがわは、明智左馬之助湖水のっきりで、藤川友章の筆。南塗師町のがわは、酒呑童子と頼光で、歌川国虎の筆」
「国虎というのは、国春の弟子で、いま売りだしの浮世絵師ですね」
と、オヤマがやぶれ団扇をふった。野天芝居の女形が、裸の腰に、よごれた手ぬぐいを二枚、巻きつけたすがたで、横ずわりしているさまは、すこぶる不思議な眺めだった。蚊がなくなれば大晦日、という本所ほどではないにしても、橋本町のなめくじ長屋は、江戸に名だたる巣乱。針金で鉢巻をした欠すり鉢に松の葉、杉の葉を山盛にして、蚊いぶしを焚いている。その煙が、うちへ入ってくるのを、うちわで追いだしているのだった。
「そいつが、酒好きの変りものでね」
と、ガンニンは答えて、
「もっとも、師匠の国春も、大酒では知られている。だから、文句はいわねえらしいが、国虎はおまけに酒乱だ」

「ほんとに、虎になるわけだな」
テンノーが口をはさむと、ガンニンはうなずいて、
「いまから、あの飲みっぷりじゃあ、絵の人気が高まったころに、酒毒がまわって手がふるえるんじゃねえか、そういって、版元の手代が、顔をしかめていた」
「女のほうは、どうなんだえ」
マメゾーが聞くと、カッパがひきとって、
「そっちのほうは、おいらが聞いた。柳橋の売れっ子が、酒乱で殴られてもいいから、女房になりてえ、といっているそうだがね。国虎てえのは、女ぎらいで通っている」
「ひょっとして、男が好きてえことはねえかえ」
と、片肌ぬぎのセンセーが聞いた。カッパは首をかしげて、
「そうだとしたら、よっぽど隠していたんでしょう。蔭間を買っているような噂は、まるでありやせん」
「鮫退治の為朝をかいた英斎秀長は、たしかもう五十すぎじゃねえか」
「そうですよ、センセー」
と、うなずいてから、カッパはにやにやして、
「ですが、次から次と絵が出来て、売れているだけに、女のほうも次から次でね。泣いている女も、いるそうで」
「男のほうはどうだえ、カッパ」

「前尻だけで忙しくて、尻のほうまでは、手がまわらねえ、と思うね、おいらは」
「加賀屋と柳花堂のことは、だれが調べたえ」
「あっしとユータが、調べましたよ」
と、マメゾーが乗りだして、
「どちらの店のあるじも、悪いうわさはありません。それにひきかえ、息子たちは大したものだ。おやじたちは知らねえようだが、しょっちゅう連れだって、くだらねえ遊びをしているそうでさあ」
「滑稽本を読んじゃあ、そのまねをして、笑わせるつもりが、笑われているようですぜ」
と、ユータが顔をしかめて、
「狐に化かされたふりで、茶屋の二階に馬ぐそを持ちこんだり、駕籠のかわりに、早桶にへえって、吉原へくりこもうとしてみたり、あのぶんじゃあ、いまに勘当だろう、という評判で」
「その評判が、親の耳にはとどいていねえのか」
「いったん耳にとどいたものだから、この一年ばかり、おとなしくしているらしいや、センセー」
と、ユータは笑って、
「そろそろ、はじめるころだろう、という人もいるから、坊主っ首をさらしたのは、ふたりの悪いたずらかも知れねえ」

「いたずらのために、ひとは殺さねえだろうよ」
と、センセーは首をふって、
「だが、そんないたずらをするようじゃあ、ふたりの若旦那、女には持てねえな」
「それが、そうでもねえんで」
と、マメゾーが苦笑して、
「ふたりとも、いい男ですからねえ。惚れたり、惚れられたり、忙しいようでさあ。加賀屋の佐太郎が惚れた女を、柳花堂の清七が横どりして、大げんかになったこともある」
「するてえと、いまはふたり、仲はよくねえのかえ」
センセーが聞くと、マメゾーは首をふって、
「大げんかは一年前、ふた月かそこいらで、仲なおりをしています」
「おもしれえ話は、ねえようだな。お前たちは、なにか聞きこんでくれたかえ」
センセーがオヤマに聞くと、うちわをかまえた女がたは、テンノーをかえりみて、
「ふたりで手わけして、あのへん一帯、聞きあるいたんですけれど、おかしなことはありませんねえ。夜ふけに、変なやつを見かけたひとも、いませんし……ことしは山王さまがないから、あのへんの若い者で、夜なかすぎまで飲んでいたのは、多いんですけど」
「ただひとつ、鞘町のとなりの正木町に、豊吉というのがいてな。大工なんだが、いたってのなまけもの。鉋をにぎるより、賽ころをにぎっているほうが、多いという男だ」
と、牛頭天王のお札くばりが、もったいぶった調子で、

「その豊吉が、十四日のあけがた近く、松平さまの中間部屋から出てきて、越中橋をわたって、帰って来たと思いなさい」

越中橋は、楓川にかかっていた橋のひとつで、まんまえに伊勢桑名十一万石、松平越中守の上屋敷があった。

「橋をわたると、材木河岸。その暗がりを、ふたりの男が米だわらか、炭だわらか、とにかく俵を重そうにかついで、日本橋川から京橋川のほうへ歩いていったというんです」

と、テンノーはつづけて、

「豊吉はなんの気もなく、越中橋をわたるというと、大鋸町の露路へ入って、長屋へ帰った。だからして、俵をかついだふたりが、鞘町のほうへ曲っていったか、材木河岸をまっすぐ行ったか、そこまではわからない」

「それだけかえ」

ユータがテンノーをのぞきこむと、お札くばりのときには、天狗の面をかぶってあるく乞食神官、面をとっても、変りばえしない顔をふって、

「いや、そのときには気にならなかったが、生首のうわさを聞いて、はてな、と思った。米俵にしては、重そうにかついでいた。炭俵なら、なおさらだ、と豊吉はいうわけさ。川っぷちの暗がりで、おまけにふたりとも、頬かむりをしていたから、どんな男かはわからない。だが、どちらも、屈強なからだつきだった、といっている」

「明けがたちかい刻限だ、というんだな、テンノー」

と、センセーは首をかしげて、

「そいつは、おもしれえ。ほかにもだれか、そのふたりを、見たものがいねえかな。あしたになったら、探してみろ」

その三

「センセー、せっかく長屋の連中を働かしてくれたのに、申しわけねえのだが、中通りの一件は、目鼻がつきやした。わすれておくんなさい」

と、下駄常が頭をさげたのは、あくる十七日の黄昏どき。センセーは八辻ガ原のいつもの場所で、砂絵の片づけをはじめていた。湯あがりの芸者をえがいた五色の砂を、小さな箒ではきあつめて、布袋にさらいこみながら、

「目鼻がついたかえ、親分。そりゃあ、お手柄だ」

と、センセーはにこにこして、

「あの坊主っ首は、どこのどいつだったね」

「そりゃあ、まだわからねえ。下手人は女でしたよ」

「女か。こいつは、おどろいた。だが、死骸を切りはなして、さらすなんてえ真似は、なるほど、女のやりそうなことだ。どんな女だったえ、親分」

「小松町の露地に、おぎんという小唄の師匠がいる。弟子は多くねえんだが、男好きのする

いい女で、旦那衆の顔が見えるというんでさ。これひとりという、世話になっている旦那は、いねえようですがね」

小松町というのは、現在の首都高速一号線よりの、日本橋二丁目あたりだ。老舗が多い一郭で、横丁には浮世絵師や芸人も住んでいる。

「そのおぎんという女が、下手人かえ」

センセーが聞くと、下駄新道の常五郎、手柄ばなしはゆっくり、という顔つきで、

「まあ、お聞きなせえ。大行燈に鎮西八郎の大鮫退治をかいたのが、浮世絵師の英斎秀長だ。この秀長という絵師が、女のほうでも名高い。新右衛門町に住んでいて、となりの小松町のおぎんのところへ、ときどき行っていたというのを、聞きこみましてね。ちょいと、のぞいてみたんですよ」

「おぎんのうちをかえ」

「そうでさあ。格子には掛金がおりていて、声をかけても、返事がねえ。勝手口があいたんで、入ってみると、夜具が敷きっぱなし、枕屏風がひっくりけえって、そこらじゅう血みどろなんです。出刃庖丁と刺身庖丁、柄まで血まみれなのが、ころがっている。剃刀まで、放りだしてありました」

「なるほど。そこで、死骸の頭を剃ってばらばらに切ったわけか」

「そうにきまっていまさあ。男の着物と女の着物、これも血に汚れて、放りだしてありやした。殺されたのは、だれだかわからねえが、おぎんの情夫にちげえねえ。おぎんは大柄な女だてえし、死骸はやさ男。喉を絞めることも、ばらばらにすることも出来たでしょう。どこへ逃げたか知れねえが、おぎんをとっつかまえりゃあ、坊主っ首の身もとも、わかるでしょう」

「やさ男を殺して、切りきざむことは、女にも出来ようがの。大行燈の上へ首をあげたり、材木河岸へ胴を運んだりするのは、女じゃあ、無理じゃあねえかえ、親分」

「そりゃあ、手つだったやつが、いるんでさあ。そっちも、およその当りはついていやす。まあ、見ていておくんなさい」

口調がいやに丁寧なだけに、よほど自信があるのだろう。下駄常はにやにやしながら、立っていた。センセーは察しをつけて、

「するてえと、手足が見つからなくても、いいわけか。そりゃあ、すまないことになったな。このあいだ、親分にもらった銭は、みんなに分けてやっちまった」

「なあに、ようがす。気になさらねえでおくんなせえ。この次になにかお頼みするときの、前わたしてえことにしておきやしょう、あれは」

安心したような顔になって、下駄常は去っていった。いまの言葉がいいたくて、やはりぐずぐずしていたのか、と思って、センセーは苦笑いしながら、砂絵の道具をまとめた。それをかかえて、夕焼のいろを背に、柳原へかかると、土手にならんだ柳の葉が、風にさやさや鳴っていた。郡代屋敷の大屋根の上に、蝙蝠が無数に飛んでいる。なめくじ長屋のこわれかかった木戸を入ると、もう蚊ばしらが立って、わあんという唸りが、センセーを迎えた。あ

けっぱなしの戸口を入ると、そこで迎えたのはマメゾーで、
「八辻ガ原へいったんですが、白壁町のがいましたんでね。先に帰って、待っておりやした。小松町の小唄の師匠のことを、下駄常はいいましたかえ」
「得意そうに、話していったよ」
と、センセーは砂絵の道具を部屋のすみにおいて、やぶれ畳にあぐらをかきながら、
「ひとりで目処をつけたんだから、鼻を高くするのはかまわねえが、このあいだの銭は、こんどのときの前ばらいだ、と念を押していきゃあがった」
「あの親分のいいそうなことだ。センセーは、どう思います？　おぎんという女が、下手人でしょうか」
「まだなんともいえねえが、下駄常はなにか隠しているらしいぜ。あれほど気にした蔭間のことを、わすれたような顔をしていた。蔭間あがりが、小唄の師匠の情夫になる、ということも、ねえとはいえねえだろう。だが、どうもそこが気にかかる」
「殺されたのは、おぎんの男だといったんですかえ、下駄常は」
「うむ、いった」
センセーがうなずくと、マメゾーはにやりと笑って、
「そりゃあ、加賀屋の佐太郎を、かばってのことでしょう。佐太郎は、おぎんのところへ、出入りしていたんです。ご存じの美人局の一件のときに、煙草のかつぎ売をしている野郎が噛んでいて――名前までは、まだ調べが行きとどいていねえんですがね。その煙草屋が、佐

太郎のことを、おぎんの旦那につげ口をするとかなんとか、いっていたらしい」
「情夫じゃあなくて、おぎんに金をせびっていたのか。おぎんには、きまった旦那がいるわけじゃねえとか、妙な念の押しようをしていたが……」
「つまりは佐太郎が、死骸を始末する手つだいをしたのかも、知れねえからでさあ。おぎんを逃がすのに、金を出してやったかも知れねえ。どうせ、この一件をあつかったのは、檜物町の源七ですからね。下駄常には、おぎんを探すつもりは、ねえでしょう。加賀屋の若旦那をまきこまねえようにして、うやむやにしようとしているんです」
「なるほど、蔭間のあがりが、馴染客だった寺の和尚なんぞに金を出させて、煙草の行商になるてえのは、よくあることだ。そいつが、おぎんをいたぶろうとして、逆に殺された、というわけか。佐太郎は、おぎんに相談を持ちかけられて、死骸の始末と身を隠すのを、引きうけさせられてしまった。それで、いちおう話のつじつまは、あうがの。坊主にしたわけも、大行燈にのせたわけも、わからねえ」
と、センセーは腕を組んで、
「マメゾー、まだ金にする余地は、ありそうだぜ。佐太郎にあってみよう」
「みんなが引きあげて来ねえところを見ると、まだ塗師町へんにいるんでしょう。それならば、佐太郎がどこにいるか、すぐわかりやす」
と、うなずいて、マメゾーは蚊柱のうなる露地に出た。月がのぼりはじめたのか、宵の空が明るんでいる。夕涼みの縁台が出ている町を、砂絵師と大道曲芸師は、材木河岸へ急いだ。

ふたりとも、足は早い。鞍掛橋から小伝馬町、大伝馬町、堀留から伊勢町河岸へ出て、江戸橋をわたる。新場河岸から、材木河岸へかかると、越中橋の近くで、暗がりから匍いだしたものがいる。立ちあがったのを見ると、アラクマで、

「センセー、どちらへ?」

「佐太郎は加賀屋にいるかえ」

センセーが聞くと、アラクマは越中橋を指さして、

「しばらく前に、柳花堂の清七とつれ立って、松平屋敷のほうへ、行きやしたぜ。ユータが、あとをつけてやす」

「柳花堂の若旦那がいっしょとは、好都合だな。アラクマ、ほかのやつらは、どこにいる」

「テンノーも、オヤマも、このへんをうろついていまさあ。カッパとガンニンは、秀長と国虎のうちの近所に、いるでしょう」

「それじゃあ、お前はみんなに声をかけてくれ。もう大詰だから、安心して、帰って寝ちまっていいってな。マメゾー、行こう」

センセーは先に立って、越中橋をわたった。正面に松平越中守の屋敷の門が、大きく立ちはだかっている。門の屋根は、そのまま両がわの長屋の屋根につづいて、門扉の左右に番所がつき出ているから、翼のある獅子が、左右に大きく翼をひろげ、両足を前につき出して、うずくまっているみたいだった。左右どちらへ行ったものか、センセーが迷っていると、さむらい長屋の塀ぞいに、ユータが走りよって来て、

「センセー、いいところに来ておくんなすった。加賀屋と柳花堂の若旦那が、豊吉におどされているようなんで」

「大工の豊吉か。これで、すっきり筋が通った。どこにいる」

センセーが聞くと、ユータはいま来たほうを指さして、

「伊雑大神宮（いぞだいじんぐう）の裏っ手でさあ」

松平屋敷の塀の角を曲ると、小さな大神宮の社がある。といっても、鳥居はもうひとつ先の横丁にあって、松平屋敷へは、神社の背なかをむけていた。空に十七夜の月があっても、社殿のまわりの植えこみが、影をつくっているなかに、かすかに三つの人影が見える。

「マメゾー、お前は塀の上にいろ。ユータはこのへんにうずくまって、駈けだすやつがいたら、飛びかかれ」

といってから、センセーは三人に近づいた。足音をしのばせもしないから、三人はセンセーに気づいて、黙りこんだ。

「こんばんは。どちらが加賀屋の佐太郎さんだえ」

センセーは無造作に声をかけると、瘤の強そうな顔つきの背の高い若者が、びくりと眉を動かした。

「お前さんか。すると、こちらが清七さんだね」

たくましいからだつきだが、おとなしそうな目鼻立ちの若者に、センセーは目をむけてから、顔をそむけている袢纏すがたの男にむかって、

「お前が大工か、小ばくち打かわからねえ豊吉だな。今夜も目が出なくて、こっちのふたりを呼びだしたのかえ。小ばくちを打つぐれえは、ご愛嬌だがの。ゆすりはよくない。やめたほうがいいぜ」

「よけいなお世話だ。お前さん、この二人の用心棒かえ」

胡散くさげに豊吉がいうと、センセーは首をかしげて、

「さあ、どうするか、話によってだ。佐太郎さんは知恵者のようだから、おれを買ってくれるかも知れねえ。いもしねえ蔭間あがりの煙草屋なんぞをでっちあげて、つじつまをあわすぐらいだからな。小唄の師匠をばらばらにして、坊主にしたのは、豊さん、お前だろうが、案じつけたのは佐太郎さんだ。首を大行燈にのせて、清七さんに見せつけたのも、佐太郎さんが二階の窓から、やったことに違えねえ」

「ばかなことを、いわないでおくんなさい。なんで、わたしがそんな真似をするんです」

佐太郎がいらいらと眉をあげると、センセーは清七のほうへ顎をしゃくって、

「柳花堂の若旦那が、おぎんを殺しちまったからさ。佐太郎さんは、いつもの悪いたずらのつもりだったろう。おのれがつきあって、秘密を知った小唄の師匠を、清七さんにおっつけた。清七さんが、びっくりして、大笑いですむつもりだったんじゃねえかえ。ところが、もののはずみで、清七さんは師匠を殺しちまった。びっくりしたのは、佐太郎さん、お前さんのほうだったろう。しかたがねえから、仏の始末をひきうけて、豊吉の力を借りた。お前さんじゃあ、頭を剃るぐれえは出来ても、死骸をちょん切ることは出来めえからの」

「なんで、わたしがそんなことをしなきゃあ、ならないんですよ」

「おぎんが殺されたことを、知られたくなかったからさ。小松町の小唄の師匠は、女じゃあなくて、男だったんだ。蔭間とちがって、子どものころから、女になりたくてしかたのねえ——つまりは間違って、よけいなものをぶらさげて生れちまった男だったんだろう。おぎんとかかわりのあった旦那がたのなかにゃあ、男と気づかなかったものも、いたくれえだったろうよ。だから、仏の髪を剃りおとして、化粧も落して、さらしたんだ。すぐつづけて、胴も見せりゃあ、男が殺されたことになって、おぎんが殺されたとは、だれも思わねえ」

「そんなことをしなくても、床下へでも埋めちまえば、いいでしょう。そのほうが、ずっと楽だ。わたしゃあ、めんどう臭いことは、きらいだね」

佐太郎がくちびるを歪めると、センセーはにやりと笑って、

「他人のうちへ入りこんで、血に汚れた夜具をはこびだしたり、畳をとりかえたりは、出来ねえだろう。ただおぎんが消えたんじゃあ、あのうちの有様を見りゃあ、師匠が男を殺して、身を隠した、ということになる。だから、おんな髪に結っていた頭を坊主にし、撥だこのある右手を隠すために、仏をばらばらにしたのさ。そこが、お前さんの頭のいいところだ。首を目立つようにさらしておいて、次は川ぷちに胴とくりゃあ、手足は川底か、流れに押しながされたぐらいにしか、ひとは考えねえ。右手を隠すために、ばらばらにしたとは、思わねえぜ。清七さんも、佐太郎さんのこの術策にゃあ、感心したんじゃあねえのかえ」

「わたしゃあ、なにも知らなかった。師匠に惚れて、佐太さんに取りもちを頼んだだけなん

です」

と、清七はふるえ出して、

「ところが、いざとなったら、師匠はわたしがなにもかも承知の上と思っていて、とてもよろこんだ。わたしゃあ、びっくりして、逃げようとしたんです。すがりつく師匠ともみあっているうちに、あんなことになってしまって——茫然としているところへ、にやにやしながら、佐太さんが入って来たんですよ」

「師匠が死んでいるのに、佐太郎さんもびっくりして、あとはまかせろ、ということになったわけかえ」

「佐太さんにいわれて、豊吉を呼びにいったあと、わたしは帰って、寝床へもぐりこんで、ふるえていたんです。なんにも知りません。ですから、女中にいわれて、生首を見たときにゃあ、実におどろきました」

清七が肩をすくめると、豊吉は舌うちして、

「これじゃあ、なんにもなりゃあしねえ」

いったと思うと、いきなり身をひるがえして、八丁堀のほうへ走りだした。その前に空からふってきたのは、マメゾーで、

「おっと、そっちは同心組屋敷だぜ。自首されたんじゃあ、おもしろくねえんだ」

そのときには、佐太郎も楓川のほうへ、走りだしていた。だが、ユータに足をすくわれて、地べたへつんのめった。センセーは清七の肩をたたいて、

「この一件は、神田の常五郎親分が、もう埒をあけた。お前さんも、もののはずみでやってしまったことだから、さぞ悔やんでいなさるだろう。あたら若い命を、棄てることはねえ。おれがいっしょにいって、おやじ殿に話してやる。話したあと、おれたちがわすれるように、おやじ殿が、山吹いろの茶を出してくれるだろうよ。豊吉のことは、心配ねえ。俵をはこんでいるのを見たなんぞと、嘘をついた手前、いまさら番屋へ行くわけにも、行くめえがな」

狐の嫁入

銭形平次捕物控

野村胡堂

一

「親分、面白い話があるんだが――」
ガラッ八の八五郎は、木戸を開けて、長んがい顔をバアと出しました。
「あ、驚いた。俺は糸瓜が物を言ったかと思ったよ。いきなり長い顔なんか出しやがって」
銭形平次は大尻端折の植木の世話を焼く恰好で、さして驚いた様子もなく、こんな馬鹿なことを言うのです。それが一の子分ガラッ八に対する、何よりの好意であり、最上等の歓迎の辞であることは、ガラッ八自身もよく心得て居りました。
「ジョ、冗談でしょう。糸瓜が物を言や、唐茄子が浄瑠璃を語る」
「面白い話てえのはそれかい、八」
「混ぜっ返しちゃいけませんよ。親分が糸瓜に物を言わせるから、あっしは南瓜に浄瑠璃を語らせたんで――」
「大層こんがらがりゃがったな、――ところでその面白い話てエのは何んだい」
平次は縁側に腰をおろすと、煙管の雁首で煙草盆を引寄せました。

あまり結構でない煙草の煙が、風のない庭にスーッと棚引くと、形ばかりの糸瓜の棚に、一朶の雲がゆらゆらとかかる風情でした。
「狐の嫁入なんですがね、親分」
「狐の嫁入？――娘のおチウを番頭の忠吉に嫁合せるというお伽話の筋なら知って居る」
「そんな馬鹿馬鹿しい話じゃありませんよ。何しろ町中の物持が大概やられたんだから、この筋書は容易じゃありませんよ」
「独りで呑み込まずに、さっさとブチまけて了いな。狐の嫁入がどうしたんだ」
平次も少し乗気になりました。この話はどうやら筋になりそうです。
「ツイ十日ばかり前から、荒川堤で狐の嫁入がチョイチョイおこなわれるんですよ」
「おこなわれるは変だね」
「最初は丁度この月の始め、雨のショボショボ降る晩でした。戌刻半頃小台の方から堤の上に提灯が六つ出て、そいつが行儀よく千住の方へ土手を練ったんで、川向うの尾久は祭のような騒ぎだったそうですよ」
「川向うが騒いで、小台の方じゃ騒がなかったのかい」
平次は早くもガラッ八の話の中から疑問をたぐりました。
「そこですよ親分。尾久の方からは、川向うの土手を、提灯が六つゆらりゆらりと練って行くのが見えるが、土手下の小台の方からは、たった一つもそんなものが見えなかったというから不思議じゃありませんか」

「フーム、器用なことをするおコンコン様だね」
「王子が近いから、いずれ装束稲荷の眷族が、千住あたりの同類へ嫁入するんだろうてえことでその晩は済んだが、驚いたことにそれから三日目の晩、又雨のショボショボ降る日、今度は先のよりでっかい狐の嫁入があったんです」
「どうしてでっかいと解った」
「その時は提灯が倍の十二でさ、土手を十二の提灯が行儀よく練るのが川に映ってそりゃ綺麗でしたよ」
「お前はそれを見ていたのかい」
「あっしが見たのは三度目ので」
「三度もあったのかい」
「だからお話になりますよ。――それから五日目の昨夜、昼頃から誂えたようなショボショボ雨になったでしょう」
「フーム」
「尾久の友達が前から、打合せてあったんで、大急ぎで出かけました。こんな晩は又狐の嫁入があるかも知れない、なかったら向う川岸を眺め乍ら、夜っぴて飲もう――てえ寸法で」
「呆れた野郎だな。その友達というのは誰だい」
「尾久の喜八で、いい年をして居るくせにろくな捕物をしたことはないが、酒は滅法強い」
「何んて口をきくんだ。それから何うした」

平次はこの狐の嫁入話が、すっかり気に入った様子です。
「待つほどに酔うほどに」
「気取らずに筋を通しな」
「何しろ日が暮れる前からやって居るでしょう。亥刻近くなって、好いかげんトロリとしていると、川向うにチラと明るいものが出て来た――」
「――」
「喜八の家は坐って居て釣の出来るのが自慢で、川向うの狐の嫁入見物には、これほど結構な桟敷はない」
「それからどうした」
「ショボショボ雨の向う川岸へ出た提灯の数は、何んと今度は三倍の十八じゃありませんか。それが六つずつ三つになって、行儀よく千住の方へ練るから見物でさ」
「お前はそれを黙って見ていたのか」
「其辺に舟はなし、川へ飛込んだところで、親分が知ってなさる通り徳利でしょう。仕方がないから指をくわえて、喜八と二人であれよあれよ」
「間抜けだなアー、何んだって宵のうちから向う川岸に廻って、狐の嫁入を見極めなかったんだ」
「向う川岸の小台の方からは、提灯が一つも見えなかったというから不思議じゃありませんか。――小台の衆は、尾久の奴等は臆病だから、そんな物を見るんだろうと言うと、尾久の

手合は口惜しがって、何を小台の寝呆け野郎――という騒ぎで、こいつは何時まで噛み合せても埒はあきませんよ。幸いあっしがこの眼で見たんだから、狐の嫁入が本当に通ることには間違いありません」

「話はちょいと面白いが、それっきりじゃ仕様がない。お狐にしちゃ手数がかかるから、いずれは誰かの悪戯だろう。提灯屋が喜ぶだけの事さ」

平次は軽く片付けて、もとの植木の方へ、注意が外れて了いそうです。

「親分、話はこれからですよ」

ガラッ八は乗出しました。低い鼻が少しばかり蠢めきます。

二

「大層手数のかかる話じゃないか。早く筋をブチまけて了いな」

平次は不精無精の顔をネジ向けました。

「狐の嫁入見物で、どの家も空っぽになったところへ、空巣狙いが入ったんで」

「何んだ、そんな事か」

「物持と思われる家は、大抵やられましたよ。尤も動けない老人や病人が仕様事なしに留守番をしている家は助かりましたがね」

「大層手数のかかる空巣だが、余っぽど盗られたのか」

「盗られた家は七八軒。金は田舎のことだから、五両か十両でしょうが、品物は随分やられましたよ」

「三代前から伝わった紋附といったような品だろう」

「それから生物――」

「牛かい、馬かい」

「人間なんで」

「人間？」

「清水和助という町一番の大地主で、苗字まで名乗る家の掛人、お夏という十八になる娘が盗まれましたよ」

「フーム」

「あっしが見たわけじゃありませんが、綺麗な娘だったそうですよ」

「それから」

「それっきりで、尾久の喜八も、――こいつはこちとらの手に了えないから、銭形の親分にお願いするようにって」

「それで尾久から飛んで来たのか」

「ヘエ――」

「馬鹿だなア、そんな事は尾久で調べ上げれば、半日で解るのに」

「半日や一日じゃ解りませんよ」

「急所を外れるからいけないんだ。例えばあの辺から江戸へかけて質屋を張らせるとか、提

灯屋を当って見るとか」

「喜八の子分が暗いうちに手を廻しましたよ」

「提灯を十八も揃えるには、一人で二つずつ持っても、九人の手が要るだろう。多勢組んでいる悪者を捜し出せば、思いの外早く埒があくじゃないか」

「九人組なんて大袈裟なのはありませんよ」

「他に手の付けようがあるものか。——尾久の喜八兄哥が宜いようにするだろう。放って置くが宜い」

銭形の平次は余り相手になり度くない様子です。

「でも、親分。喜八は飲みっ振りも、気前も良い男ですよ」

「呆れた野郎だ。いやに喜八兄哥の肩を持ってると思ったら、そんな事なのか」

「頼みますよ、親分。折角喜八があんなに言うんだから」

「じゃ手前だけ行って見るが宜い。どうしても手に了えなきゃ、その時俺が行ってやろう」

尾久まで乗出すのは、さすがに気がさしたか、平次は容易に御輿をあげようともしません。

ガラッ八は強ってとも言い兼ねた様子で、そのまま引返しました。

それから二日、紛れるともなく御用にかまけて紛れていると、

「た、大変ッ、親分」

ガラッ八の大変が髷節を先に立てて舞い込んだのです。

「何をあわてるんだ。——尾久から大変の百万遍をやって来たんじゃあるまいな」

「親分、落ち着いていちゃいけませんよ。大変な事が始まったんだ。あっ喉が涸く、水を一杯——」

「お静、八が水を欲しいとよ。そんな小さい茶碗で間に合うものか、手桶ごと持って来るが宜い。——さア、一体何が大変なんだ、話して見るが宜い」

「人間が二人やられて、その上清水の息子が行方不知になりましたよ」

「成程そいつは大変だ。詳しく話して見ろ」

「詳しくにもざつにも、これっきりですよ。村のあぶれ者で、小博奕と強請を渡世のようにしている照吉と伊太郎というのが、尾久の土手で斬られて、ひどい死様で——」

「フーム」

「その晩、地主の清水和助の一人息子、清次郎という糝粉で拵えたような息子が行方不知になったんで」

「昨夜は狐の嫁入はなかったのか」

「生憎雨が降らなかったせいか何んにもありません。尤も狐の方でも三人娘を嫁にやってあとは品切れになったのかも知れませんがね」

「無駄を言うな、兎に角行って見ようか、少し遠いが」

「有難てえ、そう来なくちゃ——」

ガラッ八の八五郎は、額を叩いて先に立ちました。神田から尾久まで二里に余る道ですが、斯う調子づくと、八五郎は調法なことに殆んど疲れを知らぬ人間です。

三

尾久の土手へ行って見て、さすがに平次も驚きました。田舎のことで、検屍の手が廻らないのか、二人の死骸は筵を掛けたまま、土地の御用聞の喜八が頑張って、一生懸命弥次馬を追っ払って居りますが、まだ八州の役人も顔を見せず、江戸の御用聞の平次が来ても、遠慮しなければならぬほどの人間は一人も居りません。

「お、銭形の」

喜八の顔には、救われた者の喜びが漲りました。

「尾久の兄哥、久し振りだったな。相変らず達者で良いね」

「達者なのは口と酒ばかりだ。見てくれ、この通り血の海だが、俺じゃ手の付けようはねエ。八州の役人が来ないうちに目鼻を付けなきゃ、又うんと小言を言われるだろう。それに他の御用聞に嗅ぎ出されて、馬鹿にされるのも業腹だ。銭形の兄哥なら――」

喜八がそう言うのも無理はありません。千住の先は江戸の町奉行の管轄でなく、言わば平次は縄張り違いですが、この老御用聞を救ってくれるのは、功名に恬淡な平次の外にはありそうもなかったのです。

尾久の喜八は土地に根を生やした良い顔には相違ありませんが、喧嘩の仲裁、もめ事の調停なら知らず、むずかしい捕物となると全くの苦手で、血を見るともう手も足も出ないような、御用聞離れのした男でした。八五郎を拝んで、平次を引出したのは、土地の仲間にこの功名を譲って行かれ度くないばかりの苦策だったのです。

「それじゃ、ちょいと覗かして貰おうか。成程こいつは？」

平次は筵を剝いで見て驚きました。照吉と伊太郎はどっちも三十五六、典型的な安やくざですが、実に眼も当てられぬ凄まじい死にようをして居るのでした。

わけても伊太郎は全身数十ヵ所の傷を受け、最後に左の胸を突かれたのが致命傷で、膾のようになってこと切れ、照吉はほんの二三ヵ所のかすり傷を受けただけ、その代り見事な袈裟掛けに斬られて死んで居ります。

「銭形の兄哥、もうお役人の見える頃だ。此場の恰好だけでも付かないものだろうか」

喜八は独りで気を揉んで居りました。

「待ってくれ、――此場の恰好だけなら、何んとか付くだろう。其代り後で様子が違っても構わないだろうな」

「構わないとも」

「もう一つ、念のために二人の懐を洗ってくれ。金は持って居ないだろうと思うが――」

「不断百も持って居ない人間だが、この二三日馬鹿に景気がよくて、伊太郎などは近在の賭場を門並み荒して歩いたそうだよ。――何んでも金の実る木を植えたとか言って」

「ところが、伊太郎は財布も紙入も持っちゃいねエ」

「おや、変なことがあるものだね、銭形の」

「大方そんな事だろうと思ったよ」

「――――」

そんな事を話しているところへ、土地の御用聞に案内させて、検屍の役人が乗込んで来ました。

「ひどい事をするな。――下手人の目星は付いたのか、喜八」

役人も現場の虐らしさに、ひどくタジタジとなって居ります。

「へエー、大概見当は付いた心算で御座います」

喜八は平次に教えられた通り、ひどく簡単に答えました。

「どう付いたんだ」

「伊太郎と照吉は無二の仲でしたが、近頃伊太郎が何かで儲けた様子で、パッパして居りました。多分昨夜此処で出っ逢わして、照吉が無心を吹っ掛け、それを聴かなかったので喧嘩になったので御座いましょう」

「フーム」

喜八の鑑定の要領のよさに、役人も、役人と一緒に来た御用聞達も釣り込まれて了いました。

「二人は此処で、人交えもせずに斬り合って居るうち、伊太郎の斬った刀と、照吉の突いた刀とが一緒になり、相討ちになって死んだもので御座いましょう。その証拠には、二人の長脇差はこの通り血だらけで、一間とは離れずに死んで居ります」

「フム」

「若し、誰か他の者が、この二人を斬ったとすれば、これだけの傷をつけたんですから、うんと返り血を浴びたことでしょう。その辺にマゴマゴして居れば直ぐ知れて了います。土地者には、この二人のあぶれ者を一緒に相手にして、見事に斬り伏せるような、そんな腕の立つ人間はありません」

喜八の説明は如何にもよく行届きます。それを口移しに教えた平次は、八五郎と一緒に役人達に背を見せて、群がる弥次馬を追っ払って居ります。

四

「有難てえ。これで俺も坊主にならずに済んだよ、銭形の」

役人と、役人について来た二三人の御用聞の後ろ姿を見送って、尾久の喜八はホッとしました。

「その代り、これからが大変だよ、喜八兄哥」

平次は引返してもう一度二つの死骸を検めて居ります。

「大変というと？」

「下手人を捜すんだよ。――それから狐の嫁入を仕組んだ野郎と、泥棒と、人さらいと」

「二人は相討で死んだんじゃないのか」

喜八の鼻はキナ臭く動きました。

「それは兄哥の顔をつぶさないように此場のがれの言い訳さ。相討なんかじゃない、立派な

下手人があったんだ」
「誰だい、そいつは」
「あわてちゃいけない。俺は江戸の町方の御用聞だから、八州の役人が頑張って居ちゃ、いくら兄哥の手伝いでも仕事が出来ない。斯う追っ払って置いて、それから仕事をはじめるのさ」
「へェー」
平次の話の意外さ、喜八はすっかり胆をつぶしてしまいました。
「第一、昨夜まで恐ろしく景気のよかったという、伊太郎が百も持っちゃ居ないだろう」
「フーム」
「小判は愚か鐚一枚入った財布を持っちゃ居ない。照吉の方は財布は持って居るが一文なしだ」
「――――」
「二人が死んだ後で、誰か伊太郎の懐ろを抜いたに違げえねえ。が、こんな虐たらしい死骸から財布を抜くのは通りすがりの人間でない事は確かだ」
「成程」
「それに、伊太郎の傷は前から突いた傷だが、照吉は後ろから大袈裟に斬られている。背の方が深く斬下げられて居るし、前は刃先が浅いから、こいつは間違いはない。こんな具合に前から斬るためには、踏台でもしなきゃなるまい」

「フーム」
「伊太郎は自分の胸を突かれ乍ら、踏台をして照吉の肩先を斬り下げたか。――照吉が大地に坐って肩先を大袈裟に斬られ乍ら、伊太郎の胸を突いたか」
「すると、どんな事になるんだ、銭形の」
喜八はすっかり圧倒されて了いました。
「照吉は伊太郎より、ぐんと腕が上だろう」
「その通りだ。二人が相討になったと聞いて、照吉の野郎余っ程運が悪かったろうと思ったよ」
と喜八。
「照吉はほんのかすり傷を受けただけだが、伊太郎は滅茶滅茶に斬られて居る。多分照吉は伊太郎の胸を一と突き、――首尾よく片付けて了ってほッとしたところを、誰かに後ろから袈裟掛けに斬られたんだろう」
「成程その通りだ」
平次の説明は痒いところへ手の届くようでした。
「それだけは解ったが、照吉を殺して財布を抜いたのは誰か。それをこれから捜さなきゃなるまい」
「?」
「養い娘を誘拐された上、息子が行方不明になったという、地主の清水のところへ行って見

ようか。——八、お前は喜八兄哥の身内の衆に案内して貰って、土地の質屋と両替屋を片っ端から調べてくれ。品物は隠して置くかも知れないが、空巣稼ぎで金を盗んだ奴は、三日と費わずに居る気遣いはねェ」

「ヘエ——」

八五郎は喜八の子分を二三人駆り出して、八方に散りました。二つの死骸はもう検屍が済んで、町役人に引渡したのです。

五

清水和助というのは、尾久の半分ほども持って居ると言われた大地主で、先代は苗字帯刀を許されたほどの大百姓ですが、和助は養子で、早く女房に死に別れた上、何んの因果か子供運がなく、たった一人の男の子で、二十三になる清次郎というのを、杖とも柱とも頼む贅沢なうちにも淋しい生活でした。

尤も親類から預ったお房という二十歳の娘があり、世間ではそれを清次郎に娶合せることとばかり思い込んで居りましたが、どうしたことかそんな様子もなく、半年ほど前から清水家に掛人になっている、お夏という十八になる娘と、この秋は祝言させるということに話が決って居るのでした。

「江戸の町方のお方?——そうですか。私は和助、伜の行方を突き留めて下すって、無事に戻りさえすれば、お礼はどんなにでもします。どうぞ、一骨折って見て下さい」

主人の和助は、喜八、平次の二人を迎えて斯んな事を言うのです。五十前後の脂の乗った中老人で、物欲の旺盛らしいのと、何事も金で始末の出来ないものはないと思い込んで居る様子で、ひどく平次の癇にさわります。

「養い娘のお房さんというのがあるのに、どうして、そのお夏さんというのを嫁にすることになったんです」

平次の最初の問いは斯う言ったものでした。

「お夏の父親は私の昔の友達で、恩がありますよ。それに、伜がお夏でなきゃと言うので——」

和助の顔には苦渋の色がアリアリと刻み付けられました。

「そのお房さんとやらに逢わせて下さい」

平次はこの欲の深そうな主人と長く話して居るのが鬱陶しくなった様子です。

お房というのは二十歳というにしては少し老けた方で、決して綺麗ではありませんが、何んとなく智的な感じのする娘でした。

「お前さんはお房さんというんだね」

「ハイ」

お房は淋しく俯向きました。

「此家とどんな係り合いがあるんだ」

「私は旦那様の甥の娘で、遠い親類ですが小さい時両親に別れて、此処に引取られました」

「主人はよくしてくれるだろうね」
「それはもう」
弁解するような調子のうちに、何かしら悲しい語気が潜みます。髪形も着て居るものも、至って質素で、若いにしては智的に見えるのは、そのためだったかも知れません。
「お前さんは此処の嫁になる筈じゃなかったのか」
喜八は遠慮のない事を言いました。
「いえ、飛んでもない」
「すると、お夏が嫁になっても、不服はないわけだね」
「――――」
お房はうなずきました。
それから平次は主人の部屋、お夏の部屋、伜の部屋などを見せて貰い、物置と納戸と土蔵まで念入りに調べさせて貰いました。
「まさか土蔵に隠れているような事はあるまい」
と喜八。
「人間は隠れちゃいないが、――俺は提灯の数を勘定したんだ」
平次は変なことを言います。
「提灯がどうしたというんだ」
「これ程の大家に提灯が二つしかないのを変だとは思わないか、兄哥」

「そう言えばその通りだが――」
「狐が持出したかも知れない。兎に角、提灯を掛ける釘が十三遊んで居るよ」
二人は雇人達に逢って、お夏の身の上のことを訊きましたが、誰も詳しく知ってる者はありません。
「親分」
清水の門を出ると、不意に声を掛けた者があります。
「あ、与三松か」
喜八は鷹揚に挨拶しました。相手は四十年輩の堅気ともやくざ者ともつかぬ男。
「ちょいとお耳に入れ度いことがありますが」
「此処で言うが宜い。――この人は俺の友達だよ。構わないとも」
喜八は平次を友達にして了いました。幸い江戸を離れると、神田の銭形平次もあまり顔を知られては居ません。
「外じゃ御座いませんが、――行方不知になった清水さんの掛人のお夏という娘のことを、何うかしたら、浪人者の大井半之助さんが御存じじゃありませんか」
「それはどう言うわけだ」
「親分は御存じじゃありませんか、――大井さんというのは、あの娘の後を慕って、此処へ来た人ですよ」
「――――」

「お夏さんの父親は清水の旦那の若い時分の友達で、昔は江戸で一緒に仕事をしたが、清水の旦那はすっかり残して尾久に引込んであの身上を拵え、お夏さんの父親は、商売の縮尻から、二三年前首を吊って死んだという話ですよ」

「フーム」

「その娘を清水の旦那が引取ると、浪人者の大井半之助さんが附いて来て、近所に家を借りて見張って居るんです。大変な執心ですよ」

「有難う。それだけ訊くと大変役に立つ、――一つその大井とか言う人に逢って見ようか、兄哥」

平次は早速新しい手掛りをたぐりました。

「無駄だろうと思うよ。浪人者と言っても、生っ白い弱そうな武家で、朝から晩まで本を読んだり歌を作ったり、女のするような事ばかりしている男だ。若い娘を誘拐たり、腕っ節の強いやくざを二人殺したりするような、そんなことの出来る柄じゃない」

喜八は頭から相手にしません。

「でも、武家は心得がありますよ。弱いようでも、いざとなれば、こちとらの二人や三人はどうにでもなりまさア」

与三松もなかなか主張がありそうです。

「じゃ行って見るとしようか」

平次はその弱い武家に興味を持ち始めた様子です。

六

二人は直ぐ近所にささやかな借屋住いをしている、浪人大井半之助を訪ねました。「弱い武家」で通っているだけに、二十五六の良い男ですが、華奢で柔和で、どう見ても人間を誘拐たり、やくざ者を斬ったりする柄とは思われません。

「お聞きでしょうが、清水屋敷のお夏さんが行方不知になりました。旦那は前からお夏さんを御存じのようですが、お心当りはございませんか」

喜八の言葉は丁寧ですが、抜差しならぬ言質を摑もうとする意気込だけは猛烈です。

「知らない。――何んにも知らない。それで実は私も心配して居るのだが――」

読みさしの本も手に付かない様子、腕を拱いて、青々した月代を見せます。

「お夏さんと、清水の旦那はどんな係り合いになって居りましょう」

「その事ならよく知って居る」

大井半之助の説明は長いものでしたが、一と口に言うと、今から二十五六年も前お夏の父石崎金次という浪人者と、今は清水の主人になっている和助が、江戸で落合って懇意になり、木曾の御留山を伐り出して巨万の暴富を積みました。

その後和助は尾久に帰って清水の養子になり、持参金で財産を整理して、今日の大地主になりましたが、石崎金次はその後も清水和助の資本でいろいろの仕事を続け、二三年前旧悪が露見して、千住の宿で自殺して相果てました。

石崎金次の死には、かなり疑わしいものがありましたが、日蔭者の悲しさは、それを発き立てるわけにも行かず、娘のお夏は間もなく清水和助に引取られ、尾久の屋敷につれて来られて、和助の伜の清次郎が望むままに、嫁にすることになった様子です。

大井半之助は石崎金次の悪事を憎み乍らも、その娘のお夏の美しさに引かされ、子供の時から親しくして居りましたが、お夏が尾久に引取られてからは、浪人者の気楽さ、後を慕って此処へ移り住み、蔭乍らお夏の安否を見護って居たのです。

「こんなわけだ。——これ以上の事は何んにも知らない。お夏が逃げ出したものなら、自惚のようだが、此私のところより外に行く場所はない。此処へ姿を見せないところを見ると、多分悪者に攫われたのであろう」

半之助はそう言って暗然と眼を垂れるのです。

平次と喜八は浪宅を出て二三十歩行きましたが、フト平次は立止って、

「どうかすると、あの家にいるかも知れない。行って見ようか、兄哥」

「何んだい」

「まア、見付けてからの事だ。この八卦は当らないかも知れないから」

二人はもとの大井半之助の家へ引返すと、一応断って、裏の物置を開けて貰いました。

「この物置は滅多に使うことはあるまいね」

平次は案内の婆やさんに訊きます。

「もと百姓家で使った物置だから、あんまり広くて役に立たねえよ。近頃は三月も開けたことがねえだ」

「そうだろう」

そう言い乍ら中へ入った二人、

「あっ」

喜八は思わず声をあげました。広い物置の隅に、各種各様の提灯が十七八、蠟燭も抜かずに滅茶滅茶に積んであるではありませんか。

「こんな事だろうと思ったよ。狐の嫁入の道具が、矢張り川の此方にあったんだ」

平次はそれを予期した様子で一向驚く色もありません。

「縛って了おうか」

喜八は舐めきます。

「誰を？」

「知れたこと、あの弱い浪人者だよ」

「冗談じゃない。自分が細工した狐の嫁入道具なら、自分の物置へ隠して置くものか、あの浪人者を縛ると、飛んだ事になる」

「それじゃ？」

「もう少しあちこち歩いて見よう」

二人はまた川岸っぷちの方に取って返すと、八五郎と下っ引二三人が勝誇った様子で飛んで来ました。

「親分」
「両替した奴が判ったか」
「皆んな判りましたよ。それから蠟燭を買った野郎も――」
ガラッ八はすっかり弾みきって居ります。
「成程、其処まで気が付けば大したものだ。ところで、そいつは、伊太郎か照吉か」
「あッ、親分も訊いて歩いたんで？」
「歩きはしないが、見当だけは付いているのさ」
「そんなによく解っているなら、あっしが汗を掻くまでもないでしょう」
「まア怨むな。足で取った証拠でなきゃ、真実の証拠にならない」
平次は八五郎を撫め乍ら、次第に川岸っぷちを遡上って行きます。
「何を捜すんだ、兄哥」
と喜八。
「あれだよ」
「こいつは、清水屋敷の舟だが？」
平次の指さしたのは此辺の川を渡すのに使う舟で、何の変哲もなく、岸の杭に繋いであるのでした。
「この舟で渡って、川向うの土手で狐の嫁入をやったのさ」
「この小さい舟に九人も乗ったかい」

喜八はまだ狐の嫁入行列を九人以下ではないと信じて居る様子です。
「いや、たった三人さ。その舟の中に三間以上の棹が三本もあるのは不思議だと思わないか」
「？」
「川舟の棹は大抵二本に決ったものさ。一本では流した時困るが、三本は多過ぎるよ」
「その棹一本に提灯を六つずつブラ下げられるだろう。――最初の晩は一人でやったから提灯が六つさ。二度目は二人でやって、三度目は三人でやった。三人の人間が銘々提灯を六つずつブラ下げた棹を持って川向うの土手を歩いたから、此方から見る人間は驚いたわけだ。――それも雨のショボショボ降る晩に限った。川向うの人達に見付けられ度くないからだ」
平次の絵解きは奇抜ですが、今はもう何んの疑いもありません。
「そう言えば提灯は六つずつ三ツ別々に揃って居た様な気がする」
ガラッ八もその晩のことを思い出します。
「此方からだけ提灯が見えて、川向うの小台の方からは何んにも見えなかったのはどう言うわけだろう」
と喜八。
「俺には見当だけは付いているが、これも証拠がないからはっきりは言えない。――多分提灯一つに菅笠一つずつ下げて、向う側へ灯の見えないようにしたんではないかと思う。何処かに菅笠を十八積んであるよ」

平次はそんな事まで考えて居るのです。

七

此処まで突き留めて、これから先はハタと行詰りました。

相変らずお夏と清次郎の行方は解らず、伊太郎と照吉の相棒の見当も付きません。

日が暮れると、一応喜八の家へ引揚げて、平次と八五郎と三人、額を鳩めましたが、斯うなると平次にもなかなか良い知恵が浮かばなかったのです。

「たった一つ術があるんだが――」

平次は言い度くないことを言う様子でした。

「何んでもやって見ようじゃないか、銭形の。考えがあるなら言ってくれ」

喜八は膝を乗出します。

「変なことを訊くようだが、この辺で俺の名前を知ってる者はあるだろうか」

平次は恐る恐るこんな事を言うのです。

「神田の銭形平次兄哥を知らない者があるものか。顔を知らなくとも、名前だけは子供でも知って居るよ。身に覚えのある野郎は、銭形と聴いただけでも身顫いする」

気の良い喜八は立て続けにこんな事を言うのです。

「そんなに煽てちゃいけない。じゃ――喜八兄哥の言うのを半分に聞いて、いよいよたった一つの術に取かかって見よう。――此処に居るだけの人数で、尾久一杯に触れ廻して貰い度いんだ」

「何を触れるんだ」

「――神田の平次が来て、下手人の目星が付いたそうだから、明日は伊太郎照吉殺しも、お夏と清次郎の誘拐野郎も縛られるに違いないと斯う言うんだ」

「本当かい、そいつは」

「まア、本当にして置いてくれ。――髪結床、居酒屋、出来ることなら村中の者皆んなに聴かせ度い」

「そんな事ならわけがあるもんか。サアもう一度皆んなで行ってくれ」

「合点だ」

子分達はゾロゾロと出動して行きました。

「あっしは？　親分」

残ったのは八五郎と喜八だけ。

「さて、一番怪しいと思うのは誰だろう」

平次は妙な事を言い出しました。

「浪人者の大井半之助かな」

喜八は言下に応えます。

「川向うで嫁入行列をやったのは三人、その間に空巣狙いをやったのと、お夏を誘拐たのが一人か二人ある筈だ。――そのうち伊太郎と照吉は死んで了った」

と平次。

「あと二人あるわけだね、親分」

「三人かも知れない。が、もう尾久には居ないだろう。一と晩五両十両の仕事になれば、江戸から稼ぎに来るのはいくらでもある」

と平次。

「じゃ皆んな逃げたかも知れないというんで？」

八五郎は少しがっかりしました。

「いや一人だけは残って居る。大事の仕事が残って居る筈だ。――そろそろ出かけて見ようか」

「何処へ――」

「ツイ其処だ」

平次は八五郎と喜八を誘って闇の中へブラリと出ました。

五六丁行くと、清水屋敷の前へ出ます。

「八と喜八兄哥は此処で待っていてくれ。入る奴を縛っちゃいけない、出る奴を縛るんだ。誰でも構わない」

「親分は？」

「裏に居るよ。――手剛いから、怪我をしないように気をつけろ」

三人は二た手に分れました。

それから一刻あまり、

闇の中から湧いたような男が一人、清水屋敷の表からそっと入って行って、四半刻ほど経つと、もとの表口から四方を忍ぶ様子でスルリと滑り出しました。

「御用ッ」

前後から飛び付いた喜八と八五郎。

「何をッ」

曲者は身を翻すと、匕首を抜いて、猛然と反撃して来ました。

平次の注意がなかったら、二人のうち一人は間違いなくやられたことでしょう。

「神妙にせいッ」

危うくかわして、二人は呼吸を揃えて打ってかかりました。

揉みに揉んで、漸く縛り上げた時、平次は家の中から、

「どうだ、無事に捕ったか」

暢気そうに顔を出したのです。

「親分は」

「俺も一人縛ったよ、見るが宜い」

雨戸を一枚繰ると、部屋の中に、主人の和助を縛って引据えているではありませんか。

「そいつは、親分」

「曲者の一人さ。――お前達の縛ったのは和助の子分の与三松だ。高飛の路用を強請った筈

だから、懐ろには二百や三百の金を持って居るだろうよ」

「ヘエ――」

八五郎も喜八も開いた口が閉がりません。

与三松を責めて、お夏は川向うの百姓家に隠して居ることが判り、清次郎は千住の与三松の仲間のところに隠してあることが判りました。

直ぐ様川向うの百姓家へ行って、窶れ果て乍らも、透き徹るように美しいお夏を救い出した時、念のために物置を見ると、何処から盗み溜めたか、菅笠が十八。

「あ、こいつだ」

ガラッ八は平次の慧眼にお辞儀をして了いました。

その晩のうちにお夏を浪人大井半之助に手渡してその保護に委ね、千住から和助の伜清次郎を救い出して、留守を預かるお房に引渡し、平次とガラッ八は尾久を去ることになったのです。

「親分あの浪人者は喜んで居ましたぜ」

帰る路々、ガラッ八は又絵解きの緒口をつくるのでした。

「お房も喜んで居るだろうよ」

平次は別の事を考えて居る様子です。

「清水和助は、何んだって与三松なんかに強請られたんでしょう」

ガラッ八にはまだ何んにも解っては居なかったのです。

「お夏を与三松に誘拐させたのさ」

「ヘエ――」

「斯うだよ、詳しく話そう。和助はお夏の父親の石崎金次と一緒によからぬ事をして金を溜めたが、悪事が露見しそうになって、今から三年前、与三松の手を借りて石崎金次を殺し、自殺と見せかけてお上の目を誤魔化した――それはいずれお白洲で解ることだが。その後、自分の殺した石崎金次の娘お夏を引取って、罪ほろぼしの心算で養っていると、あの通りの縹緻だから、伜の清次郎が夢中になった。これは我儘一杯に育った馬鹿息子で、何んとしても親の言うことを聴かない」

「ヘエ――」

「和助は悪党の癖に気が弱いから、伜の言いなり放題に、お夏を嫁にすることを承知したが、自分の殺した石崎金次の娘を、伜の嫁にするのは何んとしても気が進まない。が、伜の清次郎はお夏の側にへばり付いて半刻も眼を離さないから、どうすることも出来なかったのだ」

「――」

「丁度その時、狐の嫁入騒ぎが始まった。悪党同士の推量で、あれは与三松の悪戯に相違ないと睨んだ和助は、与三松に提灯を貸してやって、狐の嫁入をうんと大きなものにし、空巣狙いと一緒に、お夏を攫わせることを思い付いた。あれだけの狐の嫁入が始まると、清次郎もジッと女の番人はして居られない」

「成程ね」

「清次郎が狐の嫁入を見物に出た後、お夏を首尾よくさらった与三松は、今度は、お夏の隠れ家を教えてやるからと、和助の伜の清次郎をおびき出し、千住の仲間のところに隠して、和助を強請ったのさ。金を出さなきゃ清次郎を殺すとでも言ったんだろう」

「――――」

「俺の名をエラそうに触れるのはイヤだが、うっかりするとどんな事になるかも知れないと思ったからあんな術を使って与三松を和助のところへやったのさ。大方見当は付いて居ても、証拠のないのを縛るわけには行かないし、責めさいなむのはイヤだからなア」

平次は何時でもそんな事を考えて居るのでした。

「伊太郎と照吉が殺されたのは？」

「与三松の細工さ。――お夏を誘拐した礼に清水和助から貰った金が五十や三十あった筈だ。それを与三松は腕っ節が弱いくせに欲の深い伊太郎にやった。照吉は伊太郎から取上げようとし、伊太郎はやるまいとして斬あいになり、照吉は伊太郎を突き殺したところを、与三松は後ろから照吉を斬って、懐ろの金を抜いた」

「いやアな事だね。――ところで清水の身上はどうなるでしょう」

とガラッ八。

「いずれはお上で没収さ。だが、あのお房という娘は思いの外確り者だから、結構清次郎を立てて行くだろうよ」

「お夏はあの弱い浪人と一緒ですかえ」

「妬むな妬むな、お前にはまだ良いのがあるよ」

平次はカラカラと笑いました。

江戸の街へ入るとすっかり夜が明けて、すがすがしい夏の朝風が頬を撫でます。

幽霊買い度し

ハイカラ右京探偵暦

日影丈吉

幽霊東へ行くか

へ開化の幽霊、足がある。
　オッペケペッポ、ペッポッポオ
――こんな戯れ唄が、寄席の高座で歌われるのを、聞いた記憶があるが……髪結い、お秀さんの話をしてくれた、話のひとつに、この唄と関係があるとは決められないまでも、記憶のつながりで、いつもいっしょに思い出され、微笑ましくなるのがある。
「アメリカの異人さんてものは、なんでも大掛りに突飛なことが、好きなんですね」
と、お秀さんはいった。
「あんな風だと、いまにとんでもないこと、しでかすンじゃ、ござんせんか?」
お秀さんの、この予言は、今になって見て、当っているかどうかは私にはわからないが、話というのは、こうである。
明治何年だったか忘れたが、シカゴの大金持で、シグモン・ジイクという男が、横浜入港の欧洲航路の船で、突然やって来た。

アメリカの富豪だというので、早速インタビューを申し込んだ新聞記者を前にして――ちょうどよかった。君達の新聞に、買物の広告を出してもらうつもりだったんだが、実はね……と、彼の持出した来日の目的なるものが、途方もないことなので、さすが海千の記者達も、あっと固唾をのんだ。
ジイク氏は、お城を買いに来たのである。お城なら、どんなのでも構わないが、たった一つの条件、というのは幽霊が出ないと困る――アメリカでは幽霊の憑いていない古城など、まやかし物の模造品としか思われないに違いない。そういう、手頃なのがあったら君達、ひとつ世話をしてくれないか。お礼は望みどおり、するよ。
「ちょ、ちょっと待って下さい」と、記者の一人があわててとめた。
「そんな古城なぞ買って、どうするつもりなんです。お住いになる気ですかね」
「もちろん国へ持ちかえるのさ。石は石、柱は柱、ひとつひとつ印をつけて解体し、船で運んでミシガン湖のほとりの丘の上に建て直すよ」
「へーえ、ちかごろ驚きだな――すると、屈辱の恨みをのんで死んだサムライの霊魂が、オーケストラの伴奏で、おどろおどろと現われ、うら悲しき声に歌うはこれ、ヘール、コロンビ、パッピー、ランド、独立の歌――などはチト頂きかねるネ」
「オイ、オイ、冗談はおいてくれ。時に大将、いえミスタ・ジイク、どうして貴方は、こんな突飛なことを思いつかれましたな?」

「はッはッは。実は、ワシの将棋仲間にカアクという石油屋がおってね——この男が昨年、スコットランドでラズベリー・レーンという名の幽霊が棲んでいる古城を買いおった。ラズベリーの実の成る頃あらわれるので、こう呼ばれる妙齢の女の幽霊だがね。これが奴さん、大の自慢でな——そこで、ワシは趣向を変えて、勇壮な日本サムライの魂魄とどまる城を買い取り、カアクの鼻をあかしてやるつもりなんだよ」

お誂えむきの特号記事である。それが、引き続き読者大衆を、アッといわせることになったのは——（ジイク氏の大きな買物には、政府も斡旋の一役を買わされており、氏の望む如き、幽霊の伝説のつきまとう古城また、なきにしも非ずだが、廃藩置県も昔の夢、日進月歩の今日とはいえ、歴代父祖の居城をドルの為に身売りさせる名家、果してありや、云々）という、言文一致の論説まで載せられたにもかかわらず、「この城、売ります」と、申し出た者があったからで……

差しさわりがあると拙いから、仮名にするが——遠江の国、梓の郡御高六万五千石、豊後守吉春の居城で……梓郡の郷土史によると、天明二年、無実の罪で、この城の廓内の土牢に入れられた馬廻役三百石、門田左近次という者が、同四年、悲憤の極、獄中に自ら餓死して果てた。その日が五月十五日——旧暦であるから、植えつけがすんで、苗ののびた田の面に黒雲ひくく垂れさがり、連日、雨を降らす頃で——うす暗い天守櫓の下の広間に、水色の麻裃をまとい、死んだ時が雨季で土牢の中は水でも溜っていたのか、両鬢の毛がぐっしょり水を吸った、門田左近次の悲しげな姿があらわれるという——

ジイク氏の註文には、まさに打ってつけの梓城で、現在の持主は、伯爵、梓尚春。

お城どころか、手前の女房まで売りつけて恥じない昨今とちがい、

「ベラ棒めエ、権現さまの罰が当らア」と、いきまく江戸ッ子のまだ生きていた時代であるからまさに物情騒然だったろう。が、ところで……

梓の郷人は門田の霊を畏れ、かつ哀れんで、月遅れの六月十五日には、城壁の下に香花を供え、この郷土的亡霊を『さみだれ左近』と名づけて親しんでいた……か、どうかは知らないが、とにかく、この幽霊が太平洋を渡って東へ行くとすれば、ラズベリー・レーンと好いコンビが出来上るだろうと書き立てた、新聞記者の物好きは、今もむかしも変りがない。

夜、墓を発く

月のない夜は、さながらに暗いのに、重たい雲が犇めき塞いでいる空の裾を、それでも道路から腰をかがめて透し見ると、片側の畑地の上にひとところ、おぼろげに乱立する墓標の影。

「此処だ、ここだ」先に降りた一人がいうと、暗いぬかるみの道のまんなかに、大きな影のかたまりを裾えている馬車の中から、続いて黙々と降りた二三人。その中の一人が御者台に廻ってカンテラを外してき、いまにも泣き出しそうな空を気遣わしげに見上げた顔の、顎鬚が一瞬陰気にうつし出された。

先に立った者の灯を入れた提燈が、もう、あちこち墓場の中を動いている。

「やっぱり、やられてますナ」

掘りおこされた黒土の、強烈な臭いが鼻を打ち、大きな穴が口をあけている傍らに、白木の墓標が投げだされていた。

「うむ……」雨合羽を着た、ダルマといいたいような男が、懐時計を取り出し、掲げさせた提燈の光でさしのぞいた時、うつし出された顔は、こんな場所で見ると世にも恐ろしいもので……半面の皮膚を縮らせている欅のもくめのような火傷の跡。その中で炎のように片目が光っている。

が……これは、当時、警視庁随一の名探偵、強力犯係長の吾来警部で——その頃、米人シグモン・ジイク氏、来日の診話題と共に三面の人気（？）を二分した怪事件の捜査中であった。

新墓を発く、墓場荒しというものは、時たまある事件で、主に死体のまとっている経帷子や棺桶の底に入れた六道銭が目的の、浮浪者などの仕業だが、今度のは少しワケが違って——新仏そのものを持って行ってしまうのだ。そして、この無気味な犯行の意味がまるで分らないのは、いくら探しても、盗まれた死体はどこからも出て来ないし、墓掘人足、葬儀人、隠亡、屠殺業者など、関係のありそうな所を調べて見ても、犯人の目星がつかない、何のために死体を盗み、それをどう始末してしまうのか、一向に摑みどころがないのだから、さすがの吾来警部も、これには弱った。

最初の事件は二月ほど前のことで、犯人はよほど巧妙な奴と見え、その後、警戒の目をかすめて諸方でボッポッ起っており、近頃ではさすがに警察の活動を恐れてか、市内には後を絶ったが、郊外の墓地は未だに時たま襲われる。この夜も地区の警察からの知らせで、練馬くんだりまで出かけて来たのだ。

陰気な捜査がすむと、一行を乗せた馬車は夜道をまたゴトゴトと走って行く。

「入梅前の馬鹿陽気で、今夜はまた滅法、冷えますな。どうです部長あの角の万屋がまだ起きてるようですから、降りて渋茶でも招ばれませんか」髯の刑事が、幌の中から覗いて、提案した。

道ばたの井戸にカンテラを吊して手についた泥を洗い落し、渋茶に腹が暖まって、どうやら人心地がついたところへ、表の道をピチャピチャ駈けて来る小さな足音がして、一尺ばかり開けてある雨戸のすきから、覗きこんだ可愛らしい少年の顔が、

「小父さん達、たいへんだよ」と眼をクルクルさせた。

「何だ、小僧？」髯の刑事が顎をつきだす。

「あそこの畑の中に、裸ンボの死骸が、ころがってるンだよ」

「なにイ？」

一斉に立ち上って、くるりと背を見せた少年の後を追った。

「ここだよ！」指さされた畑の隅の塵溜に、提燈をぬッと突き出した刑事が、わッ、こりゃあ！　と叫んだのは——

素ッ裸の死体が、仰向けにふんぞり返って……色白のまだ若い男らしいが、顔はズタズタに切り裂かれ、容貌のあとを止めていない。

「カンテラを、よこせ」と、警部は落着いて、死体の頭部にしゃがみこんだ。

「珍しかことじゃ。死骸盗賊が、初めて盗んだ物ば、俺達に見せおったわい」

「しかし、部長。これア、ただの死体じゃあ」

「なかというのかね。裏返しにして見い。どこにも外傷は見当らんじゃろう。解剖してみんことには確かなことはいえんが恐らく他殺死体じゃなか、この頭に触れて見い。スンベスベじゃなかか。生きてあるうちば剃っても、こげんには行かんたい。息ば引き取ってからも、毛は伸ぶるものじゃ。これは死んで時がたってから湯灌の時に剃髪した、つまり、ふつうの埋葬死体じゃよ」

「ですが部長。この、顔がメチャメチャにしてあるのは、如何なものでしょうかな」

「うむ。悪かいたずらば、しよるな……時に、あの小児は、どうしたかい?」

「あ、ほんとだ。知らせてくれた小僧は、どこへ行ったかな。おーイッ、こどもオ!」

「オーイ!」

「小僧め、駄賃に駄菓子でも買わせる気で、さっきの万屋で待ってるンですよ。きっと」

警部たちが、そこに帰りつくと、しかし、少年はそこにも姿を見せなかったばかりか、万屋のカミさんも、この辺ではついぞ見かけない子供だったと、いう。一行はゾッとしたように、顔を見合せた。

吾来警部の恋

恐い顔をした男が、優しい心根を持っていないとはいえない。たとえば、この無気味な夜が明けてから、吾来警部の後をそっとつけて見ようなら、……謹厳な警部も、本庁に出仕する前に、朝の一時をそこで寛ぐつもりか、鍛冶橋の袂に半井という看板の出た新聞縦覧所に入って行った。近頃では大衆喫茶店などともいうらしいミルクホールの前身である。が……

「いらっしゃい、警部さん」

と、華やかな若々しい声に、はッとし、ほっとするのはただ事ではない。顔に似合わぬなどと、いうなかれ。ナントカは曲者と俚諺にもいう。まして相手は写真画報に載ったこともある評判の美少女で、半井の看板娘お千勢なのだから。

「警部さんてば、ちかごろ、お見かぎりね」

「うん、公務が忙しい。来たいと思ってもな……」

こんなことをいっても吾来警部、まさかに脂下っているのではない。正直なのだ。

それどころか警部、千勢が法律書生の梓正巳と、相思の仲だったことも、正巳にパトロンがついて一年前、別れも告げず、海外遊学に鹿島立ちしてしまい、そのため千勢は失意の人となり果て、華やかな声は若さの賜物でも、底に沈んだ響きがあり、束髪を脳天で結んだリボンはあどけないが、皮膚のうすいこめかみに、ときおり池の端の宝丹を前歯でかんで塗り

つけていることも——逐一、知っている傷心のファンなのだ。吾来はむしろ、千勢のナイトをもって任じていたのであろう。

「あたしネ、この頃ヘンな夢ばかり見るの。それに、この間は銀座の通りで、正巳さんが立派な馬車に乗って通るのを見かけたし、どうかしてるンじゃないでしょうか。正巳さん、まだ巴里にいらっしゃるはずなのに……」

「ヘンな事は、世の中にいくらでもあるたい」警部は昨夜の事件を思い出したのだ。

「そうそう。この間、妙な人が訪ねていらっしてね。正巳さんのことを根掘り葉掘り訊くのよ」

「ほう、どんな男じゃったかネ」

「お名刺いただいたンですけど。えエとネ、そう、右京さんて方」

「ナニ？　右京慎策かね。能面が髯を生やしたような男じゃ、なかかい」

「うふふ、そういえばネ」

「あれは日本一の図々しか男じゃ。気ばつけんといかんよ」

「でも、面白い方だったことよ」

「あげん男と、つきあうもんじゃ、なか」

「あの人、外交官だというから、正巳さんの身の上に、何か間違いがあったのじゃ、ないのでしょうか」

警部はチラと、憂わしげな千勢の顔を盗み見た——この新聞縦覧所の娘は、紺屋の白袴で、

まだ今朝の新聞を読まないと見える。そこにはフランスの都、巴里での、梓正巳の行状が、多分に悪意的に報道されていた——正巳は学校にも出ず、盛り場モンマルトルの、有名なムーラン・ルージュの踊り子、マドモアゼル・ニニイに現を抜かして、極道をしているということだ——あげん男のことば、ひと思いに諦めてしまうがよか、と、いいたくて、しかし、あの記事を読んだら千勢はどんなに悲しむだろうと、哀れをもよおす吾来だった。

そこへ飛び込んで来た寝ざめのよい刑事が一人——

「部長、ここにおいでしたか。総監閣下が御急用ですよ」

ほい、また事件か、立ち上った警部の顔に、ふと闘志が浮んだのは、右京慎策の、仮面のような顔を思い出していたからで……

雲がくれした城主

案の定、国際的な事件だった。

「困ったことがでけたよ。吾来君」と、警視総監は眉をひそめて、

「例の梓城の城主、梓伯爵が三日前に落合の下屋敷から無断外出したまま、帰って来ぬ。心当りのところには、どこにも姿を見せんそうじゃ——伯爵は内証が苦しいのか、城の売買契約をジイク氏と結びはしたが、その後、親類一門、郷党の主だった者の反対に会って、ひどく困却しておったというから、あるいは苦しまぎれの逃避かも知れんのだ——が、ジイク氏

の方は、アメリカの事業家のせっかちさで、滞在日数の予定が切れるから早く決定しろと、せき立てくさる。昨日は外務卿を訪問して、斡旋方を要請したという——大臣もお困りになって、八方手を尽して伯爵の行方を至急さぐり出して欲しいという。総理からもお声がかりの訊ね人じゃ。なにぶん頼むよ」

「もし……もしですたい」と、吾来警部は口ごもった。

「もし梓伯爵が、このまま姿ば現わさなんだら、どげんことになりますかな」

「なんということを、いうか、君は」総監は青くなって、

「君は梓伯が逝去されたとでもいうのか」

「いや、じゃから、もし、ですたい」

「ふむ……そうなれば、梓家の後継者が新たにジイク氏と契約を結ぶか、あるいは破棄するかだが、今度はジイク氏が望むほど、早急には決らんじゃろうな」

「して、その梓家の後継者ちゅうのは？」

「それはね君、家門の秘密で、絶対に口外してくれては困るが、梓家の相続権は、目下、巴里滞在中の、梓伯の異母弟、梓正巳に落ちつくそうじゃ。伯爵家では万一を慮って、すでに巴里むけ電信を打たせたということじゃよ」

書生の名を聞くと、吾来は飛び上らんばかりに、打ち驚いたのである。

控室に戻った吾来警部は、首をひねって考えこんだが、近頃ひどくデリケートになっているせいか、殺風景な部下の顔を眺めていたのでは、明快な答えが浮かんで来ない。そう思っ

たので、握り太のステッキを取って外に出た。

お濠に沿って曇った空の下をぶらぶら行くと、新緑の季節で、水っぽい空も何となく青春の頃を思い出させる——おいどんが、お千勢さんぐらいの年の頃は、青春などという気の利いたものが、あったろうか……維新の擾乱に打ちつづく目まぐるしい時代で、揚句の果てが西南の役に官軍に加わり、大火傷をして危うく両眼失明するところだった。その頃はいっぱし未来の光明のために一役買っているつもりだったが、文字どおり焦頭爛額だったわいと、吾来は思わず恐い顔をクスリと歪めかけたが、さすがにすぐセンチな気分を追い払って、事件の探究に耽りはじめた。

これは、ひょっとしたら、梓六万石のお家騒動ではないだろうか——という考えが閃めいたのである。梓正巳は梓伯爵の異母弟だというからだが、そうなれば正巳の外遊費の出どころも察しがつく——半井へ毎朝、官報を読みに来た法律書生の頃は、尋常勤勉な青年だったというが、世界一の巴里女の手にかかってとろかされては、新聞縦覧所の小便くさい小娘など（おいどんは、そうは思わんが）芥の如く顧みなくなることも、ありうるだろう。遊興の金につまって、悪心を起さぬとも限らぬ——もし、彼と有無あい通ずる一味が東京にいるとすれば、あるいは当主暗殺、お家のっとりの陰謀を企てないものでもない——

それでは、梓尚春の身辺で、危険人物と目される者は誰か……こう考えて来ると、いた、いた、尚春の学友で東京府士族、安西善友という代言人だが、余り身持のよくない男——吾来も知っているが、洋服を着た悪御家人といったタイプで、伯爵とは馬が合うのか、それに

元来、頭も悪くない如才ない男だから、伯爵家に取り入り、今度のお城売買の契約にも、交渉役を買って出たという。

巧い具合に、こうして悪役は、大敵も色敵も揃いはしたが、さて証拠がない。うーむ、と、思わず唸ったトタンに、昨夜の怪談じみた事件を思い出した。

——うっかりすると、飛んだ三枚目を演らされるところだったのじゃなかかな？　梓伯の別邸は落合にあると、総監はいわれた。そこから余り遠くない練馬の畑地の中で、伯爵失踪から一日おいて、新墓が発かれ、確かに新仏のものと思われる死体が、塵溜の中に棄ててあった。しかも顔面を無残に傷つけて、仏の身柄を判らぬようにしたのは、警察を愚弄するためかと思われたが……死体盗難事件にかこつけて、伯爵の暗殺死体を遺棄する巧妙な手段ではなかったのか……

うむ、これだッと、吾来が思わず跳びあがって、凱歌を奏そうとした時——軽そうな車輪をサラサラと鳴らして、車道をむこうから走って来た一頭立の馬車。狭い座席にぴったり寄り添った相乗りの、一人は、おや、半井の娘千勢だが……たおやかな彼女の腰を抱くようにして、これ見よがしの紳士体は、フランス好みの散歩服に、細身の杖を斜にかまえた、外務嘱託の私立探偵、もと国際スパイの右京慎策——

これまでの勝利感はどこへやら、わけの解らぬ屈辱に満面紅潮した吾来警部へ、右京はゴムのように薄い鹿革の手袋をはめた手で、青灰色の高帽を、ひょいと傾げ、会釈するとそのまま……サラサラ、パカパカ、脛細の駿馬は小砂利をけって行き過ぎる。

面憎い右京の色男気取りはともあれ、千勢の近頃みたこともない、晴ればれと幸福に酔った顔は……うーむ、おのれッ、半井なんかに二度と行くんでなかッ——警部は年甲斐もなく、濠の柳の若枝を、握り太の杖で発止と打ち折った。

死体販売人

警視庁へ帰りつくまで、吾来の昂奮は収まらなかったが——部長ッと、事ありげに呼びかけられて、我に返った。

「墓発きの犯人は、どうやら目星がつきましたよ」

吾来の部下はいまでいえば捜査一課に動員される、腕こきの警視庁刑事で、粒が揃っていた。

「そうかッ」吾来もさすがに欣然として、

「俺の方も、梓伯の件で当りば、つけたよ」

「警視庁万歳ですナ」

「なんの、そげんにむずかしか事件じゃなか——貴公のホシば、いうて見い」

「内藤新宿の粕屋の悴に、権造というのがおりましてね。窃盗前科三犯の痴れ者です。こやつ挙動不審で二三日前から目をつけていたんですが、どうやら墓発きの一味らしいので、連累の動きを知るため、尾行をつけて放してありますが、そのうち、ひっ括って叩いてやれば、

泥を吐くと思いますがな」

「そいつは、よか――それからな、代言人の安西善友ば見張ってくれ、場合によっては、ひっ括るじゃ。こいつは重大犯人じゃぞ」

ところが――この捜査の二本の糸が、ふと、こんがらかることになって、警部を面喰わせたのである。

その夜、粕屋の権造を尾行していた刑事からの急報で――権造は灯ともし頃、四谷見附ちかくの料亭に入ったが、しばらく見張っていると、一台の馬車がその門前に止まり、盛塩を踏んで入っていった人物は今日、警視庁で警部から聞いた人相特徴の、殊に角ばったギリシャ髯がもしや安西ではないかという――

時を移さず二三の部下を従えて、出動した吾来警部は物蔭に陣を敷いた。が、敵はなかなか出て来るようすがない。

「踏んごんで押えましょうか」

「待て、待て」と、いっている鼻先を――夕刊、夕刊……新聞売りの子供の涼しい声が通りすぎた。おや、どこかで聞いたような、と思う間もなく料亭の玄関から、金切声に送られて蹣跚と出て来たのは、舶来セルの着流しに絽縮緬の夏羽織をはおった、まさしく安西善友。馬車のステップに片足かけたところを、

「押えますか、部長?」

「いや待て。いま捕えては拙かことになる。ジイク氏ちゅう厄介者が日本におる間は、奴は

表向きの交渉人じゃからな……」

「粕屋の方は?」

「構わん、ひっくくれ」

――安西代言人を乗せた馬車が走り去ってしまうのを待って、強力犯係りの一行が、バラバラと料亭の門内に、駈けこもうとした一瞬、中から猛烈なスピードで走り出たのは、その頃はまだ物珍しかった自転車二台――

その一台に権造を認めて、それといったが追っつかない。他の一台の上から振り返って――「小父さん、号外!」と、一枚の紙片を、パッと吾来の面上に投げてよこしたのは、あッ、昨日闇夜の練馬街道で彼等を手引した怪少年だ。そういえば、さっきの夕刊売りが、と、地団太ふんでも後の祭り。

夜風にひるがえる紙片を追って、拾いあげてみると――

親愛なる吾来警部殿――日夜、都下の治安に御尽瘁の貴官、並びに貴官の忠実なる部下の能吏諸君に、深甚の謝意を申し述べ候。就いては目下、貴官等が苦心探索中の墓場発掘事件は今後、再び起るまじく候う間、御休心あいなりたく候。貴官等が本件のうち、盗難死体の査として見出されざる点に特に苦慮せられ候事、火葬場屠殺場等の入念調査より拝察いたし候。然れども、かかる所より数等、死体の始末に便利なる場所の候こと、御存じなく候や。本件は徒らに犯人捜査に奔走なさるよりは、都下の医学専門学校に対し、一言の注意これあり候わば、即ちたちどころに防止し得たるものに御座候。

右、盗難死体は解剖用死屍の入手困難の理由に依り、相当の金子を以って購入され、既に医術の進歩に寄与せるものにして、以て瞑すべきところも、これあると存ぜられ候。入手経路の面白からざるは勿論、今後はかかる弊害の起らざるよう、特に研究用死屍の調達のため、然るべき筋の配慮を願い度きものに御座候。尚、右の鼠賊、いな腐死を喰う糞虫の如き徒輩の行為の、甚だ憎むべきは勿論なれども、もと貧窮のあまり、また世間に容れられざる自棄より出でたるもの故なにとぞ寛大の御扱いを願い上げ候——年来の友なる右京慎策、拝書。

奇優、幽霊松鶴

ここは霞ヵ関の外務大臣室——折から訪れた警視総監と、大臣は額をよせて、ひそひそ話。

「すると総監。貴下は梓伯爵をすでに世にないものといわれるのか」

と、外務卿は眉に憂いをこめた。

「さよう。部下の警部も確信しとりますので」

「それは困ったのう。このような事件が海外の話題になっては、邦家のため残念じゃ——というのも、例の城売渡しという奇妙な事項が絡んでおるからじゃが、そのためには梓伯殺害の容疑者逮捕も、いましばらく我慢してもらわにゃ困るよ。相手は駄々ッ児のようでも眼はしの利くアメリカ人のことだ。事態をそっと伏せておき、契約相手をうまく継ぎ替えて、更新するか諦めさすか、とにかく相続人の帰って来るまでは、うやむやに曳きずっておかんと、違約の真相を追求せよなど、飛んだ逆ねじを食わんものでもないからな——それまではたとえ、安西善友が重大容疑者でも、遠くからそっと見張っておるより他に手はない。彼はジイク氏のお相手役にすっかりなり切ってしまい、この問題の交渉では立役者だから、当分、彼に諸事とり仕切ってもらわにゃ、ならんのじゃ、現にな……」

と、大臣はいっそう声をひそめて、

「貴下にだけは話しておくつもりじゃったが、よいかね——わしと貴下の他は、まだ誰も知らんことじゃと思って欲しい——あのジイクという男は、アメリカ人らしく何でも割切っておる男のようじゃが、ただひとつ、イギリスの古城には今でも幽霊が棲んでおるなどと真面目くさって信じておる——そのくらいだから、梓城の亡霊にもすっかり熱をあげおってな、来る六月十五日の命日には、その幽霊を見るために、梓城で宴会をもよおし、われわれ当路の要人や、東京の実業界の代表者などを招待したいと、申し出おった——但し、あまり参会者が多すぎると、霊魂が現われにくかろうと申すので、わしは政府からの客として、わしと次官、それに貴下と吾来警部、もう一人わしの側から、右京という男の、五人を申しこんでおいた。当日は精養軒のコックがはるばる遠州路まで出張して、腕をふるうそうじゃよ」

「いやはや」と、総監はあきれ顔で、

「それはよいが、亡霊は、うまく現われてくれますかな」

「秘密というのは、そこじゃよ」大臣は苦笑いして、

「さみだれ左近の霊とかいう奴、文明開化に恐れをなしたか、御維新以来、何年にもいっこ

う姿を見せんというのじゃ——そうなると、それ、第一条件が抜けて城は売れなくなるばかりでない。わが国の伝説口碑の嘘っぱちが世界に知れ渡り、ひいては国民性の重みまで差引かれることになろうという、安西の弁口にも一理あるでな——ところがこの小才の利く男、この危機を脱するため、ジイク氏を瞞着することはよくないことだが、邦家のためなら敢えて辞さぬ、もし、外務卿、警視総監などが眼をつぶってくれるなら、一計があるという、——どうするのだと訊くと、五代目菊五郎の弟子で、旅廻りばかりやっているが有名な、おいう趣向なのだ——彼のいうことにも理屈がないではないし、貴下とわしと、安西側の二三化け役者の尾上松鶴、これを使って梓城の天守に水色麻袴濡れ髪の、左近の亡霊を出そうとの者の他には、誰もこのカラクリを知らんのだから、一場の茶番を見るつもりで、出かけて見るも一興と思ってな」

外務卿も飛んだ茶人だと、総監は少しあきれ顔だった——が、このひそひそ話を誰知るまいと思いの外、別の用事で呼び出しを受け、総監が帰るまでと控えの間に待たされていた男が、蝙蝠のように壁にぴったりとはりつき、音もなくノッブを廻して細紐の通るほどすかせた扉の、その隙間にあてがった地獄耳——こんなことは、お手のものの、ハイカラ右京だった。

亡霊ついに現わる

梓六万石の城は、数百年の風雨に叩かれて、さすがに鬼哭啾々の趣きをやどし、空濠のあたりをさまよう野良犬が、淋しさに耐えかねて遠吠えする夜は、その声にさそわれて迷い出た、左近次の霊が浮かばれぬ身をかこつかと思われる荒れかただが——御維新以来あらわれぬという門田左近次亡霊は、もともと豊後守の不明を呪って餓死したくらいだから、後代の主家の都合が悪いからといってのこのこ出て来るほど、お人好しでもあるまい。

それ故、安西善友が知恵をしぼって一芝居うとうと、歌舞伎役者から西洋料理人まで動員して先乗りしたにもかかわらず、六月十五日ほぼ予定の時刻に、外務卿が警視総監やジイク氏と連れ立って乗りこんだ時には、安西はひどくしょげた顔で大臣をむかえた。

「閣下、弱ったことが持ちあがりましてな」

「どうしたかね?」

「実は昨日、下稽古にかかりましたところ、松鶴が櫓の階段を踏みはずして落ちましてな。骨折したらしく、うんうん唸っているばかりで起き上れません。町の医院に運びこんで寝かせてありますが、到底、芝居どころの騒ぎではありませんのでして……」

「ほう、それは困ったことだな。で、どうするつもりじゃね、きみは」

「しょうがありませんや、窮余の一策ですが、参会の皆さんに幽霊のトリックをぶちまけて

しまい、御協力を仰ぐ他はなくなりました。もちろんジイク氏にだけは内緒ですがね」

「ふむ……協力というと？」

「まず知らん顔をして宴会を続けて頂きます。そして、古誌にある幽霊の現われるという刻限の亥の刻、いまの夜の十時になったら――鉄砲倉に登る西北の階段に、左近次の霊が現われたという思い入れで、皆さんにあれよあれよという顔をして頂くのです――ジイク氏には見えないが（勿論私どもにだって、そうなんですが）日本の幽霊は、紅毛の眼にはそう簡単に、一回で見えるというわけには行かないだろう、とでも強弁して――それでもまだ執心なら、来年の六月十五日まで待たせることにしますよ」

「やれやれ、それじゃあ今度は、わし達が茶番をやることになったのかい。だが、そうでもせねば収まりがつくまいて。せいぜい名優ぶりを発揮するかね」

「まあ、とにかく天守の間にお通り下さい」

外務卿は苦笑しながら頷いて、総監に耳打ちしに行った。櫓下の広間には、即席のテーブルを並べて花を飾り、ここで焙焼若鶏（ローストチキン）を食おうという仕掛けなのだ。

安西のインチキ計画にはあきれたが、その幽霊松鶴の十八番も出ないとなると、一同興ざめ顔で、それでも宵のうちは酒と料理に話が弾んだ。が、夜がふけて来るに従い、梅雨の頃の人里離れた城山の中は陰々と底冷えがして来て、亥の刻まで間を持たせるのが次第に苦痛になり、ともすれば一同だまりがちになる。その中では、いちばん無邪気なジイク氏が時計を出して――そろそろ、ミスタ・サコンのあらわれるタイムですね、と、いった時には、く

すぐったい中にも、もしや今夜あたり本物が……という助平根性で、さすがに背筋の寒くなる思いがしたが――

突然、客のひとりが、あッと叫んで眼を皿のように見ひらいた。その顔に気のついた外務卿が此奴うまいもんじゃなあ、と感心しかけたのを、誘いこまれて、その男の視線をたどると――、おお！　と、彼も恐怖の叫びをあげた。

最高層の鉄砲倉に登る階段の上に、ぼーっと人影がさして、それがおもむろに降りて来る。人影は階段の中ほどまで来ると、手をのばして座中の安西をさし招いた。そこまでは広間の灯も届かぬはずなのに、影の顔の部分は燐火のように青白く薄暗がりに浮んでいる。

みつめていた外務卿は、また――や？　と叫んだ。それこそ、まさしく殺された梓尚春伯爵の亡霊に紛れもないからだ。座中、恐怖に凍りついたように静まり返り、大臣は口の中で思わず念仏をとなえはじめる。と、伯爵の幽鬼の手招きにひかれるように、安西善友は、よろめき出ながら、恐怖の声をふりしぼった。

「ゆるしてくれッ。おれは君を殺させるつもりじゃなかった。おれは権造に頼んで、一時、きみを誘拐してもらうつもりだったのに、権造のやつが早まって……悪かった、ああ、ゆるしてくれッ」安西は襟がみ摑んで叩きつけられたように、床に倒れて転げまわった。

「吾来君」と、この時余りの恐ろしさに息を殺した座中から、右京がしっかりした声をかけた。

「伯爵の幽霊は犯人を自白させたぜ」

「おお」我に返った吾来警部が、走りよって安西を取り抑えると——伯爵の亡魂は満足げに頷いて、鉄砲倉に登って行き、そこの窓から暗い夜空に、さらばさらばと昇天する——と思いのほか、静かに階段を下りて一同の方へ歩みよった。この開化の幽霊は足があったのである！

右京はくるりと一同の方に向きをかえ、亡霊を指さしながら、一つ咳ばらいすると、

「皆さん、梓伯爵の亡霊——いな、生きている梓正巳君を御紹介いたします」

「ナニ、梓君がもう巴里から帰って来たって」外務大臣はあわてた声で、

「馬鹿なッ、まだ長距離航空機は発明されておらんぜ」

右京は、落ち着き払って、

「いえ、これが正真正銘の梓正巳君で——巴里におりますのが梓尚春伯爵、あとで一切を安西に証言いたさせます」

ハイカラ右京の腕前

……右京慎策がこの事件に関係したのは、巴里にいる梓正巳の乱行につき、公使館から伝達があり、同人の身元調査を依頼された時からで——書生時代の正巳が新聞縦覧所へ行くのを唯一の楽しみにしていた、真面目で勤勉な青年で天涯孤独の身の上だが、名門の出らしかったということなど、その頃の友人や半井の千勢の口から聞き出すと、かれの突然の外遊、それからの生活の豹変ぶりに、右京はすぐ何かあるなと感づいたが——

当時、東都の話題を賑わしていた米人シグモン・ジイク氏には、右京はもちろん興味を持って、ジイク氏が通辞に雇った岡部に渡りをつけ彼の動静を逐一報告させている中に、右京の注意をひいたのは——梓伯爵から売渡しの申し出が来る以前に、ジイク氏は一度、梓城のことを訊ねたということだ。ジイク氏は日本へ来る前に、誰かから梓城のことを聞いていたに違いない。

下落合の別邸に寝起きしている伯爵尚春の身辺をそれとなく探ってみると、極めて清閑な日常で、伯の友人、安西善友が諸事、采配をふるっているようす——第一、伯爵が、父祖重代の城を外国人に売るような突飛なことをする人柄ではない。極めて温雅な青年だ。

こうした事情を頭の中で組合せているうち、半井の千勢から聞いた奇怪な事実——梓正巳とそっくりの人物が、馬車に乗っているのを見たということに思い当ると、右京はニヤリと会心の笑みを洩らした。そこで千勢を誘い出して、ひそかに梓伯の首実検をさせると、確かに正巳に違いないと、千勢は確信をしめしながらもわが眼を疑う始末。さればと持前の当って砕けろで、梓伯爵、実は梓正巳の肩を叩いたのが、正巳の一命を救う手柄となった。

正巳が梓家先代の匿し子であることは、父の臨終の際にその事実を打ち明けられた尚春と、彼の無二の相談相手の安西の他は、誰も知らぬ秘密だったが——この尚春は躁鬱症的傾向の、ひどくむら気な男で当時流行の海外遊学をふいに思い立つと、どこかの国の偉い人のように、一門の猛反対を押し切っても、何とかして行きたいと、親友の安西に相談した——策師の安

西は正巳の容貌が伯爵に酷似していることから、両人の身柄の入替えを思いついて、正巳を義理に絡めて無理強いに承知させ、伯爵のロボットに仕立て、伯爵の方は梓書生の名儀で渡航許可を取らせた。

伯爵は巴里につくと勉強はそっちのけで、ムーラン・ルージュの踊り子ニニイ嬢にこり出し、結局、放蕩の金に詰っていた折から、賭場で知合いになったジイク氏の物好きに応じて、身分を明し、梓の城を売る約束をしたのである。ただし、身替り渡航がバレると帰還を命ぜられることになるので、売約の話は、ジイク氏が日本に立寄った時、初めて起こったことのように、取りつくろって貰うよう頼みこみ、すぐさま東京の安西善友に文を送って事情を打ちあけ、ジイク氏が着いたら順調に話を運ぶよう依頼した。家名も爵位も投げ捨てて、梓正巳の一生を巴里に送るつもりになったとは、この花の都、不可思議なあやかしの糸を若い伯爵の五体に投げかけたものだ。

これにはさすがの安西もびっくりしたが、伯爵の意志を楯に、気の弱い正巳に迫って契約書に捺印させた。こういう正巳の告白を聞いた後で、ただの鼠でない安西が、この間に処して漁夫の利を狙っているのを看破した右京は、それとなく正巳の身辺を警戒しているうち、彼に危害を加えようとした、粕屋権造の一味を取って抑え、白状させると——

安西は城売渡し運動に反対の態度を見せはじめた邪魔な正巳を、誘拐して殺してくれと権造に頼んだ。権造たちが、死体販売人の一味であることを嗅ぎつけ、その尻尾を抑えて利用しようとしたのは、安西の奸智だったが——右京は見事に裏をかき、権造たちに、お手のもの発掘死体を病院に持ちこむとすぐバレるから、顔が解らぬようにして、遺棄したといわせて安西を安心させた——正巳の顔に発光塗料を塗って、梓城の櫓から降りて来させたのも右京好みの悪戯である。

さて、終りに蛇足をつけ加えれば、梓伯爵が巴里から送還されたのは、金の切れ目にニニイ嬢から、肘鉄を食う寸前だったらしく、彼のためには結局しあわせだったし、誰よりも幸福になれたのが、お千勢さんであってみれば、吾来警部もナイトとして、右京の働きに文句のつけどころはなかった。

悪意がなかったとはいえ、事件の張本人であるシグモン・ジイク氏は、外務大臣から、さんざん厭味をいわれた揚句、梓郡の史蹟保存会設立費に金一封を献じて、そこそこに日本を去ったという。

「右京さんは外務卿が感謝状を出すというのを、それだけは御勘弁とことわったかわりに、梓六万五千石からは、相当のお金をせしめたそうですよ。名目は、孤児救済費でしたってさ。ほんとにねえ」

と、語り終ってお秀さんは、くっくっと笑ったのである。

半七先生

半七捕物帳

岡本綺堂

一

わたしがいつでも通される横六畳の座敷には、そこに少しく不釣合いだと思われるような大きい立派な額がかけられて、額には草書で『報恩額』と筆太にしるしてあった。嘉永庚戌、七月、山村菱秋書という落款で、半七先生に贈ると書いてあるのも何だかおかしいようにも思われた。この額のいわれを一度きいて見ようと思いながら、いつもほかの話にまぎれて忘れていたが、ある時ふと気がついてそれを言い出すと、老人は持っている煙管でその額を指しながら大きく笑った。

「はは、これですか。ははははは。どうです、半七先生が面白いじゃありませんか。これでも先生ですぜ。この額をかいてくれたのは、神田の手習い師匠の山村小左衛門という人で、菱秋というのは其の人の号ですよ」

「それにしても、報恩額というのはどういう訳です。なにかのお礼にでも書いてくれたんですか」と、わたしは訊いた。

「そうですよ。まあ、お礼の心で書いてくれたんです。それにはこういう因縁があるので……。又いつもの手柄話をして聴かせますかね」

嘉永三年七月六日の宵は、二つの星のためにあしたを祝福するように、あざやかに晴れ渡っていた。七夕まつりはその前日から準備をしておくのが習いであるので、糸いろいろの竹の花とむかしの俳人に詠まれた笹竹は、きょうから家々の上にたかく立てられて、五色にいろどられた色紙や短尺が夜風にゆるくながれているのは、いつもの七夕の夜と変らなかったが、今年は残暑が強いので、それは姿ばかりの秋であった。とても早くは寝られないので、どこの店さきも何処の縁台も涼みながらの話し声で賑わっていた。半七も物干へあがって、今夜からもう流れているらしい天の河をながめていると、下から女房のお仙が声をかけた。

「ちょいと、お粂さんが来てよ」

「そうか」と、云ったばかりで、半七はべつに気にも留めないでいると、つづいてお粂の声がきこえた。

「兄さん。ちょいと降りて来てくださいよ。すこし話があるんだから」

「なんだ」

団扇を持って降りてくると、お粂は待ち兼ねたように摺り寄って云った。

「あの、早速ですがね、おまえさんも知っているでしょう、甲州屋のなあちゃんを……」

「むむ、知っている」

半七の妹が神田の明神下に常磐津の師匠をして、母と共に暮らしていることは、前にもしばしば云った。そのすぐ近所に甲州屋という生薬屋があって、そこのお直という娘がお粂のところへ稽古に通っているのを、半七も知っていた。

「そのなあちゃんが何処へか行ってしまったのよ」と、お粂は少し小声で云った。

かれの訴えによると、お直のなあちゃんは行方不明になったというのである。お直はことし十三で、手習い師匠山村小左衛門へも通っていた。山村は甲州屋から三町あまり距れているところに古く住んで、常に八九十から百人あまりの弟子を教えていて、書流は江戸時代に最も多い溝口流であった。手習い一方でなく、十露盤も教えていたが、人物も手堅く、教授もなかなか親切であるというので、親たちのあいだには評判がよかった。しかし弟子のしつけ方がすこぶる厳しい方で、かの寺小屋の芝居でもみる涎くりのように、水を持って立たされる手習い子が毎日幾人もあった。少し怠けると、すぐ大叱言のかみなりが頭の上に落ちかかって来るので、いわゆる「雷師匠」として弟子たちにひどく恐れられていた。

手習い子は手ならい草紙で習って、ときどきに清書草紙に書くのであるが、そのなかでも正月の書初めと、七月の七夕祭りとが、一年に二度の大清書というので、正月には別に半紙にかいて、稽古場の鴨居に貼りつける。大きい子どもは唐紙や白紙に書くのもある。七夕には五色のいろ紙に書いて笹竹に下げる。これは普通の色紙でなく、その時節にかぎって市中の紙屋で売っている薄い短尺型の廉い紙きれであるが、この時にも大きい子供はほんとうの色紙や短尺に書くのもある。七月に入ると、手習い子はみな下清書をはじめて、前日の六日

にいよいよ其の大清書にかかるのである。それが一種の学年試験のようなもので、師匠は一々それを審査して、その成績の順序を定めるのであるから、子供ごころにも競争心がないでもない。上位の方に択り出されたといえば、その親たちも鼻を高くするのである。きょうはその大清書の日で、甲州屋のお直も紅い短尺に何かの歌を書かされたのであるが、それがひどく出来がわるいというので師匠の小左衛門から叱られた。

お直は手習いの成績はよい方であったが、今度はどうしたものか非常に出来が悪かったので、笹竹のずっと下の方にかけられた。ここの師匠は成績の順序で色紙をかけるので、第一番のものは笹竹の頂上にひるがえっていて、それから順々に、下枝におりて来るのであった。お直は自分の短尺が同年の稽古朋輩のなかでも甚だしく下の方にかけられてあるのを見て、さっきからもう泣き声になっていたところを、更に師匠からきびしく叱られたので、彼女はとうとう声をあげて泣き出した。師匠の御新造がさすがに気の毒がって、泣いているお直をなだめて帰してやったが、一人で帰すのはなんだか心もとないので、お力という近所の娘を一緒につけて出すと、お直は途中で不意にお力のそばを離れて横町へ駈け込んだまま姿を見うしなってしまった。それはきょうの午頃のことで、お直はそれぎり自分の店へも戻らないのであった。

お粂がそれを知ったのは夕方のことで、もしやこちらにお直は来ていないかと甲州屋から聞きあわせに来たので、だんだんその仔細を訊いてみると、それが手習いの帰りにゆくえ不明となったことが初めて判った。殊に前に云ったような事情があるだけに、お粂も一種の不

安を感じて、日が暮れてから甲州屋をたずねると、お直はまだ帰らないとのことであった。親たちも心配して、親類や友達などの心あたりを方々聞きあわせたが、彼女はどこへも立ち廻った形跡はなかった。

稽古帰りに無断でよそへ廻るなどは、今までかつて例のないことであると、甲州屋では云っていた。念のために師匠のところへも報らせてやると、小左衛門の御新造のお貞もおどろいて駈けつけて来たが、どの人もただ心配するばかりでどうする術も知らなかった。こうしているうちに時刻はだんだんに過ぎてゆくので、人々の不安はいよいよ募って来た。この場合、兄をたのむよりほかはないと思ったので、お粂はそのわけを人々にも話して、あまの河の大きく横たわっている空の下を神田三河町まで急いで来たのであった。

「ねえ、なあちゃんはどうしたんでしょう」と、お粂はこの話を終って兄の顔を見つめた。

「なにしろ、甲州屋でも心配しているだろう」

半七はこれにやや似た探索の経験をもっていた。それは前に云った「朝顔屋敷」の一件であるが、それとこれとは全く事情が違っているらしく感じられた。

「お師匠さんがあんまり叱ったから悪いんだわね」と、女房のお仙がそばから口を出した。

「そりゃあそうですともさ」と、お粂は腹立たしそうに答えた。「かみなり師匠があんまりがみがみ云うからですわ。何か悪い事でもしたというなら格別、たなばた様の短尺なんぞちっとぐらい出来が悪いからといって、そんなに叱る事はないじゃありませんか。まして男と違って女の子ですもの、むやみな叱言を云えば何事が出来するかわからない。一体、あの雷

師匠が判らずやなんですからね、ただむやみに呶鳴り散らせばいいかと思って……。あんなことで子供たちを仕立てて行かれるもんですかよ」

彼女は口をきわめて雷師匠を罵った。まえにも云う通り、小左衛門は手堅い人物であるので、ふだんから自分の手習い子が遊芸の稽古所などへ通うのをあまり懌ばないふうであった。それが自然とお粂の耳にもひびいているので、この場合、かみなり師匠に対する彼女の反感は一層強いらしかった。

「大勢のまえであまり激しく叱り付けられたもんだから、気の小さいなあちゃんは朋輩にきまりも悪し、家へ帰れば又叱られるだろうと思って、可哀そうに何処へか姿をかくしてしまったんですよ。ひょっとすると、井戸か川へでも飛び込んだかも知れない。そうなれば師匠が弟子を殺したも同然じゃありませんか。かみなり師匠の奴が下手人ですわ」と、お粂は泣き声をふるわせて又罵った。

「まあ、静かにしろ」と、半七は叱るように云った。「そんなことは今更云ったって始まらねえ。まあ、落ち着いて考えさせてくれ。甲州屋の娘もまだ十二や十三じゃあ、色気の方は大丈夫だろう」

「そりゃあ大丈夫。そんなことの無いのはあたしが受け合います」

「内輪になにも面倒はあるめえな」

「そんなことはない筈です」

お直には藤太郎という兄がある。両親も揃っている。店の若い衆が二人と小僧が三人、ほ

かにはお広という老婢と、おすみという若い下女がいる。店がかりは派手でないが、手堅い商売をして内証も裕であるらしい。親類たちのあいだにも面倒が起ったという噂も聞かない。したがって今度のお直の家出も、内輪の事情からではないに決まっていると、お粂は保証するように云った。

「そうか」と、半七はまだ考えていた。「だが、おめえばかりの話じゃあ判らねえ。ともかくも甲州屋へ行ってみよう」

「ああ、すぐに来てください」

お粂は兄をうながして表へ出ると、暑いと云っても旧暦の七月の宵はおいおいに更けて、夜の露らしいものが大屋根の笹竹にしっとりと降りているらしかった。

二

甲州屋へ行って、お直の親たちにも逢ったが、お粂が持ってきた報告以外の新しい事実を、半七はなんにも探り出すことが出来なかった。どの人の意見もお粂と同様で、短尺の不出来と師匠の叱言とが気の小さい娘をどこへか追いやったのであるということに一致していた。半七も先ずそう考えるよりほかはなかった。

越ヶ谷の方に甲州屋の親類があって、お直は母につれられて一度行ったことがあるので、よもやとは思うものの、兄の藤太郎が店の者をつれて、あしたの早朝に越ヶ谷へ訪ねてゆくことになっている。甲州屋に取っては、それがおぼつかない一縷の望みであった。娘が家出のことは無論、町役人にも届けて置いた。両国や永代の川筋へも人をやって、その注意を橋番にもたのんで置いた。甲州屋としては、もうほかに施すべき手だてもないので、半七は今更なんの助言をあたえようもなかった。しかし明日になったならば、子分の者どもに云いつけて、せいぜい心あたりを探させてみることを約束して、半七はもう四ツ（午後十時）頃、甲州屋を出ると、まだ半町も行き過ぎないうちに、あとから息を切って追ってくるものがあった。

「もし、親分さん、三河町の親分さん」

女の声らしいので、誰かと思って立ち止まると、それは甲州屋のばあやのお広で、かれはあわただしくささやいた。

「親分さんに少し内々で申し上げて置きたいことがございますが……。旦那やおかみさんは滅多にそんなことを云っちゃあならないと云っているのですが、どうも黙って居りましては気が済みませんので……。ちょいとお前さんのお耳に入れて置きたいと存じますが……」

お広はお直の乳母として雇われたものであったが、その儘そこに長年して、お直が生長の後までもばあやと呼ばれて奉公しているのであった。年はもう四十ぐらいの大柄な女で、ふだんから正直でよく働くと云われていた。

「そこで、どんな話ですえ」と、半七は小声できいた。

「申してもよろしゅうございましょうか」

「なんでもいいから聴かせてもらおうじゃあねえか」

「では、これはただ内々で申し上げるのでございますが……」

まえ置きをして、お広がそっと話し出すのを聴くと、お広はきょうお直と一緒に帰って来たというお力がどうも怪しいというのであった。お力の家は隣り町の倉田屋という瀬戸物屋で、甲州屋とはふだんから心安く交際しているのであるが、倉田屋の女房はひどく見得坊で、おまけに僻み根性が強くて、お広の眼から見るとどうも面白くない質の女であるらしい。倉田屋には二人の娘があって、姉のお紋は今年十八で、妹のお力はお直と同い年の十三である。その姉娘のお紋をお直の兄の藤太郎の嫁にくれるというような話が、かつて双方の親たちのあいだに起った事もあったが、別にたしかに取り極めた約束というでもなくて、まずそのままになっているうちに、甲州屋では今度京橋の同業者の店から嫁を貰う相談がまとまって、この九月にはいよいよ婚礼をすることになった。それを洩れ聞いて、倉田屋ではひどく怒っているらしい。勿論、許嫁というわけでもないので、表向きに苦情を持ち込んでくることは出来なかったが、内心では甲州屋を怨んでいるらしい。殊にひがみ根性の強い倉田屋の女房は、平生あれほど懇意にしていながら、あまりに人を踏みつけにした仕方であると云って非常にくやしがっていることは、出入りの女髪結の口からも聞いている。現にこのあいだ、お広が倉田屋へ買物に行った時にも、女房は口に針を含んでいるような忌味を云った。それらの事情から考えると、倉田屋ではそれを根に持って、藤太郎の妹のお直に対して何かの復讐を加えたのではあるまいかというのであった。

「ふうむ、それは初めて聴いた」と、半七はうなずいた。「だが、唯それだけのことで、ほ

かにはもう証拠らしいものはないんだね」

「それに、倉田屋ではどうもなあちゃんを怨んでいるらしいんです」と、お広はさらに説明した。「なあちゃんはお力ちゃんのところへ始終遊びに行くので、姉さんのお紋さんともよく識っています。それで、こっちでお紋さんをもらうのを見合わせたのは、なあちゃんが何か親たちや兄さんにいいつけ口をしたように思っているらしいんです。一体、お紋さんという子も阿母さんに似た見得坊で、おしゃべりのお転婆で、近所で誰も褒める者はありゃしません。甲州屋でお嫁に貰うのを見合わせたのも、つまりはそのせいなんですが、それがやっぱり身贔屓で、自分の娘の悪いことは棚にあげて、ふだん遊びに行くなあちゃんが、家へ帰って何か讒訴でもしたように思い込んでいるらしいんです。ひがみ根性の強いおかみさんのことですから、それも仕方がありませんけれども、外道の逆恨みでむやみに人を怨んで、おまけに罪もないなあちゃんを疑って、万一そんなことを仕出来したとすれば、どうしたって打っちゃって置くことが出来ません。旦那やおかみさんが何と云おうとも、わたくしが黙っていられません。ねえ、親分さん。そうじゃございませんか」

これはお広の一料簡でなく、甲州屋の親たちも内々のうたがいを懐いていながら、迂濶にそんなことを口外することは出来ないので、わざと自分のあとを追わせて、お広の一料簡のつもりで密告させたのではあるまいかと半七は思った。

「それで、そのお力という娘はどんな子だえ」

「やっぱり阿母さんや姉さんにそっくりで、なかなかお転婆の、強い子なんですよ。からだ

も大きくって、なあちゃんと同い年ですけれど二つぐらいも年上にみえます」
「そうか。それじゃあともかくもその倉田屋へ行ってみよう。もう寝たかも知れねえが、まあ其の家だけでも教えてもらおう」
お広に案内させて、半七は引っ返した。その瀬戸物屋は甲州屋の隣り町角から四軒目で、間口は三間か三間半ぐらいもあるらしく、その店がまえは悪そうもなかった。表の大戸はもう卸してあったが、軒の下に細長い床几を置いて、ひとりの若い者と小僧とが涼んでいた。となりの糸屋は店を半分あけていて、その前にもやはり二、三人の男がたたずんで何かしゃべっていた。どこかで籠の虫の声もきこえた。
途中で申し合わせてあるので、お広は近寄って倉田屋の若い者に声をかけた。
「今晩は……。どうもいつまでもお暑いことでございます」
「やあ、今晩は……」と、若い者も挨拶しながら床几を起ちあがった。「ばあやさん。なあちゃんは帰りましたか」
甲州屋からは昼間と宵と二度も聞きあわせの使が来ているので、ここの店の者共もお直が家出のことを知っていた。まだ帰らないというお広の返事をきいて、若い者も気の毒そうに云った。
「どうしたんでしょうねえ。内のおかみさんも大変に心配しているんですよ。お力ちゃんが一緒に帰ってきて、途中でこんなことがあっちゃあ、甲州屋さんにも申し訳がないと云って……」

「皆さんはもうお寝みになりましたか」と、お広は訊いた。
「ええ、おかみさんもお紋さんもよそから帰って来て、もうすこし前に寝ましたが、起しましょうか」
「いいえ、それには及びません」
「ばあやさんはまだ探して歩いているんですかえ」
「なにしろ心配でなりませんからね。この方とごいっしょに、あてども無しにそこらを探してあるいているんです」
「それは御苦労さまですね。お察し申します」
「どうぞ皆さんによろしく」
こんな挨拶をして、お広はここを立ち去った。半七もあとから黙って付いて行った。夜もおいおいに更けて来て、とても今夜のことには行きそうもないので、半七は町内の角でお広に別れた。
家へ帰る途中で、半七はいろいろに考えた。若い娘が清書の不出来を師匠に叱られて、朋輩の手前、親の手前、面目なさに姿をかくすというようなことは、あながち世間に例のない話でもない。お粂の意見もそれであった。婚礼を破談にされた遺恨から、心のひがんだ女親がその復讐のために、相手の男の妹娘をどこへか隠したのであろうというお広の密告は、少しく穿ち過ぎた想像ではあるが、そんなことが決してないとは云えない。一途に思いつめた女の心のおそろしいことを、半七は多年の経験でよく知っていた。お粂の判断は自然であり、

お広の想像はやや不自然であるが、世のなかには普通の尺度で測ることの出来ない不思議の多いのをかんがえると、半七はまだ容易にどちらへも勝負をつけるわけには行かなかった。彼は賽をつかんだままで神田の家へ帰った。

三

その夜はあけて、七日の朝になった。きょうも朝から暑い日で、あまの河には水が増しそうもなかった。いろがみの林を作った町々の上に、碧い大空が光っていた。

半七は朝飯をすませて、すぐに山村小左衛門の家をたずねると、きょうは五節句で稽古は休みであった。小左衛門もお直の一条では胸を痛めているので、半七を奥へ通すと、丁寧に挨拶して、なんとか探索の方法はあるまいかと頼むように相談した。かれは四十五六の人柄のいい男で、半七の問いに対してこう答えた。

「お直もお力も九つの春から手習いに来て居ります。わたくしも自分の教え子の行状については、ふだんから相当に気をつけて居りますが、お直はおとなしいようでもなかなか強情の気質、お力は男の子のように跳ね返っている女で、人間は少し愚らしく見えます。それでも二人は仲がよかったようで、毎日誘いあわせて通って居りました。今度のことに就いては、わたくしが何かお直をきびしく叱ったので、それで家出したように甲州屋の親たちは思っているようですが、それは大きな間違いです。尤も、わたくしは弟子のしつけ方は随分きびしい方で、世間ではかみなり師匠とか云っているそうですが、いかにわたくしが雷でも、仔細

もなしにむやみに弟子たちを叱ったり折檻したりする筈はありません」

かみなり師匠がお直を叱ったのは、たなばたの清書が不出来な為ばかりではなかった。きのうの朝、お直はこの稽古場でその袂から二通の手紙を取りおとした。師匠はすぐにそれを見つけて、それはなんだと詮議すると、お直はあわててそれを自分のふところに押し込んでしまって、一言の返事もしなかった。封は切らぬから上書だけを見せろと云ったが、彼女は決して見せなかった。誰の手紙かと訊いても、彼女はやはり強情に答えなかった。

まだ十三の小娘で、まさかに色恋の文ではあるまいと思うものの、彼女が強情に隠しているだけに、小左衛門は一種の疑惑と不安を感じて、どうしてもその手紙をみせなければ、今日はいつまでも止めて置くぞと嚇しつけると、お直はわっと声をたてて泣き出した。その声が奥まできこえて、御新造のお貞も出て来た。ふだんから師匠のあまり厳しいのを苦にしているお貞は、とにかく仲裁して何事もなしに済ませたが、清書の不出来で叱られた上に、更に又こんな事件が出来して、お直はいつまでも泣きやまないのを、お貞は賺し宥めて、お力と共に帰してやったのである。甲州屋へ行って、お力はなんと告げたか知らないが、事実はまったく此の通りで、お直が強情に隠していたその文がなんであるかは判らない。甲州屋ではこの事情を知らないで、なにか自分が無理な叱言でも云ったように誤解していられては甚だ迷惑であるから、実はこれから甲州屋へ出向いて、お直の親たちにもその訳を話して聞かせようと思っていると、小左衛門は云った。

「いや、判りました。わたくしは今まで大きに勘ちがいをして居りました」と、半七は微笑

みながら云った。

「就きましては、先生。どうかこの一件はわたくしにお任せ下さる訳にはまいりますまいか。きっと埒をあけてお目にかけます」

「勿論それはこちらからお願い申すので……。そうしますと、わたくしが甲州屋へ行くのはどうしましょうかな」と、小左衛門は少し考えていた。

「どうか、もうしばらくお見合わせが願いたいものですが……」

「承知しました」

新しい獲物をつかんで、半七はかみなり師匠の門を出た。師匠は嘘をつくような人物ではない。今の話がほんとうであるとすれば、お粂の判断は間違っていた。お広の想像も少しく的をはずれているらしい。半七はそれからすぐに甲州屋へゆくと、お直のゆくえはまだ知れないので、店じゅうの者がみな暗い顔をしていた。ゆうべはまんじりともしなかったというので、お広は眼を窪ませていた。

「若旦那はもう立ちましたかえ」と、半七は先ず訊いた。

「まだでございます」と、居あわせた店の者が答えた。

「大層おそいじゃありませんか」

「六ツ半（午前七時）頃には立つ筈だったのですが、暁方から急に頭痛がすると云って、まだ二階に寝て居ります。たぶん寝冷えをしたのだろうというので、今朝ほどは立つのを止めました」

「そうですか、それはあいにくでしたね。お見舞ながら二階へちょいと通ってもよござんすかえ」

「はい、ちょいとお待ちください」

店の者は二階へあがって行ったが、やがて又引っ返して来て、取り散らしてありますが、どうぞお通りくださいと案内した。

二階は六畳と八畳のふた間で、藤太郎は表に向いた六畳に寝ていたらしいが、半七のあがって行った時には、もう起き直って蒲団のうえに行儀よく坐っていた。藤太郎はことし二十歳の小柄の男で、いかにも病人らしい蒼ざめた顔をしていた。

「お早うございます」と、藤太郎は手をついた。「このたびはいろいろと御心配をかけて恐れ入ります」

「どこかお悪いそうですね」と、半七はかれの顔をのぞきながら云った。「なるほど、顔の色がよくないようだ。起きていてもいいのですかえ」

「こんな体たらくで失礼をいたします。たいした事でもございませんが、どうも暁方から頭が痛みまして……。あいにくの時でまことに困って居ります」

医者に診て貰ったかと訊くと、それほどのことでもないらしいので、差しあたりは店の薬を飲んでいると藤太郎は云った。芝に上手な占い者があるので、母は朝からそこへたずねて行った。父は日本橋の親類へ相談に行った。妹のたよりが一向判らないので、家じゅうがゆうべから碌々に寝ないで騒いでいると彼は話した。

「そうすると、おまえさんは病気のよくなり次第に、越ヶ谷とかへ行くつもりですかえ」と、半七はまた訊いた。

「はい。ともかくも念晴らしに一度は行って来たいと思って居ります」

「きっと出かけますかえ」

「はい」

「およしなせえ、くたびれ儲けだ。路用をつかうだけ無駄なことだ」

「そうでございましょうか」と、藤太郎はすこし考えているらしかった。

「なにも首をひねることはねえ。出かけるくらいなら、今朝なぜ直ぐに出て行きなさらねえ」と、半七はあざ笑った。「仮病をつかって、家の二階にごろごろしていることはねえ。さっさと飛び起きて、草鞋をはく支度をするがいいじゃあねえか」

「いえ、決して仮病では……。唯今も申す通り、どうも寝冷えをいたしたとみえて、暁方から頭が痛みまして……」

「あたまの痛てえのはほかに訳があるだろう。倉田屋の姉娘を呼んで来て看病して貰っちゃあどうだね」

藤太郎の顔の色はいよいよ蒼くなった。

「おまえさんは妹を使にして、倉田屋の娘と文のやりとりをしているだろう」と、半七は畳みかけて云った。

「倉田屋の娘もやっぱり自分の妹を使にしている。どっちの妹も稽古朋輩だから、それはまことに都合がいいわけだ。ここの妹がきのう雷師匠に嚇かされたのは、清書が不出来のせいじゃあねえ。稽古場で手紙を落としたからだ。男のか女のか知らねえが、それを向うへ渡そうとするのか、それとも向うから受け取ったか、どっちにしてもお前さんと倉田屋の姉娘とは係り合いを逃がれられねえ。さあ、今更となっていつまでも隠し立てをしているのは、よくねえことだ。親たちに苦労をかけ、家じゅうの者をさわがして、お前さんが仮病をつかって平気で寝てもいられめえじゃあねえか。いや、仮病はわかっている。どうで越ヶ谷へ行っても無駄だということを百も承知しているから、頭が痛えの、尻が痒いのと云って、一寸逃がれをしているのだ。おまえさんの顔の色の悪いのは病気じゃあねえ。ほかに苦労があるからだ。薄ぼんやりしている倉田屋の妹娘を引っ張り出して、あたまから嚇かして詮議すれば何もかも判ることだが、そんなことはしたくねえから、それでこうして膝組みでおまえさんに訊くんだ。一体おまえさん達は今までどこで逢っていたんだ。どうで遠いところじゃあるめえ。真っ先にそれを教せえて貰おうじゃあねえか」

藤太郎は蒲団のうえに手をついたままで、しばらく顔をあげなかった。その蒼ざめた額からは汗のしずくが糸をひいたように流れ落ちていた。

四

半七は甲州屋を出て、池の端へ行った。近所で女髪結のお豊の家をきくと、すぐに知れて、それは狭い露路をはいって二軒目の小さい二階家であった。

格子にならんだ台所で、三十三四の女が今夜のたなばたに供えるらしい素麺を冷やしていた。半七は近よって声をかけると、かれは主婦のお豊であった。ここに誰か倉田屋の人は来ていないかと訊くと、お豊は不安らしい眼をしてじろじろ眺めながら、誰も来ていないと冷やかに答えた。

「それでは、甲州屋さんから誰かまいって居りますまいか」

「いいえ」と、お豊はやはり無愛想に答えた。

「まったく来て居りませんでしょうか」

「来ていませんよ」と、お豊は煩さそうに云った。「一体おまえさんはどこから来たんです」

「甲州屋からまいりました」

お豊は黙って半七の顔を見つめていると、半七はにやにや笑いながら云い出した。

「いえ、御心配なさることはありません。わたしは甲州屋の藤さんに頼まれて来たんです。倉田屋のお紋さんと藤さんが始終ここの二階へ来ることもみんな知っています。御存じだかどうだか知りませんが、甲州屋のなあちゃんが昨日から家出をして今にゆくえが知れないので、家では大騒ぎをしているんです。藤さんが来る筈ですが、すこし加減が悪くって、けさから寝込んでいるので、わたしがその使をたのまれて来ました。なあちゃんは昨日から一度もここへ来ませんかしら」

「いいえ、一度もお見えになりませんよ」

詞づかいは余ほど丁寧になったが、彼女は見識らない使の男にたいしてやはり油断しないらしかった。

「もし、おかみさん、あの壁にかかっているのはなんですえ」と、半七は伸び上がってだしぬけに奥をゆびさした。

残暑の強い朝であるから、そこらは開け放してあった。格子のなかの上がり口には新しい葭戸が半分しめてあったが、台所と奥とのあいだの障子は取り払われて、六畳くらいの茶の間はひと目に見通された。助炭をかけた長火鉢は隅の方に押しやられて、その傍には古びた箪笥が置いてあった。それにつづいた鼠壁には、どこからかの貰いものらしい二、三本の団扇が袋に入れたままで逆さに懸かっていた。

「あの団扇ですかえ」と、お豊は奥を見かえった。

「いいえ、あの団扇の隣りに懸かっているのは……。あれはなんですえ。お草紙のようですね」

「うちの子供のお草紙です」

「ちょいと持って来て、見せてくれませんか」

「お草紙をどうするんですよ」

「どうしてもいい、用があるから見せろと云うんだ」と、半七は少し声をあらくした。「強情を張っていると、おれが行って取ってくる」

草履をぬいで台所から上がろうとすると、お豊はさえぎるように起ちあがった。

「おまえさん。人の家へむやみにはいって来て、どうするんですよ」

半七はつかつかと茶の間へ踏み込んで、団扇のとなりに懸けてある一冊の清書草紙を手に取った。

「今聞いていれば、うちの子供のお草紙だと云ったな。嘘つき阿魔め。ここの家にどんな子がいる。猫の子一匹もいねえじゃあねえか。六十幾つになるつんぼの婆さんとおめえの二人っきりだということは近所で訊いて知っているぞ。第一この草紙の表紙になんと書いてある。庚戌、正月、なお……このなおというのはだれの名だ。世間におなじ名はあっても、ここでこの草紙を見つけた以上は云い抜けはさせねえ。甲州屋のむすめの手習い草紙がどうしてここに懸けてあるんだ。仔細をいえ。わけを云え」

お豊は唖のように突っ立っていると、半七は片手に草紙を持ちながら、かた手で彼女の腕をつかんだ。

「婆はどこへ行った」

「近所へ買物に出ました」と、お豊は口のなかで答えた。

「そんなら二階へ案内しろ」

彼女を引き摺るようにして、せまい掛け階子をのぼってゆくと、二階の四畳半には誰もいなかった。半七は念のために押入れをあけて見た。古い葛籠をゆすってみた。

「まあ、坐れ」と、かれは再びお豊の腕をつかんで、四畳半のまんなかに引き据えた。「これ、正直に云え。さっきは甲州屋の使と云ったが、御用で調べるのだ。甲州屋のお直はきのうここへ来たか」

草紙を眼のさきに突きつけられて、お豊はもう包み切れなくなった。かれは恐れ入って白状した。甲州屋のお直はここの家へ来たのである。きのうの午頃にお豊が得意場から帰ってくると、途中で倉田屋の娘と甲州屋のむすめが二人連れで来るのに逢った。お直はしきりに泣いているのを、お力がなだめているらしかった。どちらも自分の得意場の娘であるので、お豊は見すごし兼ねて立ち寄って、もしや喧嘩でもしたのではないかと訊くと、お直が師匠さんに叱られたのであると判った。それもほかのことで叱られたとあれば、お豊もいい加減になだめて別れるのであったが、お力から渡されたお紋の手紙を稽古場で取り落して、それを雷師匠に見つけられたのであると聞いて、お豊もすこし驚いた。

甲州屋の息子と倉田屋の姉娘とのあいだには、半七が睨んだ通りの関係が結びつけられていた。親たち同士は単に口さきの軽い話ぐらいに過ぎなかったが、若いもの同士は更に深入りをして、おなじ手習い師匠にかよう双方の妹がいつも文づかいの役目を勤めさせられていた。女髪結のお豊は一種の慾心から時々自分の二階をお紋と藤太郎とに貸していた。こういうわけで、お豊もこの事件に係り合いがあるだけに、秘密の手紙を師匠に見つけられたと聞いて顔色をくもらせた。相手は名代のかみなりであるから、おそらくこのままでは済ませまい。お直が怪しい手紙を隠し持っていたということを、甲州屋の親たちに一応通知するかも知れない。そうして、二人の秘密が発覚したあかつきには、その取り持ちをした自分も当然その係り合いを逃がれることは出来ない。双方の親たちからやかましい掛け合いをうけた上に、二軒の得意場をうしなうのは知れている。しかも彼女が現在住んでいる池の端の裏屋は

甲州屋の家作であるから、ここもおそらく追い立てられるであろう。そればかりでなく、そんな噂が世間にひろまれば、自分の信用はひどく傷つけられて、更に幾軒の得意場を失うかも知れない。あるいは此の土地で稼業が出来ないようになるかも知れない。それからそれへと考えてゆくと、お豊はなかなか落ち着いていられなくなった。

なにしろ往来ではどうにもならないというので、彼女はともかくもお力とお直を自分のうちへ連れて行って、二人の娘の持っている清書草紙を下の壁にかけて置いて二階へ通した。お豊は更にお紋と藤太郎をよんで来て、なんとか善後策を講ずるつもりで、すぐ甲州屋へ行ってみると、息子はあいにく留守であった。倉田屋の店には娘がいたので、お豊はそっと呼び出してささやくと、お紋もおどろいて一緒に出て来た。

女髪結の家の二階で、お紋は自分の妹とお直に逢った。かれはお直の不注意を激しく責め立てた。それが雷師匠に輪をかけたかとも思われるほど凄まじい権幕であるので、お豊は又びっくりした。しかしそれにはわけのある事で、お紋がこの頃すこしく取りのぼせているらしいことをお豊も内々知らないではなかった。若い同士の秘密を知らない甲州屋では、今度ある媒妁口に乗せられて、倉田屋の話は忘れたように、よそから藤太郎の嫁をもらうことになった。気の弱い息子は正面からそれに反対する勇気もなくて、ただ内々で苦しんでいるうちに、その縁談はすべるように進行し、近々結納を取りかわすまでに運ばれて来たので、それを知ったお紋は決して承知しなかった。かれは男の不実をはげしく責めて、一体わたしというものをどうしてくれるのだとせまったが、男の挨拶がとかく煮え切らないので、お紋は

焦れて怨んで、この頃ではなんだか半病人のようになっていた。

倉田屋の親たちも無論に怒っていた。しかし自分の娘と藤太郎との関係がそんな峠まで登りつめているとはさすがに気がつかないで、いたずらに蔭口を云うくらいですごしていたが、若い娘の胸の火はこの頃の暑さ以上に燃えて熱して、かれの魂は憤怒に焼けただれていた。かれは毎日のように長い手紙をかいて、それを妹に持たせてやって、男の妹の手から憎い男に突き付けさせていた。それほどに彼女の恨みの籠った手紙を、お直が不用意に取り落したと聞いて、お紋はむやみに怒った。一種の鬼女になっているような彼女は、嚙みつくようにお直に食ってかかって、こんなことでは今までの手紙もたしかに兄さんにとどけてくれたかどうだか判らないなどと云った。それでもお豊の仲裁で、その方は先ずどうにか納まったが、一方の藤太郎が出て来ないのと、一方のお紋は半気違いのようになっているのとで、お豊が心配している肝腎の善後策は一向に要領を得なかった。彼女もこれには当惑して、お紋をなだめて待たせて置いて、再び藤太郎を呼び出しにゆくと、彼はまだ戻らないとのことであった。或いは隠れているのではないかとも疑ったが、しいて詮議もならないので其の儘むなしく帰ってくると、留守のあいだに大椿事が出来していた。

二階にはお紋の姉妹とお豊の母とが黙って坐っていた。どの人の顔も真っ蒼になっていた。お豊は又おどろいて仔細をきくと、かれが出て行ったあとで、執念ぶかいお紋はお直にむかって、その兄に対する恨みを又さんざんに列べ立てた。それがだんだんに募って来て、わたしがこうして兄さんに捨てられたのも、おまえが蔭へまわって何か讒訴をしているからに相

違ないと云い出した。それにはお直も黙っていなかった。彼女は持ち前の強情から飽くまでもそれを否認して、たがいに云い争っているうちに、お紋はいよいよ逆上して、いきなりにお直の胸倉を引っ摑んで小突きまわすと、どうしたはずみか彼女の喉を強く絞めて、十三の小娘はもろくも息が絶えてしまったのである。お豊もそれを聞いて呆気に取られた。よく見ると、まったく嘘ではない。お直は冷たい死骸となってそこに横たわっているので、お豊はあわてて出来るだけの介抱をした。水をのませても、水天宮様の御符を飲ませても、擦っても揺ぶっても、お直はもう正体がないので、彼女も途方にくれてしまった。

こうなっては、とても自分ひとりの知恵や分別にはあたわないので、お豊は汗を流しながら再び倉田屋へかけ付けた。かれはお紋の母を呼び出して、そっとこの始末を訴えると、母もびっくりして半分は夢中で駈けて来たが、死んでしまったお直を生かす術はなかった。表向きにすれば、お紋は無論に下手人である。この上はなんとかして此の事件を秘密に葬らなければならないと、母はお豊と額を突きよせて密談の末に、ようやく案じ出したのがお直の家出という狂言の筋書で、お力には母からよく云いふくめて、お直が途中からどこへか姿を隠したように甲州屋へ報告させてあった。師匠に当日叱られたということが、かれらに取ってはおあつらえ向きの材料で、お紋の母はそれから趣向をうみ出して、一個の狂言作者となりすましたのであった。

それにしても、お直の死骸をどこへか処分しなければならないので、お豊は更にお紋の母と相談の上で、谷中まで出て行った。そこに住んでいる石屋職人の千吉というのはお豊の叔

父にあたるので、彼女は仔細をあかして死骸の始末をたのむと、千吉は慾に目がくらんで引き受けた。かれは日の暮れるのを待って、一挺の辻駕籠を吊らせて、駕籠屋の手前は病人のように取りつくろって、お直をそっと運び出して行った。

これで万事解決したと思っていたが、お豊は壁にかけてある清書草紙を忘れていた。お力は帰るときに自分の草紙だけを持って行ったが、お直の分はそのままに残っていた。あまりに慌てていたのと、ふだんから草紙などというものに注意していないのとで、お豊は今朝になってもその草紙には気がつかなかった。そうして、動かない証拠を半七に押えられたのであった。

甲州屋の藤太郎は半七にむかって、お紋とのわけを正直に白状してしまった。二人が女髪結の家で出逢っていることも打ち明けた。しかし、そこの二階でこんな椿事が出来していることを、彼は夢にも知らなかった。半七もさすがに思い付かなかった。たとい事情がどうであろうとも、人間ひとりが殺されては一大事である。なるべくはその死骸を片付けないうちに、石屋の千吉を取り押えてしまいたいと思ったので、彼はお豊を案内者として、すぐに谷中へ急いで行った。

「お話は先ずこれぎりです」と、半七老人は云った。「お直は生きていましたよ」

「生き返ったのですか」と、わたしは訊いた。

「そうですよ。もとが女の手で喉を絞めたんですから、一時は息がとまっても、また生き返

ったんです。駕籠にゆられて行く途中で自然に息を吹き返したのですが、駕籠屋は始めから病人だと思っているので、別に不思議にも思わなかったらしいんです。千吉はおどろいたんですが、まあともかくも自分の家まで連れ込ませて、駕籠屋を帰してしまいました。死んだ者が生きかえって、本来ならば喜ぶ筈なんですが、この千吉というのが良くない奴で、生かして帰してしまえば倉田屋からたんまりした礼金も貰えない。いっそ黙って何処へか売り飛ばして自分のふところを温めれば、一挙両得だという悪法を企んで、お直には猿轡をはませて戸棚のなかへ押し込んで置いたんです。そうして、倉田屋の方へは、その死骸を人の知らないところへ埋めたようなことを云って約束の礼金を貰い、その後も相手の弱味につけ込んで、時々ゆすりに行こうぐらいに考えていたんです。昔はこういう悪い奴が随分ありました。もうひと足おそいと、お直はどこかの山女衒の手に渡されて、たとい取り返すにしても面倒でしたが、いい塩梅にすぐに取り返してしまいました」

お直が無事に戻って来たので、甲州屋では世間の手前をはばかって万事を内分にしたいと云った。倉田屋からも甲州屋の方へしきりに泣きついて来た。ほかの関係者はともかくも、千吉だけは免して置かれないと思ったが、かれを表向きに突き出せば関係者一同もその係り合いを逃がれられないので、半七は我慢して彼をも見逃がすことにした。それが動機となって甲州屋にはお紋という嫁が出来た。

自分の弟子が救われたので師匠の山村小左衛門は半七のところへわざわざ挨拶に来た。かれは感謝の意を表するために、報恩額の三字を大きく書いた。甲州屋ではそれを立派な額に

仕立てて半七に贈ったのであった。

「半七先生のいわれはこうですよ」

老人は再び大きい声で笑った。わたしも釣り込まれて笑い出した。

解説

縄田一男

遅い桜も散りつくして、お江戸の夏がはじまった四月、ことしは梅雨が早く来るのか、曇った日がつづいて、今夜も薄雲が月をかくしている——この文章は、都筑道夫の『なめくじ長屋捕物さわぎ』の一篇「両国八景」の冒頭だが、これを見ても分かるように、四月ともなれば江戸は既に夏。端午の節句はもうそこまでやって来ており、船遊びに花火見物、そして山王祭と、江戸の夏は行事も盛り沢山。『大江戸歳時記捕物帳傑作選』の第二弾〈夏の巻〉は、選び抜かれた捕物名人たちが、そうした夏の風物詩の中にひそむ奸計を見事に暴く秀作七篇を収録。謎ときの醍醐味と江戸の風物詩という捕物帳の二つの面白さを充分に味わっていただきたいと思う。

〈春の巻〉の巻頭に、捕物帳を季の文学であると定義した白石潔の「探偵小説の郷愁について——軍閥と闘った『捕物帳』」を収録したのにならって、以後の巻では、それぞれ捕物帳の実作者の手になるエッセイを巻頭に据えてみることにした。その第一弾ともなれば、やはり、岡本綺堂の「半七紹介状」に登場してもらわなくてはならないだろう。このエッセイは、明治二十四年四月、浅草公園弁天山の惣菜「岡田」へ午飯を食いに入った若い新聞記者が、ふとしたことから知り会った老人から、友人の岡っ引きの功名譚を聞かされ、それが半七のモデルになったという、いわば『半七捕物帳』誕生縁起ともいうべきもの。岡本綺堂自身、「半七老人は実在の人か——それについて屢々問いあわせを受けます。勿論、多少のモデルが無いでもありませんが、大体に於て、架空の人物であると御承知下さい」（「半七捕物帳の思い出」）といいつつ、その一方で、「彼（半七）は高野長英の隠れ家に向った捕方の一人であると説く人もある。彼は維新後も警視庁に奉職していたという人もある。—略—それらの諸説に対しても、私は、やはり明瞭に答えることを敢えてしない。実在の人物か、架空の人物か、それは読者の想像にまかせて置いた方が寧ろ興味が多かろうと思うからである」（昭和三年、春陽堂版「はしがき」）といっている。人気の出た小説や映画の主人公が、あたかも実在の人物であるかのごとく読者の内部でその像を結んでいくのは、いわずもがなのことであり、これらの文章は、そうした経過を如実に物語っているものといえよう。ついには、〝半七塚〟（浅草寺裏、弁士塚斜め向かい）まで建立されたこの不世出の主人公の魅力の一端をさぐるべく、巻頭に収録した次第である。

さて、いよいよ、肝心の捕物譚だが、解説の順番は必ずしも収録順と同じではないことをお断わりして、まずは、〈春の巻〉の「歎きの遊女」に続いて横溝正史の『人形佐七捕物帳』（現・春陽文庫）の中から「五つ目の鍾馗」に登場してもらうことにした。端午の節句も間

近な四月下旬、人形師の釘屋藤兵衛が殺されて、その仕事場から鍾馗大臣の両眼に使われていた夜光珠が盗まれるというのが物語の発端だ。事件の背後にはさる大身の旗本のお家騒動が絡んでおり、それを裁く佐七の慧眼もさることながら、何よりも、藤兵衛のいい残した「五つ目の鍾馗」の正体の意外性に驚かされる一篇である。端午の節句といえば、七歳以下の男の子のいる家では武家も町家も幟を立てて甲冑人形を飾り、子供たちは菖蒲打ちをして遊び、諸侯は柳営へ粽を献上し、町家では手づくりの粽や柏餅を食したという。ちなみに、幟や武者人形は雛市と同じようにして、四月二十五日から五月四日まで売られた。端午の節句は今日まで形骸化せずに残っている行事であり、五月五日をタイムリミットに佐七が凱歌をあげる本篇は、〈夏の巻〉のトップを飾るにふさわしい作品といえよう。

続いては、本シリーズには初登場、城昌幸の『若さま侍捕物手帖』（現・春陽文庫、光文社文庫）から「幽霊駕籠」（原題「隅田川恋魔者」）のお目見えである。この作品の主人公の若さまは、年の頃なら三十前後、きりりとした男前で、どこかの御大身という以外には姓名・身分とも一切不明。ほとんどの場合、若さまが船宿喜仙の看板娘おいとを相手に酒を飲んでいると、お上御用聞き遠州屋小吉が難事件の尻を持ち込むのがはじまりである。半七、右門、平次、佐七といった捕物名人が岡っ引きや同心という職業探偵であるのに対し、若さまの魅力は粋で洒落っ気たっぷりな素人探偵である点だろう。毎年、五月二十八日は両国の川開きで、この日は同時に花火の上げ初め。大小さまざまの船が川を行き来し、橋の上も見物人で身動きのとれぬほどになる。本篇ではこうした極めつけの夏の風物詩を背景に、怪談

仕立ての愛憎劇が展開される。若さまの推理は、時に、直感的すぎるきらいもあるのだが、三味線の間のくだりなど、小味なひねりをきかせた設定は心憎いばかりだ。なお、作中で「この間の猿回しの事件」とあるのは、若さまが、この事件の前に解決した「恩愛猿人真似」を受けたものである。

「幽霊駕籠」に続いて怪談をもう一篇。ただし、こちらは、明治の御世を舞台としているだけに設定もぐっとモダンになっている。日影丈吉の『ハイカラ右京探偵暦』（現・教養文庫）は、村上元三の『捕物そば屋』（現・徳間文庫）や坂口安吾の『明治開化安吾捕物帖』（現・富士見時代小説文庫）と並ぶ、明治期を舞台にした連作探偵譚の傑作である。厳密にいえば捕物帳とはいえないかもしれないが、それに準ずるものとしてここに収録した。この連作の魅力は、何といっても、明治の中葉にその名をとどろかした怪人物であり、凄腕の国際スパイであるともいわれる主人公・右京慎作の特異性であろう。「幽霊買い度し」は、シグモン・ジイクというシカゴの大金持ちが、幽霊の出る城を買い取りに日本にやってくるというのが発端で、このあたりの発想は、買い取られた城と一緒に幽霊まで引っ越しをしてしまうという往年の名画「幽霊西へ行く」あたりからヒントを得たものだろうか。本篇では、この後、奇怪な墓荒らしの一味やお化け役者やらが現れて、開化の御時勢も百鬼夜行の様相を呈してくる。敵役の吾来警部の活躍もファンには嬉しく、フランス料理のガストロノミーの大家、日影丈吉の正しくハイカラ趣味に彩られた一篇である。新・旧、二つの怪談を読み比べてみるのも一興だろう。

フランス仕込みという点では、岸田国士に師事し、パリに演劇を学びに留学したことのある久生十蘭も極めつけだ。彼の創造した『顎十郎捕物帳』（現・創元推理文庫）の主人公・仙波阿古十郎は、どういう始末で、こんな妙な顔が出来上ったものか、といわれるくらいおそろしく顎の長いことから〝顎十郎〟と呼ばれる異相の持ち主。つまりはロスタンの「シラノ・ド・ベルジュラック」の鼻に当たるのが顎であり、シラノの前で鼻のことに触れた人間が命を落としているのと同様、顎十郎の前で顎を話題にした奴も似たような目に遭っている。この顎十郎、甲府勤番の勤めを終え、フラリと舞い戻った江戸で、敵役の同心藤波友衛を尻目に、叔父の与力筆頭森川庄兵衛を助けて縦横無尽の活躍を示す。今回収録した「氷献上」で扱われている加賀家の雪振舞いは、作中でも説明があるように氷とはいっても、土中に雪塊を埋めたもので、実際はあまりきれいなしろものではなかったらしいが、今日のように冷蔵庫で氷ができるなどとは及びもつかぬ時代のこと、その涼味も格別だったに違いない。この加賀屋敷は、現在では東京大学の敷地となっており、加賀百万石の格式を示す御守殿門たる赤門が、重要文化財に指定されていることは余りにも有名。『顎十郎捕物帳』といえば、『遠島船』や『両国の大鯨』等、トリッキーなものばかり語られがちだが、こうした情味あふれる話にも捨てがたいものがある。

その『顎十郎捕物帳』に惚れ込み、贋作たる『新・顎十郎捕物帳』（現・講談社文庫）までものしてしまったのが都筑道夫である。本書にはその都筑道夫の代表作『なめくじ長屋捕物さわぎ』（現・角川文庫、光文社文庫）から「坊主めくり」を収録した。このシリーズの

特色は、江戸の風物詩を作中にちりばめるという捕物帳の定石を踏まえつつも、推理作家である作者が日頃から主張していた「論理のアクロバット」としての本格ミステリーの体裁をとっていることで、近年ではこれに山中貞雄ばりの市井譚の趣きが加わわり、円熟の境地を示している。砂絵のセンセー以下、集団探偵を主人公としているのも珍しく、この作品では、天王まつりが終わった六月十五日の朝に、祭りで使われた大行燈の枠に女の生首がのっていた事件の謎が扱われている。天王まつりとは、京都の八坂神社を中心として全国的に行われる祇園会のことで、ちょうどこの事件の発端となった十五日から、今度は、九月十五日の神田明神の祭礼とともに、江戸二大祭として名高い山王祭がはじまり、江戸の夏はいやが上にも盛り上がる。山王祭を扱った作品には佐々木味津三の『右門捕物帖』（現・春陽文庫）中の「笛の秘密」や久生十蘭の『平賀源内捕物帳』（現・創元推理文庫）中の「山王祭の大象」等、定番ともいうべき秀作があるが、天王まつりを扱ったものは余り書かれていないので、今回は、都筑道夫作品の方を収録した次第である。

夜、誰もともしていないのにひとりでに火が燃えることを狐が口から吐いているのだろうという俗説から〝狐火〟といい、その狐火が並んで嫁入り行列の提灯を思わせるものを、〝狐の嫁入り〟といった。〈春の巻〉の「花見の留守」に続いて再び登場する野村胡堂の『銭形平次捕物控』（現・富士見時代小説文庫）は、その名もズバリ「狐の嫁入」。荒川堤でたびたびこの怪奇現象が現われ、ついには殺人事件にまで発展する。江戸を二里離れた尾久を舞台に平次が活躍するのが異色で、永井荷風は、この作品の舞台となっているあたりを「堤

の南は、尾久から田端につづく陋巷であるが、北岸の堤に沿っては隴畝と水田が残っていて、茅葺の農家や、生垣のうつくしい古寺が、竹藪や雑木林の間に散在している。梅や桃の花がいかにも田舎らしい趣きを失わず、よくあたりの風景に調和して見えるのは此のあたりである」と記している。のどかな田園風景の中での平次と八五郎の活躍もさることながら、この作品はミステリーとしての結構が優れたまとまりを示しており、シリーズの中でも完成度の高い一篇といえるのではないだろうか。

さて、本書〈夏の巻〉は、岡本綺堂の『半七捕物帳』（現・光文社文庫）から採った「半七先生」で幕を閉じる。この作品は、いつも半七を訪ねてその功名譚を筆録している新聞記者のわたしが、半七の家の座敷に掛けられている〝報恩額　半七先生へ贈る〟と記された額の由来を聞かされる話である。七夕にちなんだ事件だけに、若い男女の一途な恋情がとんだ愁嘆場を迎えそうになるが、ぎりぎりのところで明るい結末へと転じており、武骨ながら好感の持てる手習いの先生〝雷師匠〟もユーモラスな味をかもし出している。毎年、七月七日に行われる七夕祭は、今さら説明するまでもなく、牽牛、織女という夫婦星が年に一度の逢瀬を交すという伝説から生まれた祭りだが、この日は夕方ともなれば、大勢の竹売りが「竹やア、竹やア」の声とともに町中を売り歩き、子供の有無や貧富に関わりなく、誰もが青竹に短冊をつけたものを立て上げたという。また『江戸府内絵本風俗往来』（平凡社、東洋文庫）からこの作品に関係のあるくだりを書き出すと「此数日以前より幼児学童筆の師は七夕の詩歌を手本に書して習はしめ、七夕を立つる色紙さへかきて上る時は筆道の上達するなど申し伝

へたるなり」ということになる。『半七捕物帳』も、佐七や平次と同じく、二度目の登場だが、この連作だけは、捕物帳の原点を見つめ直す意味で必ず各巻に一篇ずつ収録していくつもりである。なお、半七を楽しむためには、本書と同じ版元の河出書房から今井金吾の好著『平七は実在した――「半七捕物帳」江戸めぐり――』が刊行されているので、そちらも御覧いただきたい。最後に、作中で「今年は残暑が強いので、それは姿ばかりの秋であった」とあるように、七月七日は厳密にいえば江戸では秋である。〈春の巻〉に四月八日の灌仏会を扱った泡坂妻夫の「泥棒番付――夢裡庵先生捕物帳――」が収録されているように、本書も、この一作をもって次なる〈秋の巻〉へのつなぎとしたい。

『江戸文学地名辞典』（浜田義一郎監修、東京堂出版）や『東都歳時記』（斎藤月岑、朝倉治彦校注、平凡社、東洋文庫）等のページを繙きつつ、次巻をお待ち願いたい。

大江戸歳時記 捕物帳傑作選 夏の巻

◎

著者 野村胡堂 他

一九九〇年五月二五日 初版印刷
一九九〇年六月 四日 初版発行

発行者 清水勝
発行所 河出書房新社
〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二-三二-二
☎〇三-四〇四-八六一一（編集）
〇三-四〇四-一二〇一（営業）
振替口座（東京）〇-一〇八〇二

デザイン 栗津潔

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
©1990 Printed in Japan
ISBN4-309-40273-9

A感覚とV感覚　稲垣足穂
天体嗜好症　稲垣足穂
吸血鬼幻想　種村季弘
アナクロニズム　種村季弘
ペてん師列伝　種村季弘
怪物の解剖学　種村季弘
悪魔礼拝　種村季弘
日本怪談集（上・下）　種村季弘
イコノソフィア　中沢新一
伊藤晴雨物語　団鬼六
塗りつぶした顔　戸板康二
才女の喪服　戸板康二
浪子のハンカチ　戸板康二
ハードボイルド志願　長部日出雄
犯罪専科　小沢信男
囲碁殺人事件　竹本健治
未知海域　宗田理
文豪ミステリー傑作選①　夏目漱石他
文豪ミステリー傑作選②　黒岩涙香他
犬のミステリー傑作選　鮎川哲也編
猫のミステリー傑作選　鮎川哲也編
京都ミステリー傑作選　山村美紗他
鎌倉ミステリー傑作選　鮎川哲也他
横浜ミステリー傑作選　斎藤栄他
神戸ミステリー傑作選　陳舜臣他
札幌ミステリー傑作選　渡辺淳一他
軽井沢ミステリー傑作選　土屋隆夫他
沖縄ミステリー傑作選　西村京太郎他
伊豆ミステリー傑作選　島田一男他
名古屋ミステリー傑作選　夏樹静子他
博多ミステリー傑作選　石沢英太郎他
銀座ミステリー傑作選　三好徹他
浅草ミステリー傑作選　都筑道夫他
新宿ミステリー傑作選　半村良他
仙台ミステリー傑作選　小林久三他
長崎ミステリー傑作選　高木彬光他
紀州ミステリー傑作選　津本陽他
津軽ミステリー傑作選　高木彬光他
金沢ミステリー傑作選　五木寛之他
瀬戸内ミステリー傑作選　連城三紀彦他
大阪ミステリー傑作選　黒岩重吾他
学園ミステリー傑作選①　赤川次郎他
学園ミステリー傑作選②　阿刀田高他
不思議の国の（アリス・ミステリー傑作選）　中井英夫他
サイコ・ミステリー傑作選　江戸川乱歩他

古代史ミステリー傑作選　石沢英太郎他
占いミステリー傑作選　星新一他
メルヘン・ミステリー傑作選　仁木悦子他
お伽噺ミステリー傑作選　佐野洋他
大江戸捕物帳傑作選　春の巻　岡本綺堂他
大江戸捕物帳傑作選　夏の巻　野村胡堂他
文豪ナンセンス小説選　夏目漱石他
破局のおすすめ　新宇宙塵SF傑作選①　山田正紀他
無限のささやき　新宇宙塵SF傑作選②　夢枕獏他
推理教室　江戸川乱歩他
楡の木荘の殺人　鮎川哲也
青いエチュード　鮎川哲也
日本の怪談（一）（二）　田中貢太郎
中国の怪談（一）（二）　田中貢太郎
小泉八雲怪談奇談集　上・下　小泉八雲　森亮他訳
日本版ホームズ贋作展覧会（上）　山田風太郎他
日本版ホームズ贋作展覧会（下）　北杜夫他
芭蕉三百句　山本健吉
奥の細道を読む　山本健吉
万葉大和を行く　山本健吉
定家百首　良夜爛漫　塚本邦雄
新歳時記（春）　平井照敏
新歳時記（夏）　平井照敏
新歳時記（秋）　平井照敏
新歳時記（冬）　平井照敏
新歳時記（新年）　平井照敏
愛の詩集（日本編）　平井照敏編
三匹の犬たち　江藤淳
このアメリカ　山崎正和
噺家のはなし　宇野信夫
巴里好日　河盛好蔵
猫の墓―父・漱石の思い出　夏目伸六
作家の食卓　山本容朗
メディチ家の人びと　中田耕治
メディチ家の滅亡　中田耕治
花咲く乙女たちのキンピラゴボウ（前後篇）　橋本治
蓮と刀　橋本治
暗い野　橋本治
視想への旅立ち・討論集　五木寛之他
四百字のデッサン　野見山暁治
ボトルの方へ　酒神讃歌　田村隆一
祈ること　瀬戸内寂聴
愛すること　瀬戸内寂聴
書くこと　瀬戸内寂聴
祖母、わたしの明治　志賀かう子

みんな笑ってる　内田良平
さよならがいいたくて　荒木一郎
雲ながるる果てに　白鷗遺族会編
安吾史譚　坂口安吾
安吾新日本地理　坂口安吾
安吾新日本風土記　坂口安吾
日本論　坂口安吾
新説国定忠治（上・下）　檀一雄
夕日と拳銃（上・下）　檀一雄
君の名は①～④　菊田一夫
夜の傾斜（上・下）　船山馨
幕末剣士伝　船山馨
幕末の女たち　船山馨
海の壁　船山馨
野望　船山馨

落日の門　船山馨
せどり男爵数奇譚　梶山季之
合わぬ貝　梶山季之
性欲のある風景　梶山季之
夕陽将軍　小説・石原莞爾　杉森久英
参謀・辻政信　杉森久英
苦悩の旗手　太宰治　杉森久英
浪人の王者　頭山満　杉森久英
小説　坂口安吾　杉森久英
昭和の怪物たち　杉森久英
無冠の旗（上・下）　夏堀正元
福沢山脈（上・下）　小島直記
櫻の橋　中薗英助
下々の女（上・下）　江夏美好
針千本　江夏美好

あゝ東京行進曲　結城亮一
日本武術神妙記　中里介山
日本剣豪列伝　直木三十五
私学校蜂起　尾崎士郎
無刀取り　五味康祐
剣には花を（上・下）　五味康祐
無明斬り　五味康祐
駿河城御前試合　南條範夫
鳩笛を吹く剣士　南條範夫
廃城奇譚　南條範夫
古城秘話　南條範夫
雪姫伝説　南條範夫
海賊商人　南條範夫
傍若無人剣　南條範夫
おかしな侍たち　神坂次郎